

ハイスクール・フリー ト 灰色の狼娘たち？

黒助さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ローレライの乙女たちのうらにあつたかもしれない、もう一つの物語。

ハンナ・デーニッツは海洋学校へと入学すると、ある女の子と出会う。それは運命の出会いであり、かけがえのない友達となる――

入学後、様々な出会いを経て五年の月日が流れると、彼女たちは更に過酷な運命へと投じられたのだった。

彼女たちに与えられた戦闘艦はU―ボート。本来なら男子校のものであったが、様々な偶然から彼女たちはその船に半年、乗ることとなったのだった――

※第一章は製本化してコミケにて販売していました。挿絵が素晴らしいので見ていただきたい……！

目次

第一章

プロローグ | 1

第一話：友達でピンチ！ | 7

第二話：スタートラインでピンチ！

17

第三話：出航前がピンチ！ | 38

第四話：生活がピンチ！ | 57

第五話：邂逅でピンチ！ | 86

第六話：不審船でピンチ！ | 97

第七話：最悪、災厄 | 114

第八話：嵐の中で | 135

第九話：ブルーマーメイドの卵

186

第十話：艦長の責任 | 223

第十一話：ロリアンにてピンチ？

235

第十二話：艦長の答え、私の答え。ハイ

スクール・フリート | 269

第一章

プロローグ

プロローグ

天から降り注ぐ雨が、彼らの傘を叩き、そのしずくを地へと伝わせ落とす。いくつもの雨音がまるでひとつの楽器のように、あるいは耳障りな雑音を作り出すブラウン管テレビのように響いていた。その曇天の下、幾人も大人たちがある一箇所へと集った。

黒い傘に黒い服装。

誰一人として例に漏れぬその一集団は、今まさに葬儀を行っていた。

十字の墓石のもとにある棺には、色とりどりの華と白い帽子が添えられていた。その帽子は、唯一帽子に白いカバーをかけることが許された、艦長の帽子であった。

その帽子が、誰もがいつかは収まる棺に、唯一その人物が艦長であったという特徴を残してくれていた。

そんな黒服の大人たちが囲う中、その棺の真正面に立つのはある小さな少女だった。

彼女は、ただただその帽子を眺めていた。

雨は、祝福のように、彼女の涙のように、止まること無く降り続いた。

2010年 ドイツ：ヴィルヘルムスハーフェン

今日、私は——新しい生活を始めます。

ヴィルヘルムスハーフェン海洋準備学校。そこは成績上位者しか入ることのできない最大級の海洋学校である。所謂、超エリート校だ。私、ハンナ・デーニッツは10歳となり、何とかギリギリでこの学校に入学できた。

でも、それはつまり、私より頭がいい人が多いわけで……友だちができるか、心配である。

潮風が私の頬をなで、その涼しさが燦々と照らす太陽の熱を紛らわしてくれた。

辺りには、こつそり近づいて乗り込めば、すぐにでも出航できそうなくらい近くに船が並んでいた。そう、ここは潮騒の聞こえる船の駅。空を低く飛ぶカモメの鳴き声がある。そう教えてくれていた。気分も軽く、深呼吸するたびに新しい気持ちになれる良い日良い場所である。

そんな素晴らしい日和から、良い入学式を迎えられそうだと考えることで、先程の不安を何とか振り払おうとした。

その時だった。

「……………」

声に出してその物体に驚く。まず、私の目に入ったのはお尻だった……。

訂正する。紺色のスカートだった。それも、これから入学する学校指定の。正しく状況を理解するのに時間はかかったけれど、どうにも学校の生徒がおそらくは船の積み荷である山積み木箱に、頭から突っ込んだようだ。ただ、その状態から動きを見せないことから、私は数歩下がってしまった。

「な、何この人……行き倒れ……?」

正直な話、変質者ではないとは言いい切れぬ。下手に近づけなかった。でも、単純に意識を失って突っ込んだと仮定するならば、救援を呼ばなければブルーマーメイドの卵ですら無い。私はとりあえず、意識があるかを確認することにした。

「だ、大丈夫ですか……?」

その声に反応してか、木箱とその破片に体を飲み込まれたおしりが動いた。出ようと突き上げると、それが力なく膝をつく。なんだ。意識はあるようだ。

しかし、動いて、そしてまた力なく膝をつく。出られそうにないことはわかったが、私の声は届いてなかったのだろうか。

「……助けて」

違った。単純に自力での脱出を図ったけれど、だめだったんだね。

はあ、とため息を付いて、彼女を食人木箱から救出する。引つ張り出すことで何とか

その木片たちから外へと引きずり出すことができたのだが……割と疲れる行為だったわ……。

一息ついて呼吸を整える私。彼女はぺたんと座ると、同じくホツと一息をついた。

「ありがとう。助かったわ……」

彼女は、右目を隠すような長い前髪を持った美少女だった。ただ、どこか気が抜けている雰囲気があり、少しはねている髪がそれを証明していた。まったく、変な人を救ったものだ。

「な、何故あんな場所に……?」

「……そこに、新天地が見えたのよ」

……訂正。相当変な人を救ったようだ。

「いや、何でそんな所に新天地求めているの……」

「嘘よ」

「でしようねっ」

「ふふ……本当はこれよ」

どうやらすこし誂われていたようだ。彼女は笑ってそう言うのと、単眼鏡のようなものを取り出した。それはどうにも少し古びており、いくつかの傷が目立つ。しかし、それ以外の汚れが見当たらなかった。大事に扱われているようである。

「単眼鏡……?」

「違うわ。元は双眼鏡なの。ついさつき転んでしまつて……落として……それを拾おうとしたのよ」

「へえ?」

言われてみれば、その単眼鏡はある部分がへし折られたように割れていた。単純に見る程度なら単眼鏡としてはまだ使えるだろうが、ピントリングなどはもう使い物にはならないだろうことは理解できた。

しかし、と思う。うん。どんな転び方をしたらあんな場所にそれが飛んでいくのだろう……

「そう言えば自己紹介がまだだったわね」

「んーそうね」

てきとーな返事をしつつ、スカートの裾についた砂やゴミをばっばと手で払う。まったく、入学初日から騒がしいことだ。こちらは友人ができるかどうかとも怪しいというのに……。

だが、そんな悩みを持つ私に彼女は手を差し出した。

「そういえば、同じ学校の子よね? 私はビアンカ。ビアンカ・フォォーグラーよ」

そう、これは握手。私が不安に思っていたことを吹き飛ばす魔法だった。友情の証で

あるそれに、私は少し嬉しくなって、握り返した。

「私はハンナ……ハンナ・デーニッツよ！ よろしく！」

—— おもえば、このときから私達は……運命づけられていたのかも知れない。

「さ、行きましょう！」

過酷な試練に立ち向かう家族のような“絆”を——

第一話：友達でピンチ!

ある少女の話からこの学校生活が始まった。

入学式は甲板の上で行われ、周りには私と志を同じとする少女たちが並び、皆一様に朱のセーラー服をまとっている。私もその一人となつて、集団に並んでいた。

しばらくすると、少女は悠然と甲板上の前方に設置された朝礼台へと上がった。堂々としたその姿は、しかし、他の人より伸長が幾ばくか小さな女の子であった。堂々とした立ち振舞と、その背丈格好のギャップが視線を釘付けにした。

そんな中、隣の子たちがヒソヒソと語っているのが聞こえてくる。

「——妖精?」

「……——【海の妖精】、テア・クロイツェル」

聞いている限りでは、少女は妖精と呼ばれており、何でも数十年ぶりに満点で入学したらしい。どえらいエリートだった……。私、いくつか空欄があつたような気もする……そのすべてを乗り越えたのか、あの小さな子が……。

正直、失礼極まりないがそう思ってしまった。

誰よりも成績の良かった彼女はそのマイクの前に立ち、私達新入生代表として挨拶を

する。しかし、その内容は驚くものだった。

『新入生代表のテア・クロイツェルだ。私から話すことは——陸の上では特に無い。以上』

……しばし、私は口を開けてポカーンとしていたのを、覚えている。

その少女の挨拶が終わり、海洋学校生としての学園生活が始まった。

☆☆☆

その学園生活が始まって少し、私はワタワタと戸惑っていた。友達の作り方というのは、どこで正しく教えてもらえるのだろうか。今は少し、正しい友達の作り方というものを学びたい気分だった。

あのとても短い演説をした彼女の周りには、面白い人達が集まっており、退屈しなそうな騒がしさがそこにはあった。

しかし、その一方で私の周りとはというと……

「ちつちつ遅刻遅刻ちつちつうううううううううう!!」

色んな意味で頭おかしかった。

朝っぱらから、一体何なの……。私が呆然とするのもそのはずで……。早朝、学生寮か

らの登校中である。その叫び声とともにパンツすら丸見えの状態で降下してきたのは、私の知る限りのキングオブバカであった。その名前をレオニーといい、重機械操作・修理やそれらに関する知識に置いては右に出るものは居ない。が一方で奇行を働く人物でもあった。天才と何かは紙一重という言葉を体現した人なのだ。

とりあえず私は、あまりの光景から落とした手提げカバンを拾うことにする。そして、他人のふりを始めた。見ていない。私は、何も。

「いって……おっ！」

いくつかの砂埃を巻き上げてから体を起こした彼女は、私を見つけると目を爛々と輝かせた。うわっ。やだ、目をつけられた。

彼女は即座に立ち上がり、降下時のパラシュート他装備一式を早急に近くの草むらへと隠す。そしてその勢いのまま、私の方に向かってきやがった。またか。またなのか。

「やあ、マイハニーー！」

シヨートカットで、ウイंकがとても良く似合うボーイッシュな少女。その容姿そのままに、明るくて元気な子であった。

彼女は私に対してばちこーんと、キレイな敬礼も付け加えての挨拶をする。私はため息を付いて、いつもの準備をした。

「気持ちのいい朝だ、おはようっ!？」

「私はあなたのハニーじゃないって……！ もう！」

拾った自身の手提げカバンを、言い切る前にぶち当てた。倒れるその瞬間までキラキラという擬音を付け加えられているような格好良さであり続けるバカオブバカ。最初こそ対応には困ったのだが……

「あの、気絶したふりはいいです。目覚めのキスもしませんから」

「はい」

慣れたものである。

彼女はスクツと何事もなかったかのように立ち上がる。ほら、平気じゃん。と私はまたため息を付いた。そんな私を含めて、レオニーさんを変な目で見るのが……

「おはよ……うわっ」

ポニーテールに、前髪を分けた銀のヘアピン、そしてけだるげな目が特徴なジークリンドェさんである。初めてあったころも同じようにけだるげではあったが、今は特にひどいように思えた。ただ、一言言わせてもらえるのなら、眉にシワを寄せ、こちらを訝しむのはお門違いだと思いますと言いたい。なんで私を見るの。

「……また」

「誤解です。私とこの人は別にSMな関係じゃないって前から何度も……」

これはまた、本日幾度目かのため息を付いて空を見上げた。あのテアという少女の周

りではないじめが起きていたが、それ以上にこれもまた、私へのいじめじゃないですかね？神様……。

☆☆☆

「しっかし、いきなりカバンはナシでしょっ!」

私を真ん中にして、三人並んで歩いていく。その中でレオニーさんは先程の制裁に文句をたれていた。そんな私達の隣を色んな人が駆けていく。そんな光景が視界の端では広がっており、……避けられているんじゃないか?と心配する私。でもまあ、こんな私達のとに今更加わる人も……というか、好んで加わる人など居ないだろ。うん。

とりあえず、その文句に対して正論を叩きつけてやろう。

「不審者のような行動を取らなければいいだけでしょ? あと、私はあなたのハニーじゃないし」

「つれないなあ。それと、あれはパラシュートの実験を兼ねた……」

「実験も何も、不審な行動でしょうが」

「……はい、おっしゃる通りです」

引き際の良さは認めてあげよう。相も変わらぬ雰囲気膨れっ面になる私は内心微

笑んでいた。いや、まあ、なんだかんだ、このおかしな雰囲気は好きだった。この学校に来てからののはじめての友達ではないが、この2人はかけがえのない親友……の、一歩手前である。でも、貴重な存在に変わりはなかった。

そんな中、レオニーさんは辺りを見回しながら話題を転換した。

「で、何だか今日は雰囲気が変わらない？ 空中からも見えてたけど、皆いつも以上に張り切っているっていうか……」

「たぶんそれは、午後からある適性試験ね」

「適性試験？」

頭上にクエスチョンマークを出現させたような、何も分かってない顔をする私とレオニーさん。忘れていた。私もば……ある程度頭がいいだけだった。ジークリンデさんはため息をついて、冷ややかな目を私達に向ける。わ、忘れてたのは悪いけど、そんな暇なくても……。

「自分の向いてる専科を推薦するとかなんとかの試験よ」

「なんとかかて……」

私のツツコミに目を背けるジークリンデさん。うん、知ってたけれど、彼女は睨んでいたわけではない。そういう目つきなだけだ。そして、自分で言っただけ……私達と仲がいいのだから、ジークリンデさんもそれなりにほんこつ……もとい、それなりの

性能でしか無いであろうことは最近察せるようになってきた。ははっ。

「ま、僕にはカンケーないね」

このポンコツはまた調子に乗って……。H A H A H Aとアメリカンな笑い方をしながら続けるレオニーさん。私達はふいっと踵を返した。余裕綽々ですね、お疲れ様です。

「愛しのエンジンちゃんさえいればって、待つて、まってジョーダン！ 軽いジョーダン！ 君たちのことも愛してるよー！」

「……まあ、ジョーダンはさておいて……。レオニーさんはつまり、機関係の士官か、下士官を目指してるの？」

「そう！ 昔ジーちゃんがさ、船乗りでね。機械を弄ることが多くてさー。凄い自慢したり、武勇伝も聞かせてくれて……。その影響で僕も機械をいじってきたんだ」

彼女は自身のじいさまが本当に好きなのか、くすぐったそうに、でも自慢げにそんな話をする。それが本来の少女としての笑みを見せており、可愛らしかった。ずっとそれでいろよと思わなくもない。

「ジーちゃんに憧れてたのもあるけれど、やっぱり機械が大好きなんだ……。だから、ブ

ルーマーメイドになって、色んな人を助けるために船を動かす、心臓になりたいんだ」
そう語る彼女の横顔は、キラキラと輝いていた。いつものうざったるい輝きでない、
夢のために駆け出した少女そのものの。その横顔は、とても格好良く思えた。

「で？ ジークはどうなんだい？」

と、今度はジークリンデさんに話題先が移った。彼女はいつもの澄ました顔で答える。

「特に話すことはない……」

「おいおい、つれないことをいうなよー」

「わたしも、きになるなあ」

「……」

すると、彼女は少し黙って、少しずつ話した。

「……私は水雷長になりたい……計算の速さは誰にも負けない……この速さを誰かのために活かしていきたい……だから、適性検査では士官になるよう頑張りたいわ……」

「おお、お高いところを狙うね」

「頑張るんだね……！」

あまり話をしない彼女も、その胸中の想いを淡々と語った。だが、その顔もやる気は見え隠れしているものだった。本気なんだ、みんなは。私だって負けないと思う。で

も、これほどの真剣さを私は持っているのかな……う？

「それじゃあ、私達もそれぞれの分野で士官目指さない？」

「え？」

レオニーさんはそう提案した。高い目標に、彼女の顔は笑っているものの、本気だった。それを聞いてジークリンデさんもキツと凛々しくなる。

「私は機関長！誰よりも機械に強いやつになる！」

「……なら、私は砲雷長。」

「で、マイハニーは？」

で、私は？ しかし、その言葉に私は少し固まった。レオニーさんの言葉を訂正しながら私は考える。二人はそれぞれが素晴らしい目標を持ち始めていたのに対して、私は……。

「ハニーじゃないし……んー、私は……」

私は……。

「……私は、航海長。航行のエキスパートになる」

「へえ？ いいじゃん」

レオニーさんはそう言って微笑んだ。ジークリンデさんも私の答えを聞いて薄く笑みを浮かべた。……そう。私は、航海長になりたい。一度でもいいから、そこで頂点に

立ちたい。

私は、その考えを飲み込んで、2人に笑みを浮かべてみせた。どこか心の内は少し、寂然としないが……。

「じゃあ、難しいだろうけど、まずはこの適性検査を乗り切ろうね！」

「おぉー！」

私達は、それぞれの思いや夢を胸に、その後の適性検査へと移る。片目を前髪で隠したポニーテールの女生徒が、ニヤニヤとしながら傍を通り過ぎていくのを横目に、私達三人は試験場へと向かった。

様々な人が見守る中には、あの妖精とか、妖精をいじめる子とか……騒がしい方々が勢揃いであった。しかし、その試験場で私達を待っていたのは……

「えっ？」

「次、ビアンカ・フォーグラーク班、前へ」

「はい」

いつかの、初めての友達だった。

第二話：スタートラインでピンチ!

「それではこれより、適性試験を開始します。……始め!」

担当官の言葉を受け、私達の試験は始まった。ここは艦橋を模した作りのシミュレータ室で、班内でどの役割になるかを話し合い、決めた配置についている。私は海図から水流等を判断し、波、天候の影響から最適な海路を提案する……だけでなく……操舵を任されていた。

つまり、航海長そのものの仕事であった。舵輪に手が触れた瞬間、高揚していた気分がシーンと静まり、心臓がやけに煩くなる。

怖い。

大丈夫だろうか……私が、この船を操舵して。

だが、そんなガタガタと緊張に震える私に、レオニーさんとジークリンデさんが声をかけてくれた。

「はい、マイハニー、少し肩の力を抜こうぜ」

「大丈夫………行ける」

そう、この二人がいる。彼女らも機関部と砲雷をそれぞれ担当し、いずれなると誓っ

た配置をしていた。だからこそ、私が折れてはいけない……。私も、あの二人とともに頑張ると、航海長になると決めたのだから……！

すると、艦長を引き受けたビアンカさんと、副長を担当するエルヴィーラ・クレッチマーさんが、私の手を優しく包んでくれた。

「大丈夫よ。どうとでもなるわ」

「私も尽力する。大丈夫だ」

その両名の励ましも合わさって、私は少しだけ緊張を克服する。どうやら、私は皆の中で一番まずい顔をしていたようだ。

いけない、いけない。しっかりするんだ、私……！！

自身の頬を叩いて、シミュレート画面を私は睨んだ。

「ありがとうございます……！！大丈夫です！」

「よし、それじゃあ航海を始めるわ。取舵50、中速前進」

「取舵五十！中速前進！」

こうして、航海シミュレーションの試験がスタートした。海路は波の高さ、海流を考え最適かつ迅速なルートを見つけ、艦長が指示を出す。航行は順調で、安全な航海をしていた。制限時間内には到達予定であるし……。

私も指示どおりかつ、色々提案して移動方向の修正を行うことで貢献をしていた。で

も、艦長は……どこか、つまらなさそうというか……身が入っていない感じがしてならなかった。

結果はある程度良いものではあった。しかし、私達の次の班であるクローナ・ゼバスティアン・ペロナさん達……つまりはあの片目を前髪で隠したポニーテールの女生徒が率いる班に10秒の差で負け、更にはあの妖精さんに多大な差をつけられて敗れている。

そのテア班の航路は、魚雷によって岩礁を破壊し、無理矢理押し通るものであったが最短距離だった。その際の彼女の言う言葉は要約すると、制限時間があるのは救助対象がいるということ。そして、迅速な救助をすることがブルーマーメイドには必要であること。それらは正しく、そのための行動としては非常に最適だったと言える。

正直、ちよつと悔しかった。なにせ、私たちは全員がほとんど最初から知り合っていて、同じチームとして揃っていたのに、彼女たちに負けたのだ。考え方でも。

「はあ……だめだったね」

「でも、クリアはしたさ。あとは神もとい、先生たちのみぞ知る、だな」

「……でも悔しい」

「そりゃ僕だって悔しいよ。あんなド派手なルートがあったなんてさー!」

「ド派手って……でも、確かにそんな考えは持てなかつたなあ。私達は戦闘艦に乗ることになるんだから、救助のために装備をフルに使うよう考えていかなきゃ、つて反省点はできたかも」

「学べる点は多々あつたわ……」

帰り道の廊下を三人で並んで歩きながら、先程の反省会をする。私達は行うべきことをしっかりとしていた。それについてはちゃんと評価はされているだろう。途中のエンジン関係の小さなトラブルについてもすぐにレオニーさんは対応し、そのずば抜けた知識と行動は頼りになる機関長そのものだった。また、ジークリンデさんも波についての進言をしていて、砲雷撃戦時の影響などを考えて色んな意見を出していた。

とまあ、私達の適性試験はそれぞれが十分に頑張つたけれど、反省点も増えたと言える結果だった。

「ま、とりあえず私達は一山乗り越えたんだし、何か食べに行こう!」

「何かって何よ」

「パフエとか?」

「いいじゃない。どこ行く?」

「私は最近できたヤーパンのTakoyakiが食べられる店がいい……」

「ジークリンデさん、日本(ヤーパン)が好きだもんね」

「そんなところが可愛らしいんだ——ってそんな暇まないでくれよ」

「あ、今のは睨んでたんだ」

ジークリンデさんの睨んだ表情に苦笑して、私達はパフェを食べに足先を向ける。でも、少し進んだ校舎の曲がり角で私は彼女を見つけた。そう、先程のピアンカさんとエルヴィーラさんである。

「あ、ピアンカさん」

「お? あの時艦長?」

「副長もいるわね……何を話してるのかしら」

私達はそつとその角に隠れて2人の会話を眺めた。私達は何もやましいことはないのに、そして恐らく彼女らも普通の会話をしているはずなのに、何だかいけないことをしている気分になる。

並んで歩く2人はとても真剣な表情をしていた。一体何の話なのだろうか。

「気になる?」

「気にならない、って言ったら嘘かも」

「でしようね」

じつと観察をしていると、私はあることに気づいた。

「……ピアンカさんが持つてるの、ノート……?」

「おっと、聞き込み調査みたいなのをしてたのかな?」

「クレッチマーさんに? でも、それにしても和やかな雰囲気じゃないわね」

「確かに」

レオニーさんはそう言わずくと、目を細めて手帳を観察する。私も一緒に目を細めて見てみるけれど、何かをひらめいたような表情を浮かべたり、副長とあーでもないこーでもないと話し合ったりしている様子しかわからなかった。うん、私はそこまで目は良くないからね。

だが、それでも分かることはあった。彼女らは何かの問題があつて、今その解決策が浮かんだんだろうということは。

「ん?」

「何? ……誰だ!」

しかし、解決したからか、その手帳から目を離れた副艦長に見つかってしまった。傍から見ると、隠れて見ていた私達である。めちやくちや怪しまれても仕方がなかった。

まあ、怪しまれるのは仕方ないとして、大声で誰だと問われれば頭を引っ込めてしまふ、自身の反射神経を何とかしたいと思つてしまふわ。更に怪しく見えちゃうじゃん。や、やましいことはしていません。決して、たぶん。

恐る恐る出てくる私達を見て、ピアンカさんははあ、とため息を付いた。

「何だ、あなた達ね」

「さっきのシミュレーションで同じ班になった……」

そう言つて、エルヴィーラさんはクスツと笑つた。クリーム色の髪に、細い目で、しかし整つた顔立ちから王子様の様な印象を受ける人の微笑みに、少しドキリとした。レオニーさんとはまた違つたタイプのイケメンフェイスだなあ……。

「艦橋の三人だね。でも、盗み聞きは悪いなあ」

「す、すいません……」

「反省してます……」

「いやだつて、何か気になるしね、可愛い子ちゃんたち?」

まあたレオニーさんはお得意のウイソクを決め、今度はお二人を攻略……もとい、落としにかかり始めた。しかし、私はそこで予想よりも凄いものを見てしまった。

副艦長のエルヴィーラさんが可愛い子ちゃんたちと言つたレオニーさんに跪き、手を取るとその手の甲に口づけをしたのだ。見上げて彼女は続ける。

「すまない。だが、君たちに教えることはできないんだ、お嬢さん」

「……へ?」

変な声を出したのは当事者であるレオニーさんだ。

そしてその反応は、レオニーさんは自分がしてきたようなことを、まさか自身が体感

するとは思わなかったのだろう。私自

身、鮮やかで流れるようなその動作に対して口をぽかーんと開くことしかできなかつたし、反応できなかつた。ジークリンデさんも同じように衝撃を受けていた。その一連の流れは、レオニーさんと違って全く隙がない。

スクツと彼女は立ち上がると、綺麗な微笑みでレオニーさんの手を握った。

「私達はこれで失礼するわ。ハンナ、またね」

「え、あ、はい。また……」

「それじゃあ、またね、お嬢さん」

「え、あ、うん。副長……」

歯切れの悪いレオニーさん。私は目の前の光景にあっけにとられ、艦長の言葉に即座に反応できなかつた。レオニーさんに至ってはどことなく上の空だ。ジークリンデさんも私とともにポカーンと口を開いていた。うん、女の子を落とそうとする女の子が女の子に落とされかけて……?? 一体私は何を見たんだ？ 混乱するのも仕方ないだろう？

で、レオニーさんだが……

「レオニーさん？」

「え、やだ、な、なんだい?」

「やだつて……」

両手で口元をおおうと、口づけされた手の甲を見つめる。そして、呼びかけると両手で顔を隠した。ちよつと赤みがかった頬がちらりと指の隙間から見える。おいおい、ま
いだーりん。あなたが落ちるのですか。

「……ま、全く、副長はすごい人だ。この僕にそういうことをす、するなんて」

「……本当に凄い人ね。レオニーをこんなふうにするなんて……」

「確かにそうね」

「ちよいちよい、マイハニー? こんなふうつて、僕は少し動揺しただけだよ?」

「やだ……つて」

「ジーク! な、何のマネだい!?!」

「乙女心が表に出てたよね」

「そうね」

「でてない! 僕は僕だ! 皆の恋人さ!」

「うーん、それはそれで最低な人になるんだけれど……」

「や、ちよつと、動揺して……」

「やべーやつ」

「ジークー！」

少しの間、乙女レオニーさんのものまねをしていじくりまわす。きつとこの話題は10日間くらいネタになるだろう。

そうして散々いじると、気が済んだ私達は一息をついた。ふう、鬱憤ははらした。

そして、レオニーさんは少し考えてこう言い、私達は歩き始めた。

「んー……まあ、後で聞いてみるか」

「アレ以上は聞けそうにないけれど……」

「……なら、Takoyaki……私も、早く食べたいし……」

「ヤー！　じゃ、いこっか」

「ちよちよ、ジークリンデさん、レオニーさん、置いてかないでよ……い！」

こいつ……じゃなかった、レオニーさん……私をいつもマイハニーマイハニー言っている割には、たまに私を放って置きざりにするんだから。置いていかれないように二人に追いつく私。お店についたら端から端まで要求してやるんだから。Takoyakiを！

しかし、ふと振り返ってポツリと呟く。

「………にしても」

にしても。

艦長らは一体、何を話していたのだろう……。

☆☆☆

要求通り端から端まで頼んだ後、余った Takoyaki は各自分けて持つて帰るところとなった。びつくりしたのは生クリームたこ焼きというものもあり、生地からなにか甘いメニューなどもあったことだった。でも思うのだけれど、タコや生姜はいらなかったんじゃないかな……。

生クリームと絶妙に合わないあの感じは、端から端まで頼んだ天罰でも堕ちたのだろうと思わざるを得なかった。

さて、お財布を逆さにして涙目になっていたレオニーさんとすつごく満足気な表情をしていたジークリンデさんとお別れし、はや夕刻。西日が強くなってきたところで私も寮へと帰ることとなった。とりあえず言えるのは、今日の夕飯は入らないし困らないだろうことだった。

「……流石に可愛そうだったなあ……」

ふと思いつ出したのは涙目のレオニーさん。捨て台詞で「覚えてろよ、マイハニー」と叫んではいたが、やり過ぎた感は否めない。今度何かをごちそうしてあげようか。しか

し、テンションが上ってちよつとうざくなる想像が直ぐに浮かび上がり、それがやけに現実味があつて……わかりやすい人だよなあ。レオニーさんつて。

「……ふう」

でも、良い友達ができただけだ。だって、こうして三人で学校へ行つて、帰りにお疲れ様つて言い合つて、何か食べ物に出かけて……それつて、私の夢だったもの。こんな頭の悪い学校だとそれはできない、ありえないと思つていた。

けれど、それが叶つた。初めての友達の艦長はあまり会えなかつたけれど……でも、あと五年くらい経てば……高校生になつたなら話は変わる。

船に乗る皆と一緒に、仲良くなるんだ。今度の私の夢は、それにしよう。

「……艦長……」

五年後——

この五年はあつという間に過ぎ去つた……と、よく言う人がいる。実際、月日の流れというのは人それぞれの感じ方であるが、私としてはこれが一番長いように感じていた。何しろ、座学や実習によつて海洋航海の基本を叩き込まれたのだ。遊んでいる時間のほうが少なく、そちらの方があつという間だったように思える。

アインシュタインの特殊相対性理論を呪いつつ、過ぎ去る日々。そして、いよいよ数

日後に海洋航海実習、つまり初航海を迎える。私の居るクラスも……いや、既に同学年全生徒はその期待と不安を胸にうずうずと体现していた。

もちろん、そこには例外なく私も含まれていた。何しろ私も船に乗り、海を往くブルーマーメイドになる為に頑張つて、そしてその第一歩がついに来たんだから。

新しい一歩を踏むために、まずはその教室に向かうこととなっていた。私は、他二人とともにその教室へと足を進める。

「ついに、配属先の決定ね……!」

「マイハニー、今日は随分と張り切ってるじゃないか」

「仕方ないんじゃない?……今日発表で、少ししたら初航海なのよ」

「そう、だから浮かれてしまうのも無理はないということ!」

「ははは、元氣だと可愛さもアップといった感じだ。アホ毛も主張が激しいや」

「アホ毛とは何よ!」

咄嗟に髪を抑えつつ、レオニーさんを睨む。だが、このやり取りから私は、何だか彼女は様子がおかしく思えた。一番テンションが上がっている筈のレオニーさんが私よりはテンションが下がっているのだ。

「……で、レオニーさん。今日はどうしたのよ。普通に登校して」

「私も気になるわ」

「……や、別に。噂を聞いただけだよ」

「噂……？」

そういう私はジークリンデさんと顔を合わせて頭上に疑問符を浮かべる。どうやらジークリンデさんも聞いたことがないようだった。ジークリンデさんが続けてレオニーさんに聞く。

「噂って何よ……」

「いや、本当かどうかは怪しいんだけど、旧駆逐艦が何隻かは忘れたけど盗難にあつたつて……」

「いや流石にないわ」

「うーん、まあ、信じられないわ」

「まあ、そうだよ。ただ、その上他に聞いたのが、男子校から一隻送られたんだつてさ。盗まれたそれらに変わつて」

「へえー？ 流石に騙されないわよ」

「ありえないわ」

「……まあ、噂だからね。そんなことよりハニーたちと共に、優雅な船旅に出られることを神に感謝しないと」

「……とんだ迷惑でしょうね」

「ひどいなあジークー！」

とまあツツコミを入れているレオニーさんだが、どことなく元気は少なめで、調子が狂うな。人並みに緊張している、という理由もあるのだろうが、どうもその噂の信憑性が彼女の調子を狂わせているようであった。

教室へ足早に向かう私とジークリンデさんも、どことなくその噂が付きまとい、頭から離れなかった。

「……：そういえば、もし乗るとしたら皆どんな船が良いの？」

だから、少しだけ話をそらそうと、ふと思つた疑問を二人にぶつけてみた。私個人としては小さくて可愛い駆逐艦とかがいいなあと思つたりして……でも、少し欲を言うならシャルンホルスト級戦艦みたいな大きくて格好良くて、でも綺麗な戦艦に乗つてみたかったり……。

「私は、Z1型駆逐艦とか……かしら」

「お、渋いねえ。私ならやつぱりシャルンホルストかな。もしくはビスマルク。でかい！ つよい！ 何が悪い！」

「つて言つても、あなたが就くのつて機関室よね？」

「そうさジーク。戦闘においては皆いかに敵を倒すかとか、どうやって海域を突破するかとか考えるだろうけれど……僕はずっと、船の機関部にだけ集中していたいや」

「私に向ける視線や姿勢よりずっとまっすぐね」

「そんな事無いさマイハニー！ 僕は君も真っ直ぐに愛して——」

「で、ハンナさんは？」

「無視しないでっ！」

「私はそうだね……」

「……ふ、ふふ、僕のこのイケメンオーラが君たちを恥じらわしてしまったのかな。話しかけることに恥じらいを持ってしまいうくらい僕は」

「ナルシスト」

「ある意味話しかけるのが恥ずかしい」

「ごめんなさい……今のは無視してください勘弁してください……」

どうやら今の反応が心に刺さったのか、ヤーパン式シノギジツであるドゲザを彼女はしていた。これにこりたらもう少し抑えてほしいものだと私はため息を吐く。そして、隣で容赦なく連射機能を使ってドゲザ姿を撮影するジークリンデさんは、とんでもなく鬼だった。絶対怒らせないようにしよう。

「じゃ、知人にまでこの写真送るから……」

「」

「や、そこまでは止めてあげて……」

真っ青になっているレオニーさんは、何だか新鮮で面白かったがそれ以上は勘弁してあげて欲しい。うん。私も変質者の友だちになっちゃうし……。

なんて、日課のレオニーさんいじりをしてしていると、私達はいつの間にか教室付近へと近づいていた。さて、私達はどの船に配属されるのだろうか。

さつきまで遊んでいた私達だったが、教室に近づいていくにつれて口数が減り、無言のまま扉をくぐった。やっぱり、二人も私も緊張はしているのだ。

そこには、およそ30名未満程度の女の子たちが集まっていた。

「人数から察するに、駆逐艦かな……?」

「だいたいそんな感じね」

「……」

私はちよつとだけ期待が外れた感じと、それを上回る期待通りの結果に自然と笑みが漏れた。シャルンホルストではないけれど、駆逐艦も可愛いから良いね……!

「……これから、だね」

「……そうね……」

「ここに居る皆が、仲間……」

レオニーさんの眩きに、それぞれが思いを馳せる。見つめる先の未来は、どうなっているのか……。そのスタートは、すぐそこだった。ただ、私達のスタートラインは、何

処か歪だと気づくのはこの後すぐのお話からだった。

それから十数分後。チャイムと同時に皆が一様に席へとつく。自身の席はすでに割り振られており、私も例外なく自身の席へと座った。これから私達三人は、部門は違えど同じ船に乗る。親友と乗れることに更に期待が高まっていた。

そして、そのうえ嬉しい光景が目の前を横切った。

「つと……遅れたわ。ごめんなさい、皆席にいる?」

「ビアンカさん!?!」

そう、その光景とは、入学から初めてできた友達。そして、適性検査では艦長を務めた少女、ビアンカさんが一緒に配属先の教室に現れた、というものである。私は驚きと、嬉しきで少し困惑する。

「あ、ハンナ。今日からあなたとは同じ仲間よ」

「……………」

そう、嬉しきはあった。久方ぶりにあったことも、同じ船で頑張れることも、この人はあの時支え、友だちになり、適性検査の時支えてくれたんだから。

だけれど……ビアンカさんをよくよく見た私は、まず、こう言葉にしてみました。
いや、気になったし、仕方ないよね?

「服、ちゃんと着ましようよ!?!」

「あれ、感動的な再開を喜ぶ場面じゃ」

「いや、それ以前に服装の乱れが目立ってます！ ネクタイ緩めすぎてませんか!？」

「ネクタイじゃなくて良くない？ これ」

「そういう問題じゃないです！ 制服はちゃんと着ましようよ！」

「わかったわ。善処します」

「それヤーパン（日本）だと『しない』と同義だと聞きました」

「……詳しいじゃない」

「感心しないでください！」

まったく、この人は！ だらしがなすぎでびっくりしてしまった。これから正式な発表……配属だと言うのに、制服すらまともに着ないなんて！ などと内心自身のビアンカさんの評価を下げながら、貸してくださいと私がネクタイを整える。

「え、えと、これから配属先を……」

「皆さん、少し待っててください」

「え、ちよ、ハンナ、ぐえ」

私は一度クラス全員に向けて一札をすると、ボタンとネクタイをキュツと締めた。これならば、ひとまず見てくれだけは大丈夫だろうと納得すると、ハンナさんが困ったようにコチラに聞いてきた。

「も、もういいかしら……クラス中の視線が痛いんだけど」

「自業自得です……つて、そういえばそのファイルは……」

「ああ、配属先と、艦も書いてあるわ」

その言葉に皆がおおとうなり、そのファイルに視線が集中した。

「さて、では改めて……まずは私から挨拶をするわ」

教室前方中央の教卓の位置に、彼女は立つと全員の顔を眺めてからそう切り出した。私ももちろん自席について彼女の動向を観察し、彼女の言葉に傾聴する。後ろから突いて笑うレオニーさんは放つて置いて、だ。おおかた先程の光景を爆笑していたのだろう。ネタにしたいのだろうな。ヴァカメ、お見通しだよ。

「私が今日からあなたたちの乗る船の艦長を務める、ビアンカ・フォーグラールよ。よろしく」

その短い挨拶に教室は静かにざわついた。先ほどのだらしない光景と、今のキリツとしてちよつと凛々しい彼女が、私達を率いる役目、艦長になるのだから。私はと言うと、しかしやつぱりと納得していた。彼女と共にシミュレーションを行った時の的確な指示は、やはり艦長としての素質をちゃんと見せてくれたのだから。だが、ここまですら単純に面白い艦長、ちよつと頼りなさそうな艦長が現れた。それだけの笑い話で済むのだが……。

「では、続いて私達の乗艦する艦を紹介する」

先程のざわつきは収まり、皆が固唾をのんで艦長を見つめた。といっても、何人かは駆逐艦だと予想を立てて、つまらなさそうにしていたり、ニヤリと笑ってみせたりしていた。

だが、彼女はそこから一言も発さない。

「……?」

「……どうしたのかんちよー」

「早く言ってくださらない?」

「焦らさないでよ」

流石に一言も発さず、それを眺める艦長に、皆は困惑した。口々に言う不満を受け、艦長は歯切れの悪い返事とともに「つ咳払いをする。事前に見ていなかったのかな……?」そう疑問に思う私はその黒いファイルをじつと眺めた。そして、先程のようにキリツとした表情を見せると彼女は言った。

「……私達が乗る艦は *U n t e r s e e b o o t*……*U—B o o t*、*I X*型、*U—1101*だ」

ありえない、だがありえた歪なスタートライン。

私達はこの日より、家族よりも深く、特別な絆を得ることとなるのだった——

第三話：出航前がピンチ！

数瞬の静寂。そしてそれぞれの口から漏れた困惑の思いがそれを破った。

私はというと口をポカーンと開けてビアンカ艦長を見つめていた。なにせ、まさかのまさかである。

本来潜水艦に関しては男子校の海洋学校等が保有し、主に男子が乗るような船である。それを私達が乗るといふのだから……それはもう文句だつて飛び交うことも有るだろう。実際、今恐らく避難されるいわれのないビアンカ艦長がここに居る全女生徒の文句等を浴びせられているのだから。

「どういうことですか?!? そんな男子が乗るような船など!」

「はあ!?! んな船乗るかあ!」

「どういふことよ艦長!」

「キツイ汚い帰りたいが揃っている船じゃない! なんでよ!」

「いや、それはキツイ汚い危険だろJK。でも、どちらにしる間違つてない件」

「ふええあの沈む船に乗るの?」

「沈んじや駄目じゃない! 潜る船よ!」

「どっちも一緒だ。一步間違えたら沈む船さ」

騒がしきが増す中、私は後ろから突いてきた方に顔を向けた。レオニーさん、ジークリンデさん達も同様に、固まっていた。少しして私に気づくと二人共微妙な表情を浮かべたのだった。そりゃあそうなるよね。潜水艦が男子の乗り物と言われるのはその過酷さからだ。私達女性が耐えられないのではなく、単純にその生活が海上船とまた異なるのだ。お風呂は無いだろうし、シャワーすらない可能性も有る。

私達の中にも貴族の出の方もいるし、そういう不衛生極まりない環境下にそういった子が入れるかどうか、考えてみて欲しい。難しいだろう。仮に皆が乗ると言っても、親が許すかどうか……。

「皆落ち着いてほしいわ。担当教官をこれから——」

「落ち着いてられるかって話よ！ どういうことだって言ってるの！」

「正直に答えてほしいわ」

「説明義務を果たして！」

「艦長でしょ！」

このままヒートアップする。その時だった。

ガシャアアアアアアアアアンと大きな音を立てて、教卓が倒れた。大きな音にびっくりりし、肩をすくめてしまったが、恐る恐る見るとピアンカ艦長が蹴り倒している

ことがわかった。

「つていやいやいやいや!!ピアンカ艦長!?何してるんですか!?教卓蹴り飛ばしたりして!!などとツツコミを入れたかったが、正直ツツコミを入れる余地のないくらいに衝撃だったためか、私も私は硬直してしまっていた。仕方ないじゃん。怖かったんだもん。」

「だまりなさい! 私は開封指示通り、今ここで指示書を開いた! 今知った情報についての説明はこれから来る担当教官に質疑しなさい! 以上!」

そういうと一番最後尾の席へ戻ろうとするピアンカ艦長。ピアンカ艦長もまた自席へとついてから質問を行う予定なのだろう。しかし途中で止まり、踵を返すと教卓を正確な位置に戻し、コチラに向いて言った。

「……突然蹴り飛ばして驚かせたのは悪かったわ。いまのを真似ると担当教官は停学に思うから、あなた達は真似しないように。これで以上よ!」

そしてそれから本当に自分の席へと戻ったのだった。皆はというと不安と不満を表情に浮かべており、早くも脱落者が出そうな勢いである。勘弁願いたいものだ。ピアンカ艦長を非難する人がいれば、怯えを見せている人も居た。

私はと言うと、びつくりはしたがピアンカ艦長を心配していた。このままではピアンカ艦長は皆から辞めさせられるのではないかと。

「皆、静粛に」

しかし、またもその喧騒は一時的に止む。その響いた声とともに教室の扉をくぐったのは美人な20代後半あたりの女性だった。ただ、彼女の視線は今にも私達を射殺しそうな鋭いもので……その目で周囲を見渡した。獲物を探しているようで、皆しんつと静まり返っていた。喧騒が止んだだけでなく、室温も下がったようだ。できることならひざ掛けを持つてくるべきだった。

「では、とりあえず君たちにはまず、説明をせねばなるまい」

そう言うと、彼女は少しだけ申し訳なさそうに口を開いた。でもうるさい野次を飛ばしたら殺されそうだ……。そして、その状態のまま彼女は話を続ける。説明の内容とは何だったのか。それは以外にも事前情報通りだった。

そう、まさかの噂通りの結果、男子校から廃棄間近のUーボートを借りることとなったのだ。異例の事態である。ただし、半年間くらいのみであり、その後は駆逐艦への乗船となるとのことだった。その全容を聞いたのち、皆は少し唸った。半年くらいなら、我慢したって良いかということである。

「まあ、何にしてもこれは決定事項だ。再来週に乗船するため、君たちには今日から特別講習として潜水艦の応用知識を叩き込む」

『ええええええええええええ!?!』

全員が初めて心を一致にした。うん、追加講習ってやだよね。補習って嫌だよね。分るわその気持は……私もそうだもん。

なんて、その叫びを出した後、先生がギロリとその鋭い眼差しで突き刺さんばかりに睨みつけてきたためか、皆がぐつと抑えた。

「では、艦長、ピアンカ・フォーグラウを中心とし、ここに居る全生徒諸君がより自身を強くできることに期待する。では、次にそれぞれの委員長を発表する。名前を呼ばれたものは前に」

そして、話がそう変わると皆の表情がきゅつと変わった。特に貴族の出の人たちは自信アリげで、しかし少し不満そうな表情を浮かべている。委員長になるのは私だろうと言いたげな感じだ。気の強い人や大半の方はそのまま変わらず担当教官に視線を向けていて、気の弱い人たちは自分が当たらないことを少し期待していそうだった。なんとなく、この時間だけで大体の人がどういう性格なのかが分かかってきた気がする……。

「では……まず、副長。エルヴィーラ・クレッチマー、出てきなさい」

「はい」

そして、まずは副長が選出された。というか、エルヴィーラさんだった。……って、まさかだけれど……なんとなくこの選出がどうなるか見当がつき始めてきた。

「水雷長、ジークリンデ・ヘルツォーク」

「は、はい」

予想はできていたのか、しかしちよつと戸惑いながらも起立し、前へと進むジークリ
ンデさん。水雷長はジークリンデさんとなると機関長は……。

「機関長、レオニー・フォーレルトウン」

「は、はい！」

必然的にレオニーさんになる。彼女は少し元気よく返答すると、ニヤつく頬を抑えな
がら前へ出たのだった。そして、ここまで着たら航海長は……。私は少し息を吸うと、
ゆつくりと吐いた。分かっている。もしかしたら勘違いかも知れない。でも、私の可能
性もある。気を引き締め、その覚悟を今……決めた。

「航海長——ハンナ・デーニッツ」

「はい！」

「以上だ。続いて、他委員長または、副委員長の——」

こうして、私達はこのUーボートの船員たちのリーダーとなったのだった。まだ、旅
は始まってすら居ないが、ここがスタートラインだったと言えるだろう。

☆☆☆

「お疲れ様でした。以上で全日程は終了した。本日はこれで解散だ」

それから三週間。みっちり潜水艦の内容を把握し、訓練を受けた。担当教官殿はそう淡々と劳いの言葉をかけると、この教室を出ていく。航海実習は明日を迎えた今日、その全内容を終了とし休日となったのだった。少しだけ薄情じゃないかとも思いつつ、ここにいる全員がその終了過程を喜んでいた。

「いやったあああああああー！ おわったあああああああー」

赤い髪の子の、そうナタリア・フィンコさんのキーンと響くような全力の叫び声とともに、教室はざわめき出す。ふと気になって後ろを振り向くと、レオニーさんが机に突っ伏して死んでいた。でも、同じような人も幾人か見かける。正直な話、私も今はそんな気分だった。それほどまでに開放感がある。

そして何人かが遊びに行く約束をしたりして、このあとの半日をどう過ごそうかという話し合いがあたりから聞こえてくる。いいね、この開放感。私もビアンカさんやエルヴィーラさん、レオニーさん、ジークリンデさんのいつもの五人でどこに遊びに行こうかなど、そう考えているときだった。

「ごめんなさい、みんな。ちよつとした相談があるの。少しだけ時間をくれないかしら

？」

ビアンカ艦長はそう言って、全員に静止を呼びかける。ざわついていたその場を収めると、ビアンカ艦長は教壇の前で全員に話しかけた。

「今回、私達は半年とはいえUーボートに乗ることになったわ。でも、元々は男子校のもので、中身も外も無骨すぎるデザインといっても過言ではないわ」

そういうビアンカ艦長の言葉に、殆どは頷いたり、そうだそうだと声を上げて肯定していた。それを見たビアンカ艦長はニヤリと笑っている。

「なら、この際だし、このUーボートをアレンジしましょう？ 私達の船であるわけだし」「確かに、中身は臭い汚い危険の三拍子揃ったものではあったけど、シャワールームとか洗濯機とか……色んなものをアデリナさんと改造したんじゃない」

「確かに、そうよハンナ。それに、内装に関しては各々に任せるからそれは置いておくの」

「つまり、外見ですか」

エルヴィーラ副長がそう言うと、ビアンカ艦長はそうよと微笑んで答える。そして、みんなに目を向けると、そこでと続け始めた。

「とりあえず、まずはUーボートにペイントするエンブレムを決めたいわ。案があればぜひとも言って見せて欲しい」

「え、勝手に変えて良いのでしょうか」

「気にしなくていいわ。描くだけの範囲を決めたし、私が許可したから。勝手に案を出して私達の雰囲気ある船にしましょう」

そう言うと、皆の顔がニコリと輝き出す。何しろ自分たちで船をアレンジできるのだ。それは願ったり叶ったりである。無骨な船に、ちよつとでも可愛らしさを求めたい年頃なのだから。すると、何処か気品のあるお嬢様、エリヴィエラ・フォミナ・フォン・ローテンブルクさんが質問をする。

「じゃあ、範囲を教えてほしいですわあ。それから方向性から考えましょう?」

「範囲は……このくらいだな。まあ、ちよつとくらいオーバーしていてもいいだろう」

その質問に対してピアンカ艦長は、背後にあつた黒板をつかつて、どの程度の大きさまでのエンブレムが作成可能かを示した。それを見て、みんなが口々に意見を出し合い始めた。それはもう色んな人達が色々と、自分のイメージや想像を語って。

「じゃあ次はあく、方向性ね☆」

「はいはい! 元気でしょ! 気合でしょ!」

「熱血すぎ〜」

「じゃあ、二次の推しのイケメソを……萌え絵をエンブレムにするおつおつ」

「萌え絵って何……?」

「気にしてはだめだ。あんなふうになんてはいけないよ」

「えっと、うん、わかった?」

「正直傷つくお……」

「やっぱり高貴さが必要ですよ。これほどまでにカクカクしたデザインですもの、もっと上品な方が良くつてよ」

「け、これだから貴族様は」

「何かしら? 話でしたら表で聞きますわよ」

「やるかこの!」

「どうどうどう、喧嘩はいけないなあ」

そんな様々な意見に対して、ピアンカ艦長の隣に立っていたエルヴィーラ副長が高速に手を動かし、黒板に記載していく。書き綴っていくだけでなく、その意見らに対してグループ分け出来そうなものはグループ分けして、見やすい工夫をしていたのだ。さすがは副長である。

すると、その意見合戦にレオニーさんもまた、参加し始めた。

「僕は格好いいのが良いな!」

「あなたは黙って」

「酷いなジーク、僕たちだって提案する側だよ? ちゃんと言っていかなきゃ」

「……なら、私は可愛い感じが良いわ」

「ジーク、君も可愛いよ」

「黙れって言ったでしょ？ 耳鼻科行く？」

手厳しいなあとレオニーさんとジークリンデさんも提案をする。可愛い感じも良いし、格好いい感じも良いなあ。あ、ちなみに校章という案もあったけれど、それはどちらにしろ後に書かれるとので却下されていた。

「今の状況は他の人達とは違ってUーボートに乗艦することになるのだ。この逆境に立ち向かう者たちが私達なわけだ。つまり、テーマは「逆境へ立ち向かう」だ」

「なにそれ格好いい」

「もうちよつとメルヘンな感じが良い」

すると、私の斜め後ろの方に座って居たクラウディア・レツチエ・フォン・アルノー・ド・ラ・ペリエールさんが、逆境だと力説をする。だがしかし、その意見に対してもみんなは納得しているような気配はなかった。メルヘンな感じもいいし、そういう格好いいのもいいわね。私といえば拳がっついていく意見のそれぞれに惹かれては迷いを増していた。

そしてみんなも同じだったのか、色々と意見が拳がったのだけれど、結局どの方向性にするかなどは決まらなかった。

「しかし、どうしたのか……む？ アンネリース、君のその絵は」

「え!? あ、ええつと……」

状況をみて打開策を同提案すべきか思案するクラウディアさん。

すると、クラウディアさんは隣で必死に何かを書き込む、アンネリース・ヴェローニカ・ゾンバルトのそのノートの中身に気がついた。アンネさんはあまり人と接するのが苦手な子でいつも消極的だ。でも、だからかクラウディアさんは、そんな彼女を気にかけてあげている。

そしてそのおかげか、ノートの中身をじつと見つめる事ができた。アンネリースはそのノートで顔を隠すようにして、クラウディアさんに見せながら少し微笑んだ。

「えへへ……その、エンブレムの案をいくつか……」

「へえ？ 凄いいではないか。なになに、笑うホオジロサメと……これは何の花だ？」

クラウディアさんはそのイラストの出来に驚きながらそれらを眺めている。デフォルトメされたホオジロザメが描かれているエンブレムに、その他にも色んな可愛らしいよな、格好良いようなイラストが載っていた。

しかし、そのうちのあるイラストにクラウディアさんの目が留まる。そこには可愛らしい花が2つ並んだ、盾のようなエンブレムだった。

「これは……ハマギクというお花と、ローダンセというお花」

「風になびくような感じで……芸術的じゃないか」

「あうう……ありがとう……」

「それぞれの花言葉が、このエンブレムに込められた想いなのかね？」

「……はい。それぞれが、「逆境に立ち向かう」、「終わりのない友情」です……」

アンネさんがそう言うと、クラウディアさんがその双肩をがっしりと掴んだ。びつくりしちゃっているアンネさんがちよつとかわいそうだった。うん。

そして、キラッキラな目で彼女を見ると、クラウディアさんはそのノートを持って立ち上がった。

「艦長！ このエンブレムはどうだろうか！」

「く、クラウディア、さん……！ あわわ……わわ……」

「クラウディア……何かしら、見せて」

そして、それを提出しに行くクラウディアさん。アンネさんは少し恥ずかしそうにうつむいていた。

「……ほう、中々良い案ね。これで採決をとりましょう」

「皆も気にいると思う。では、これがそのエンブレムのあんなのだが……」

「あうう……あううう……」

クラウディアさんはそのエンブレムについて説明を行うと、全員が納得したような表

情をしていた。大体のみんなの意見を取り入れたものが、そのエンブレムであったためか、みんなも満足ではあるのだ。ただ、アンネさんが少しうつむいて、全く見ていなかったのは流石に恥ずかしがり過ぎだと思いたい。

「で……この案で行こうと思うわ。何か反論はあるかしら？」

ビアンカ艦長がそう言うのと、皆は何も手を挙げない。それがこのエンブレムでもよいという、肯定を示していた。それを見たビアンカ艦長はニヤリと笑った。

「では、アンネの案で行く。この後すぐ手伝えるものは手伝って欲しい。特にアンネ、君は手伝ってほしいが良いか？」

副艦長がそういうと、アンネさんはびやいと緊張しきった感じの大きな返事をしたのだった。

これが、初航海に出る前日のお話で……そしてこの後、描き終えた後にビアンカ艦長が先生に呼び出しを食らい、エンブレムについて叱られていたことを知った。許可出でなかつたじゃないの!! 何してるんですかビアンカ艦長!!

そして、翌日――

『これより、乗艦する艦による初航海を始める！ 各自、担当する艦に乗り込み、準備せ

よ！』

そのアナウンスが港の潮風に乗って流れてくる。青々とした空が、気持ちの良い日差しが、今日この日を祝福するかのようだった。その天候のもと、私達の船は少しポロクさいが鈍く輝き、ハマギクとローダンセが太陽に照らされ、まるで生きているかのような華やかさを魅せていた。

「良い航海日和だ」

「本日天気晴天なれども波高しつてね」

「いや、波も静かでしょ……」

「ジーク、これはヤーパンの名言だよ。良い日和だなんて意味らしいよ」

「変な嘘を吹き込まないでよ」

「あながち間違いではないが、もう少し勉強したほうが良いよ、お嬢さん？」

「ふ、副長……！」

ビアンカ艦長の眩きを私達艦橋員たちが小声で潰しつつ、船へと近づく。ビアンカ艦長がちよつとふてくされていたのが少し可愛いと思ってしまった。不覚、写真機を持つてくるべきだったわ。

ただ、皆が乗艦してからは雰囲気ガラリと変わった。ビアンカ艦長の外套がはたき、その目はキツと遠くを睨んでいる。彼女の、ビアンカ艦長としての初の航海。遠く

のかもめの鳴き声や他の船の汽笛とかは、何も聞こえはしなかった。

「至急、全員整列しろ！」

その声が響くと、甲板に乗員が全て並んだ。すると、エルヴィーラ副長がビアンカ艦長に体を向けると、ピシツと背を伸ばして言う。

「艦長、全員乗艦しました。準備完了です」

「(苦労さまよ)」

もはや、以前までのお遊びのような雰囲気はそこにはなかった。ビアンカ艦長も返礼として敬礼を短くすると、ついに始まるということを示していたのだ。全員が気をつけの姿勢でビアンカ艦長が眼前を通るのをただ見る。狭い甲板だが、その密接さが何処か気持ちよかった。

休め、とエルヴィーラ副長が言うのと全員が少し態勢を崩した。その全員が、緊張した表情を浮かべ、その顔ぶれをビアンカ艦長は前を行ったり来たりしながら確認した。そして、その表情を微笑みへと変える。船員全員を見て、何を思ったのかはわからない。だけれど、皆も一緒に、きつと気持ちは変わらず同じだった。

私達は、ワクワクしていた。好奇心、期待。ビアンカ艦長への視線が、その表情が……一部、誓った表情を浮かべている人もいれば少しうっむいている人もいるが……自信満々に微笑んでいたのだから。

そして、ビアンカ艦長が口を開いた。

「諸君。これより、出航する」

その声はしんと静まったその場に響く。全員の眼差しを、ビアンカ艦長は浴びていた。

「私は、君たちと共にこの海を征くことを心から嬉しく思う」

目を伏せ、その笑みは深まる。ビアンカ艦長は本気で嬉しく思っているのだろう。本当は誰よりも今ここで暴れたいのではないだろうか。教卓を蹴り飛ばすような人だし。なんて思いながらクスリと笑った。

「この船で行くことで、我々は様々な困難や逆境に合うだろう。周囲からの非難や罵倒もあるかも知れない。海での生活はさらに厳しいものとなるだろう。そうした苦楽を共にする我々は、絆を結ぶこととなる。それも、固い絆だ」

彼女は脳裏にある人物を浮かべていた。その人は手を振りながら、皆に見守られながら、船を出航させる。世界一と信じて止まないUーボート乗りの艦長。

「皆、私に力を貸してくれ。そして、皆でその逆境を乗り越えてみせよう！ 抜錨！ 総員、配置につけ！」

『J a w o h l H e r r K a p i t a n !! (諒解、艦長!!)』

皆が駆け出し、船へと乗り込む。そして、私達はここからはじまるのだ。ビアンカ艦

長は艦橋に立ち、叫んだ。

「海に生き、海を守り、海を往く！ 中速前進！ 方位三十五度！」

「方位三十五度！ 中速前進！」

私は復唱し、舵を取る。遠くに居たかもめが近く感じた。風は追い風。風速3。私達の祝福は始まったばかり——

アイルランドからさらに西。海上基地。

そびえ立つ学校は海が見渡せ、ブンカーは大きく、ドイツ最高峰と呼ばれるその基地のとおある高級で書齋とも取れるような上品さのある一室から、見下ろす気品のある老婦人。黒きコートに身を包んだ彼女はしかし、何処か遠くを眺めていた。

「校長」

その部屋に若い女性がタブレット端末を手に入室する。彼女の透き通る声は眼前の校長の耳に確かに届いた。

「ただいま全教育艦が出航いたしました」

「……確かこの中に、クロイツエル家の娘がいるらしいな」

校長の目線は変わらず、遠くを、しかし見下すのとは違って見守るように眺める。

「はい。アドミラルシユペーの艦長を務めています」

「そうか……」

その言葉に、校長はニヤリと口元を歪ませた。心待ちにしていた物語の続編が出た喜びのように、これからを思い、楽しんでいた。

「新任早々楽しくなりそうね」

ひとりごちたその言葉がそれを表していたと言えるだろう。クツクツと少し笑うと校長が言った。

「そして、フォーグラアの娘もいるときいたが」

「ええ、Uーボートの艦長ですな」

「——くくく……これもまた、運命なのかも知れないな」

本当に、楽しそうに、彼女は笑う。ただその表情だけは少し、憐れみを帯びていたのだった——

第四話：生活がピンチ!

一日目

燦々と輝く太陽のもと、灰色の装甲を鈍くきらめかせ、波を超えていく小さな船が其処にいた。艦橋には五人くらいしかおらず、皆一様にあたりを見回す。と言つてもその表情や観測はとてゆるゝいものだった。

「ふああ……」

「おい、ナターシャ。あくびをするんじゃない。アタシまで眠たくなるだろう?」

「ほええ……だつて、眠いんだもん」

目をこすりながらそう答えるナターシャ・アナンカ。ウトウトとしていて、とても仕事に集中しているようには見えない。むしろ夢の世界にお熱な感じだった。はあ、とため息をするソリナ・ラフマニノフ。背中まで伸びるその髪は波風にもてあそばせておき、ナターシャをじつと見つめていた。

そんな様子を私は甲板から眺めている。とつてもゆるゝいものだった。

本来、見張員の当直は四名で構成されており、今日も四人が配属されている。そのうちの二人がソリナさんとナターシャさんだ。

それ以外の人員は、艦内で休憩や他のお仕事にあたっている。が、まあ、私は当直でないものの、外に出てひとまず洗濯物を干そうとしていたけれど。これは委員長である特権なのだ。実際仕事はしてるし……。

しかし。

「やつぱりつまらないのかな」

ちらりとみえた艦橋では、ソリナさんもナターシャさんも眠たそうにしている……というより、ナターシャさんなんかはもう寝ているし、ソリナさんも眠気とシャドーボクシングをしていて半分寝ていた。見張員の当直の役割は、この広大な海の上で船や他の岩礁などを発見し、報告する役割である。そのため、正直にいうと大体の時間が暇なのだ。

それに、今日なんかは太陽が光輝いていて、風は気持ちよく温かいし、お昼寝にはもってこいの日和だ。そうなってしまいうのもうなずけるだろう。

しかし。

「ひやつほー！ 良い天気ね！ 海水も気持ちいいわ！」

「海に落ちたら助けられませんかから、飛び込まないでくださいよ？ つて、走つちや駄目

です！ おちますよ！」

「心配しなくてもいいよー航海長ー！ 今日の波は静かだからさー！」

「わかってますけど……観測者の皆に迷惑です!」

その一方で、水着を着て甲板の掃除をしようと言う建前で、ヴィクトーリア・オリーヴィア・シャルンホルストさんが柵を手に海へと大きく身を乗り出し、もう片方の手を海水へ突っ込んで遊んでいる。その短い髪を気持ちよさそうに揺らしながら、満面の笑みで戯れていた。う、羨ましくなんて無いんだからね。

そんな私の声にしかし、当直員のマルテさんが気だるげに言った。

「大丈夫です。どうせ、なにもないから」

「……はあ、観測者の皆も、仕方ないとはいえあまりだらけすぎないように! いいですね!」

その言葉に返答する今日の当直員たちは、それでもやる気が少し見当たらなかつた。ナターシャさんは変わらず寝ているし……。ソリナさんだけは、しっかりしていそうではあったが……。やっぱり船を漕いでいるのだった。

☆☆☆

ちやかぼこ、ちやかぼこ。

ディーゼルエンジンの動く音を聞くと彼女は幸せそうな表情を浮かべる。幼い頃か

ら馴染んでいた定期的な振動が、まるで電車の揺れのように心地よい。いくつも並んだディーゼルエンジンが二列あり、それぞれが2つのスクリューを回す動力となる。その間を行ったり来たりしながら、時折そのエンジンに異常がないか調べる。

彼女はレオニー。ベリーショートの前髪は少し揺れ、中性的な顔立ちとその喋り方から男性を連想させるが、その体は女性の特徴をしている。この機関部を任せられた長であり、本来ならば司令室付近にいるのだが、自然と体が機関室へと向かってしまっていた。「このエンジンちゃんはごきげんだね？」

「はい！ 何処までも私達を連れてつてくれますよ！」

そう笑顔で答えるのは、マルゴット・ヴァルトラウト・エンゲルス。彼女は作業着に腕を通し、軍手に黒い油を染み込ませていた。そして額の汗を腕で拭くと元気良く答える。レオニーの親友の一人だった。

しかし、その声に苦笑しながらナタリア・フィンコが突っ込んだ。

「いや、まずはこの3000kmの初航海、持ってくれなきやいけないし、ずっとごきげんじゃないと困るんだけど」

「まーまーまー、先のことはおいておこう。僕としてはどんなときのエンジンちゃんでも好きだからさあ」

「あんたは機械大好き女子だから止まってようがどうだろうが好きなんだろうけどさ、

あたしは無事卒業したいわけ。だから止まっちゃ困るんだよ」

はあ、とため息とともに、つまらなさそうにエンジンを回して回るナタリアはそう言っ
て計器を眺め始めた。せっかくの初航海だが、海洋上を眺めるのは当分できそうにない
ことに不満が募っているようだった。といっても、レオニーの予想でしかないと本心
は定かではない。

「ま、それはもちろん僕も困るから、しつかり見ておこうねー」

「退屈だあ……」

そして項垂れる。これからの船旅だって、基本はこういうことしかないというのに、
根性が足りないなあ。レオニーはそうは思いつつも、自身もこの無為に等しい時間が何
処か億劫に感じ始めていた。

「……あ、じゃあ、トランプでもするかい？」

しかし、なんとなしに提案した娯楽が、今後の虚無な時間を紛らわしてくれるのだっ
た。

「で、参加者は誰かな？ どのハニーとでも僕は楽しめるけれど」

「アタシは参加する。退屈だし」

「じゃあ、私も！」

後部魚雷発射管室にある木箱を中心に、レオニーの募集をかけるその言葉に集まった

のは先程声をかけていたマルゴット、ナタリアの二人だった。仕事を放り出して募集をかけたのはレオニーだったが、少しだけ、今後の旅路に不安を抱く。やれやれ、断って仕事をする選択肢はないんだね。内心で少しがっかりしていた。

そして、カードを配ろうとしたその時、もう一人、機関士がコチラによつてきた。

「ナタリアが参加するなら、私も参加させていただけようかしら？」

「お、マーシーもやるのか？　へへっ、楽しくなつてきたぜ！」

そう言つて彼女らの輪に入るのはメルツエーデス・リタ・リンデンベルガー。愛称は表情を変えることなく冷静なまま、この木箱の空いたスペースへと座る。レオニーは他に参加する人が居ないのを横目で確認する。

すると、奥の方にいたアンネリースと目が合い、彼女は困つたように苦笑した。どうやら参加する気がないらしく、そのままディーゼルエンジンの影へと隠れるように仕事に戻つた。

「んー4人かあ……まあ、いいか。カード配るよー」

「よっしや、アタシの強さ、とくと見やがれ！」

「私だつて、負けませんよー！」

「ナタリアが悔しがる顔、拝ませてもらうわ」

「んだとお!？」

そして、配り終えたあと、手札の中に二枚数字が揃ったカードを、箱の中心へとおいでいく。いわゆるババ抜きである。この手の勝負事ではレオニーは中の下の幸運度を持つている、と自覚していた。何度かハンナたちと皆でやるのだが、負けることが多いのだ。

くすつと笑って、ふと気になったことを、カードを切りながら聞いた。

「あのハニーは誘わないのかい？」

「ん？ 誰のこつたよ」

「向こうにいるアンネリースき。皆とやったほうが楽しいと思うんだけどね？」

「……別にいいんじゃない？ やりたかったら来いって言ったけど、来なかったのあいっだし」

「そうね。誘ったけれど、断られちゃったし」

「それに、もう配っちゃいましたしね！」

「……そうだね」

しかし、やれやれ。

ナタリアとアンネリースにちらりと目を向け、カードで口元を隠し、苦笑する。今後の海洋生活は前途多難だろうなあと。嫌な予感程度に収まると良いけど……。

マルゴットからカードを一枚とってため息を付いた。

U—ボートの艦首側の部屋は魚雷発射管室と呼ばれる。そこでは、艦首魚雷のハッチに魚雷、そして折りたたみ式の寝棚が用意されていた。艦橋要員の五名と各委員長、一部副委員長等以外の人はここで寢床を共有している。通称『人肌ベッド』とよばれ、不評を買っていた。とはいえ、魚雷はそんなに積んでおらず、人数が本来よりも少ない上、一週間程度の航海であるがゆえに一人一つのベッドが与えられていた。

とはいえ、向かい合わせにお互いが見え、プライベート空間がほとんどなく、全員が共有し合う場所であるがゆえに、色んな問題が発生しやすかった。

「あー、こちら！ ゲルト！ またトランプしてるでしょ!？」

キーンと響く怒号が魚雷発射管室を襲う。そんな声の先にはテーブルを囲う四人の乗組員が居た。彼女たちもまたトランプを手にゲームをしており、航海中の今を楽しんでいた。だが、注意をする彼女、マヌエラ・ルート・ブルクハルトは職務中のトランプゲームについて怒っているわけではなかった。

「んあ？ いやまあ、暇だしねえ？ じゃあ、この勝負あたしや40ユーロ賭けるとしよ
うかね」

ああ、いつものことかと慣れた風に、マヌエラにそう答えるのはゲルトルート・パト

リツイア・グラツツエル。そう、マヌエラが問題視していたのは賭け事だった。プライベート空間のほとんどないここでの問題、とはまた、違った問題であった。

ゲルトルートは額に当てたカードを眺めると、手元にあつたお金を前に出した。

「どんどんレートを引き上げるじゃないか。でも、私もまだ降りはしないよ。ま、つまり私の手札は勝ちに近いということだ」

しかし、そんなゲルトの宣言に対抗してか、クラウディア・レツチエ・フォン・アルノー・ド・ラ・ペリエールが挑発をしながら続行を選んだ。その表情は笑みで隠れており、自信ありありで堂々としたものだった。さすがは貴族である。

「ええ? ほんとかあ? まあ、それで泣くのはあんたかもねえ」

だが、その挑発に仕返す挑発も忘れないゲルトルート。額に押し当てるカードの数字を知らぬまま、彼女は強気な発言を繰り返していた。そんな状況を見たマヌエラの脳裏によぎったのは、過去幾度となく負け続けるゲルトの姿だった。

「ふっふっふ……我が邪神の目が疼く……我が手札よ、勝どきをあげよ。我は降りるぞ」「堅実じゃないか」

そして、今度は制服を少し乱し、格好をつけたように着こなす、訳の分からない少女が涙目で堅実にお金を差し出した。彼女はヘルミーネ・キルシュネライト。自身のことをヴラドと名乗っているが本名は全員に知れ渡っている。今日の右目は邪神の目らし

い。

「……」

そして、無言でヘルミーネ……いえ、ヴラドと同じ様に降りるのはザシャ・ボルマン。彼女は声が出ないという障害を持っている。そのため、コミュニケーションを取る際は筆談で行うような子なのだが、意外なことに賭け事に参戦していた。しかも余裕の態度でやる気満々である。

「つてちよつと！ 無視しないでね!? 風紀つてのがあるでしょう!? てか、クラウディアさんは貴族で砲術委員長でしょうが！ 何やつてるんですか!」

と、いけない。自身の仕事を忘れていたマヌエラは、この中で自身よりも偉い責任者に問いたです。しかし、その言葉に微笑んで彼女は答えた。

「ふ、貴族の嗜みとして賭け事というのはよくあるものだ。それに、カードゲームは得意だ。あと、風紀に関してだが……この艦内でのみならある程度自由にしようと思ってるんだ。そこら辺は許してほしいのだが」

「いや駄目ですよ!?!」

何を言っているんだこの人、と突っ込む私。貴族の嗜みとか、今船の上なんですけれど。

「いいじゃあん、ちよつと硬いよ?」

「ゲルトは黙ってて!」

「けち……マヌエラはいつつもあんな感じなんだ。許してあげてねえ?」

「なんで私が悪いみたいな感じなの!」

「ふ、私は器が大きい故……その程度のことなどちっぽけに過ぎんわ」

「うっさい中二病!」

「ちゆ、中二病ではない!」

「……」

ザシヤは器の大きさは何処行つたと筆記で突っ込むも、膠着する睨み合いにフツと嘲笑してそのメモ用紙を捨てた。

「はあ……でも、これだけ暇なんだし、休憩時間くらい良いでしょ?」

「いや、だから、賭け事が駄目だって言ってるのよ!」

何度も言うが、問題視すべきは賭け事の部分だ。一応、自身らの年齢を考えると16である。そう、まだ成人を迎えてはいないのだ。正直な話校則でも禁じているはずで、バレたら結構怒られるどころか、停学だってあり得るのだが。クラウディアが微笑んで言う。

「まあ、この艦の中でのみ、だからな。さあ、どうする?」

「勝負さ……!」

両者は不敵な笑みを浮かべて、勝負は再開した。互いに睨むは相手の額のカード。残ったゲルトルートとクラウディアが、声を合わせて言う――

『せーの！』

☆☆☆

「と、まあ。そんな感じで、皆さん自由に過ごしてますね。甲板に出て遊ぶ人、トランプとかボードゲーム、スマホゲーとか。独りで過ごしたり複数で過ごしたり、様々です」
そう言い出したのはラツヘル・ルイーゼ・ハーニツシュ。記録係の立場として艦内全域を見回り、ピアンカ艦長やエルヴィーラ副長等の発令所要員方へと報告することが主な仕事であった。だからか、今は本日の出来事を日記帳に纏めて、それを報告していたのだった。座りながら聞いていたピアンカ艦長はふうつとため息をつく。

ここは発令所。中心に司令塔、艦橋へとつながるはしごがあり、艦の浮上や潜航、航法、戦闘指揮等、そのすべてを司る。進行方向右側に舵手席があり、エリヴィエラ・フォミナ・フォン・ローテンブルク、マルレーン・ティアナ・ベルツの二人がそれぞれついていた。また、その二人の後ろに機関室から戻ってきたレオニーが立っており、計器を眺めていた。

他にはジークリンデもいて、計6名がこの場に立っていた。

「なるほど。みんなは遠足か何かかと思ってるのかしら」

「はは、でしようね? 初航海ですから気分が乗ってるんでしょうよ」

やれやれと肩を上げるジェスチャーをとりながら、ラツヘルは苦笑した。ビアンカ艦長は海図を再び見直し、うーんと考え始める。

「そうね……それじゃあ、初航海の一日目だし、美味しい料理でも振る舞って、祝いましょうか」

「それは嬉しいですが……良いんでしょうか?」

バレたら怒られるかもしれないよ?とラツヘルはニヤニヤしながらさういう。この事実をネタにするけれど、それでも良いというのか?と挑発するかのようだった。しかし、ビアンカ艦長はフツと微笑むと、良いともと答えた。

「これからこの船は私達の生活そのものだもの。楽しく過ごせるようにすること、お祝いごとをしっかりとすること。そしてそれを切り替えて自分たちの任務を全うすること……それができて一人前でしよう?」

「まあ、確かにそうですが」

「だから、今日は思い切り楽しませる。明日からはすこーし引き締めてもらおうわ」
「すこーし、ですか」

「ビアンカ艦長の言葉に苦笑するラツヘル。その表情を尻目に、ビアンカ艦長は続ける。」

「船の上は、つまらないものよ。大半が暇なの。ダレて仕事ができないよりは息抜きを挟んだほうが良いわ。ただ、仕事までダレてたり遊んでたら私が怒るわ」

「諒解です。じゃあ私はそれらを監視してますから」

「チツプは弾むから」

「はあ、と溜息をつくような、つまらないなと体现するような態度で答えるラツヘル。だが、ビアンカ艦長のその言葉にラツヘルはばあつと満面の笑みになって答える。」

「ありがとうございます」

そしてそのまま、上機嫌に去る彼女の背を見てビアンカ艦長は「現金な奴め」と苦笑しつづやいた。

すると、丁度梯子からカンカンと靴を鳴らし降りてくる音が耳に入った。其処に居たのはいくつかの洗濯物をカゴいっぱいにし、抱えているハンナだった。

「やあ、ハンナ。丁度航路について相談があったの。魚雷発射管室の皆は暇だろうし、洗濯物を畳んで片付ける作業をそっちに回してきて」

「ヤヴォール（諒解）、ビアンカさん」

「ふふ、ここでは艦長（カピティーン）よ」

「ヤー、艦長（カピテーン）」

そう言つて二人はクスリと笑つた。ハンナは洗濯物を持つて、ハツチのある丸い通路口をくぐり、細い狭い通路を渡る。そして、ついた先でハンナは驚くことになった。

「と、クラウディアさん？ この洗濯物を皆で片付けてほし……」

「ハンナさあん!!」

「え、なに、え、マヌエラさん？」

足にへばりついた半泣きマヌエラさんがハンナを襲う。洗濯物に関しては特に問題はなく、とりあえずその荷物をおいた。

「ハンナさん、見てください！ 賭け事をして、この有様なんです!!!」

その言葉と差し出す手の先を見ると、貧富の格差という題材で芸術展に出せそうな構図ができあがつていた。クラウディアとザシャはドヤ顔で腕を組み、下段ベッドに腰掛け、足を組んでいた。特に突っ込むべき所はゲルトルートさんとヘルミーネさんである。まさに死屍累々、屍と化していた。ゲルトルートさんは真っ白になつてゐるし、ヘルミーネさんも涙目だし。

「くう……屈辱だ……殺せえ……」

「ま、もう巻き上げられるものも無さそうだし、これで終わりだ。それに交代の時間も来るころだろう」

「そうですね。洗濯物は帰ってきた人達に任せますけれど……ええつと、何があつたんですか？」

「なあに、ちよつとした勝負事だ」

「いや、賭け事つて聞いたんだけれど……」

ふうやれやれとため息をつくクラウディアさん。その隣でザシャさんも同じようにドヤ顔で苦笑する。なんだろう、ちよつとイラツとした。

何がちよつとよ！ とマヌエラさんが突つ込んだあたりで、先程まで艦橋に居たソリナたちが通路から現れた。

「クラウディア、交代の時間だよ。エーリカとヴィクトーリアの二人がまだ元気そうだから、甲板においてきた。二人向かわせてやってほしい」

「わかった。じゃあ、ここはザシャと私が向かおう。ゲルトとヘルミーネ、マヌエラは発射管についてくれ」

「だ、だから私は……我は！ ヴラドと！」

そう言う二人は逃げるようにして通路へと消えていった。ふう、と一息つくソリナはしかし、その休憩スペースの状況を見て絶句した。

「ええつとお……お腹でも減ってるのかなあ」

「いや、こりや死んでるっしょ」

「死屍累々であります」

ひよこつとソリナの後ろから顔を出した当直メンバーのナターシャさん、マルテさん、ラーエル・ザンドラ・アツヘンバツハさんも、二人の爆死姿とマヌエラのだからこくなるって言ったのにとり頭を抱える姿から、各々絶句していた。

「……ええつと、とりあえず、当面賭け事は禁止です。あと、これから休憩の皆さんや暇な方は洗濯物を畳んでね」

そして……ハンナはそう言つてにつこり微笑むと、ソリナに丸投げをして発令所へと戻った。

「……やれやれ。とりあえず、洗濯物を畳もう。其処の三人も手伝わないと、ジークリンデからお怒りを食らうよ?」

ソリナもまた、思考停止に近い自身の頭を回し、とりあえず受けた命令をこなすことを優先した。彼女に似合わない、遠い目で。

☆☆☆

そして、それから数時間後。時刻は夕暮れを越し、艦橋から見える景色はほぼ闇に包まれた。波の揺れはなく、しんと静まった海をゆつたりと進むUーボート。その発令所

にピアンカ艦長は顔を出した。

「何処に行つてたんですか？」

「あー、ちよつと厨房にね。今晩は初航海一日目だし、ちよつとしたパーティーがしたいつて思つたから、豪勢にしてみらつたわ」

「へえー！ 楽しみですね！」

そう答える私に、ピアンカ艦長は嬉しそうに微笑んだ。それを隣で聞いていたジークリンデさんも眩くようにコチラに言う。

「私も楽しみ……」

「ジークリンデさんも一緒に食べましょうね」

「うん」

ジークリンデさんの笑顔つて、貴重だ。このときの微笑みは凄く可愛いものだった。普段からジト目でムスツとしている分、破壊力が増す。なんだろう、少しだけ、ほんのちよつぴり、レオニーさんのジークリンデさんをハニーと呼びたい衝動がわかつたような気がしないでもない。

「ハニー達！ 僕も楽しみだよ！」

「私もですわ」

「我もじゃ。祭りというものはいつだって、心を潤わせるものじゃしの」

そら、噂をすれば影がさす。と言つても、同じ発令所にいたのだからこの会話が聞こえないはずもなく、レオニーさんとエリヴィエラ・フォミナ・フォン・ローテンブルクさん、そしてツエツィーリア・アデーレ・キルヒシュラーガーさんがそう答えた。

「だけれど、ローゼマリーが洩るから説得に少しかかったわ」

「あー……ローゼマリーさんかあ」

ローゼマリーさんとは、私達の炊事と会計担当で、美味しい料理を振る舞つてくれる人である。本名はローゼマリー・アンナ・オツペンハイム。補給とか色々と担当しているけれど、少しケチくさい人なのだ。また、金持ちが嫌いなのか、貴族に対しては高圧的であつたりする。ピアンカ艦長がそうでなかったことを喜んでいたりもしたような。

「残りの食料から考えて全日程の献立を作つているからつて言つて、引こうとしないだもの。まあ、最後にはやつてやるわよつて怒つて納得したのだけれど」

「常に怒つているような人だからなあ……」

「容易に想像できるんじゃないが」

「あのハニーは茶化すと殺しに来るからなあ」

「口も悪い……」

口々にローゼマリーさんの愚痴を語る私達。ちらりとラジオルームの方を見て、彼女が居ないことを確認してホツとする。聞いていたら夕食を抜きにされるかもしれない

からね。おそろしあ。

と、其処に梯子を滑り、上からエルヴィーラ副長が降りてきた。そして、地に足をつくくなり彼女はまっすぐビアンカ艦長へと向かう。

「艦長」

「何？」

「そろそろ当直第三班たちと交代の時間です。今の時間にパーティーはいかがでしょうか」

すると、少し思案するビアンカ艦長。少し調理を早めるメニューに変えてもらうか、それとももう少しだけパーティーのタイミングをずらすか。伝声管の発声口に近づくと艦橋の見張りたちと連絡をとった。

「現状、波はどう？ おおよそ静かだと思うけど、揺れる？」

『問題はない。波は静かで、すべてがとても綺麗だ。芸術として名をつけるのなら、【期待と羨望】といったところだ』

とても上機嫌に話すのはクラウディアさん。命名するのが好きなのだろうか……テーマを決めるとき然り、今の景色然り、テンションが上がると格好の良い名付けをしている気がする。準中二病患者と言っても差し支えないだろうなあ。

「ふふっ。なら、そろそろ切り上げようか」

『もう少しだけ眺めていたいが、皆足がつかれてしまっている。これ以上は難しいだろう』

「あー、ただその場で待機してほしい。このあと全員甲板へ向かわせるから」
『うん？ それはどういうこと——』

そう言うのとビアンカ艦長はくるりと振り返る。発声口は閉じられていた。まあ、あとで分かることだから、クラウディアさんはサプライズとして楽しんでください。

「さて、それじゃあもう一度ローゼマリーのもとへ向かうわ。エルヴィーラ、全員に甲板へ集合と通達。ランプとライト、キャンドルを持ってね？」

「ヤヴォール。——総員に通達。各学科副委員長、委員長はそれぞれの学科生を率いて皿を持って甲板へ集結せよ、かな。行ってくる」

エルヴィーラ副長はラジオルームに行くとき、通信係のアデリナ・ペトラ・フローエさんにそう伝える。程なくしてその内容文は艦内放送で流れてきた。ビアンカ艦長は機関停止を命じてこちらを向いた。

「始まるわね……」

「そうね。それじゃあ、私達も行こうか。甲板へ」

「そうだね。じゃあ、ハニー達、二人も先にどうぞ？」

「切り上げさせてもらいますわ。またあとで」

「さて、ではまたな」

そうやってビアンカ艦長やジークリンデさん達が先に上がっていく。無論、私もそれについていくのだが、とりあえずはこの発令所に集まってくる皆を誘導して登らせるのが先だった。登らせる際に幾人かは不安げにしたり、上機嫌だったり、不機嫌だったりしているのがわかる。まあ、狭くてしんどいこんな船に乗せられたんだもの。仕方ない気もする。

全員を上へと登らせ、最後に私が登る。そういえば洗濯物を回収したあと外へは出ていない。送付と思い出すと、船から見える外の夜景を心待ちにしていた自分に気づいた。わくわくする。全員でのパーティーも、その夜空も。

高ぶる気持ちを少し抑えて、駆け足気味にその梯子を上へ上へと登っていった。タンタンタン。真上に見えるハッチは開いており、空が見える。近づいたびにそれは開けていき、やがて艦橋にたどり着いた頃には頭上一杯に満天の星空が広がっていた。

「ハンナ、どうしたの？」

ビアンカ艦長の声が聞こえ、私ははっとする。ハッチのところから出て……そして立ったままだったのだ。クスツと笑ったビアンカ艦長が隣りにいた。

「すごく綺麗ね」

ビアンカ艦長は天を仰いでそういう。ため息をつくように声に出たそれは、そのほほ

笑みから見てもわかる心からの歓喜の感情だった。私はい、と答える。波は静かで、街の喧騒はなく、その明かりもないこの場からは、一つ一つが小さくても見える輝きを発している星々がよく見える。クラウディアさんの言ったとおり、一言で言い表せはしないが、美しかった。

ふう、と一息をつくときビアンカ艦長は私に向き直る。

「さて、と。私は挨拶があるからここに居るけれど、貴女は降りましょう?」
「はい。向かいます」

微笑んでそう言つて、艦橋後方側面の下るラダーから甲板へと降り立つと、前方の方へと向かう。其処には105mm砲を囲んで、いくつか皆が待ちぼうけをしていたところだった。

皆は手に紙コップを持っており、其処にはジュースが注がれていた。私ももれなくそのジュースを頂くこととなるのだった。

「では、諸君。傾注!」

いつの間にかビアンカ艦長の隣りにいたエルヴィーラ副長がそう大声を出すと、皆がビアンカ艦長らに注目しだした。そして、ビアンカ艦長はふつとわらつた。

「ヴィルヘルムスハーフェンを出て、そろそろ一日目が終わろうとしているわ。皆はどう感じたかしら? 楽しい? 嬉しい? それとも不満? この生活は他の艦船と

は違うものね」

そう切り出したビアンカ艦長に、皆は思い思いに口に出す。もう少しマシな船で出たかったとか、でも、この景色は素晴らしいだとか、退屈だとか、楽しいだとか。

いくつもの感想を聞いてビアンカ艦長はウンウンと頷いた。その微笑みは私達を見守る母のようだ、なんて、私は極大な妄想をしつつ傾聴する。

「うん。正直でよろしいわ。……私は初め、不安だったわ。艦内は狭いし、トイレも狭い。一人の空間もなければ、シャワーだって共用だから長く安らげない。その上こうして甲板の上に立って、太陽の光を体いっぱい浴びるのだって少ないこともある。……でも、同時に特別だと思った」

そういったビアンカ艦長に、皆は静かになる。静かに、その言葉の一つ一つにうなずいていた。やっぱり、不満は大きいよね。でも、その静けさのおかげで、波の音が心地よいBGMとなっていた。

「私達は特別よ。他より厳しい条件だし、辛いことも多分たくさんある。でも、ここで生活すれば、私達は他の艦船の人たちと比べて一回り大きく成長できると確信してる」

その言葉に皆がフツと微笑む。全員ではないけれど、きつと笑みを浮かべてない彼女たちも今日一日を過ごしてその言葉の確信を実感しているのだろう。と言っても、殆どが暇だったからこれからが大変なんだろうなああって思う。

「私は、あなた達を信じて航路を征くわ。今日この日、初の航海を祝して……乾杯!」

そう言つて、杯を掲げるビアンカ艦長。皆は笑顔で声を揃えたのだつた。

『乾杯!!』

それから少し。食事は皆に行き渡り、それぞれが楽しく雑談し会食を進めていた。食事を配り終えたローゼマリーさんは残したらサメの餌つて叫んでいたから、こぼさないようにしつつちゃんと食べるようにする。私も例外ではなく、万が一にも本気で海に落とされないように食事をする。だつてローゼマリーさんこういふとき本気で怖いんだもん。

「や、ハンナ」

「あ、艦長。お疲れ様です。良い前説でした」

「ああ、あはは、ありがとう」

すると、ビアンカ艦長が私の元へときた。私の言葉に照れながら、困つたように笑うビアンカ艦長。そのまま、視線は空へと向かつたので、私も同じように空を眺める。丁度、少し欠けた綺麗な月が海面を、私達のこの先をも照らすように輝いていた。そして、視線を彼女へと戻す私。そんな月を何処か愛おしそうに眺めるビアンカ艦長から、何故

か寂しさを感じた。

「……貴女は何故ブルーマーメイドになろうと思ったの？」

すると、ビアンカ艦長はそう私に訊く。何故、ブルーマーメイドになろうと思ったのか。女性なら誰もが憧れる海を守る女神、ブルーマーメイド。それはどこまでも格好良く、皆を助ける誇り高い仕事だった。

私は、そのあこがれから、初めたんだっけ。

「……皆を助ける、そんな素晴らしい仕事に憧れたから、かな……」
いいや、違うんだ。

私は……本当は、そんな崇高な考えでなりたいたいと思っていない。どころか、何故なるのかすら、実はあまり浮かんでいない。流れで、親のすすめで、そうあろうと思った。それだけなのだ。

私は、海を眺めながらそう答えたことを少し後悔する。ビアンカ艦長にだけは、ちよつと見栄を張りたかったのだ。

「素晴らしいわ……私は、お祖母様に無理やり入れられたのよ」

「え、ええ？ そうだったのですか？」

しかし、私の答えとは違った……いや、同じ答えのような理由がビアンカ艦長から語られた。予想外なんですけど。だって、ビアンカ艦長、海に生き、海を守り、海を往くつ

て言つてたじゃん。ちゃんと覚えてるつてことはなろうと考えてたんじゃ……?」

「そうなの。本当は漁船とかに乗る、船長や漁師になりたかつたの」

「ええええええ……」

似合わない……。正直今の格好がしっくり来る私としては、船長は似合うかもしれないとしても、漁師姿なんて想像できやしなかつた。というか、衝撃的な夢なんですけど……。

「今、失礼なこと考えてなかつた?」

「そんなバカな」

「……まあ、いいわ。他人の夢は他人の夢よ。それが悪いものでなければ、誰であつても馬鹿にしちやいけないわよ」

「……すいません」

反射的に謝る私。ヤーパーン魂の負の側面が教わつたからか私に宿つたのかしら。あらやだ。

「やっぱり失礼なことを考えてたの?」

「ち、違います!」

そしてこのような誤解が生まれるのだつた。や、ある意味誤解ではないかもしれないけれど……。

訝しむビアンカ艦長は、しかし、その口角が少し吊り上がっていた。あ、悪い顔して
るわ。

「ほんと?」

「本当です」

「ほんとかしら?」

「本当ですつてばあ」

「……ふふふ」

「もう……」

いたずらを成功させた子供のよう、無邪気な笑顔を見せるビアンカ艦長。私は文句を言いたげにするが、つられて笑ってしまった。どことなく憎めなくて、そして可愛らしいその笑みに私は魅了されたのだろうか。なんて。

そうしていると、遠くに居た艦橋メンバーの内、レオニーさんが私達を呼んだ。と言つても狭い甲板だから、大声でなくても聞こえてくる。

「あ、皆が呼んでますね……行きましょう、艦長」

「ええ、行きましょう」

空になった皿を置きに行くついでに、エルヴィーラ副長たちの元へと二人は向かった。皆の話も聞いて、もっと仲良くなりたい。きつと、たぶんだけれど、少なくともそ

のために学校へと足を進めたのだから。

この日の晩餐会は美味しく、楽しいものとなった。これまでの苦勞もあるし、同じ船員としてふざけあつて、話をして……。そんな私達を、星々と月は照らして見守つていてくれたのだつた。

第五話：邂逅でピンチ！

初航海初日から最短距離をとって、5日くらいが経った。途中、何故かビスマルクとグラーフ・シュペーが並走し、叫んでいたけど……喧嘩するほど仲がいいのか、悪いのか。

ビスマルクの艦長ことクローナ艦長のことと、グラーフ・シュペーの艦長であるテア艦長のことはどちらも聞いたことがあった。前者は貴族の方で、とても高飛車で感じはちよつと悪い人だつて聞いたし、後者に至つては海の妖精で、面白い挨拶を皆の前で披露したぶつ飛んだ人だし。

天才と、傲岸不遜。そりや喧嘩もするわ。

何はともあれ、私達は海上基地へ着港し、無事初航海を済ませた。あれから語ることが殆ど無いと言つても差し支えない。だつて、ずっと暇だったからゲームして、雑談して、洗濯物や色々な家事をしてつて感じで、特に問題もなかったからね。暇すぎて皆、疲れていたのが印象的だったなあ。暇は逆に疲れになるんだ。

「しかし、何というか、綺麗なところだね」

「うん……さすがはドイツ最高峰つて感じ」

「イングランドの隣……ドイツ最高峰……?」

「それ以上いけない」

私はレオニーさんとジークリンデさんのいつもの三人で並んで歩いてきた。巨大なブンカーに停泊した私達は中から伝って校内へと向かう。ビアンカ艦長は先頭で、エルヴィーラ副長と話しながらある場所へと向かっていった。私達船員はそれについていく形となる。多分、その場所でそれぞれの専科とかに分かれるんじゃないかな。

雑談を交わしながらビアンカ艦長に続いていくと、開けた場所に教員の制服に身を包んだ女性が立っていた。そして、他の艦の乗員たちも。

「どうやら、私達は最後辺りだったようだ」

エルヴィーラ副長がそう言うと、ビアンカ艦長もそのようねと頷いた。大体の人達が揃っているようで、私達も早々に並び始めた。そして、女性は咳払いを一つすると私達に話し始める。

「全教育艦、初航海お疲れ様でした」

淡々と話を続ける教官は、最新タブレットを手に私達全員の状況と、今日の予定と今後の日程を読み進めていた。

「それでは早速ですが、これから一ヶ月、この基地で基礎を培ってもらいます。各専科に別れて指定の教室に向かってください」

それじゃあ、艦橋要員とその他専科ごとに分かれるのだろう。ソリナさんとかとはまた後で会うということになるなあ。そう考えていると、更に彼女は続けた。

「ただし、艦長とそれ以外の艦橋要員は別行動になります」

「え？　なんで艦長だけ別ですか？」

後ろに居たエリヴィエラさんが、そう疑問をつぶやいた。確かに、艦長だけ何故だろう？　私も疑問に思うところはあられるけれど、艦長は艦の総責任者である。別で何か教えることとかあるのだろうか。海はすごいぞー、とか？

「まあ、なにかあるのでしょ……」

「ジーク、何かって……まあ、そうだよね」

レオニーさんもジークリンデさんも、私と同じように考えていたようだった。艦長だから、という理由が一番わかり易いのだ。

「……以上よ。各自移動を始めなさい」

そして、私達は別々に行動を取るのだった。私を含む艦橋要員は艦橋要員で固まって、別の教室へ。それ以外の船員はそれぞれの専科のクラスへ。そして、ビアンカ艦長は艦長たちが集まる……ちよつと気になるくらい位の高そうなクラスへ向かうのだった。

「じゃあ、またあとでね、ハンナ」

「はい。またあとでー」

少し元気を振り絞って、そう答えてビアンカ艦長を見送った。その時のビアンカ艦長の表情は少し不安が滲んでいた気がする。そうぼうつとビアンカ艦長の行く背を眺めていると、レオニーさんに呼ばれた。

「いくよー」

「はい」

そして、このあと……最初の難関と呼ばれるミツシヨンに直面することになるのだ。それも……過去に類を見ないほどの……。

扉をくぐると教卓と黒板を中心に、半円状に広がった教室が目の前に広がった。そこには他に、私と同様の格好をした人たちがたくさんいた。そう、艦長にのみ許された外套を身にまとう少女たちだ。それを見てふと自身の格好を見直す。そして、ふつと笑みが漏れるのに気づいた。

今朝、ハンナが緩んだネクタイのまま食事に現れた私を咎め、昨日も一昨日も緩めて、もう!とか文句をたれつつ直してくれただけ。なんて思い出す。

自身の身だしなみは気をつけなくなってきたのは何時からだっけ。それを気にせず居たからか、ヴィルヘルムスハーフェンでは不良と言われていた気もする。だが、私

は自由に過ごしていただけに過ぎない。だというのに、あの子は、口酸っぱく……。

などと考えていると、視界にとある艦長が入ってきた。その背は小さく、しかしどことなくオーラのある少女だ。私の第一印象はその程度だった。だが、確か最初の挨拶が短くて助かった子だったのは覚えている。

「こんにちは。貴女がテア・クロイツェルかしら？」

「ああ、そうだ。何か？」

「いえ。こうして話すのは初めてだと思つてね。よろしく」

「よろしく」

握手こそ交わさないが、お互いに目を合わせればだいたいそれと同義である。私は先生方がまだ来ないのを確認すると、そのまま話を続けた。

「私は——」

「知っている。貴女の名前はビアンカ・フォーグラードらう？」

「あら。なんで知れ渡っているのかしら」

「Uーボートの艦長はこの学校始まって以来貴女が初めてだ。あとミーナからも聞いた」

「へえ？ 案外私は有名人なのかしら」

「良い方でも、悪い方でもな」

「……………でしようね」

周りを見ると、私を見てほくそ笑む上流階級共と、珍しそうに見てくる子達が居た。そういえば、自由に席へと座るのだが、テアの周りは少し空いているように感じる。

ごめんなさいいねと続ける私に、テアは気にしていないと答えてくれた。優しい上にごの子、可愛いわね。まるで人形のようなだわ。あまり表情を変えないが、その愛くるしいほつぺたとか、どこことなくハンナに似ていた。

「クロイツェル家、といえば……………私の父が貴女の母に世話になったこともあつたようね」
「何? 母が?」

「おおっと、何この食付きよう……………そ、そうよ。と言つても、学生時代らしいけれど」
「どんな感じだったと聞いている?」

グイグイくる彼女に若干気圧されながらも、私は話を続ける。

「ん……………破天荒、だったって聞いたような……………男子校と女子校の決闘になって、ボッコボコにされたとか……………またやらかしたとか……………? 他は、覚えてないわね」

「……………そ、そうか……………」

何というか、彼女はしゅんとしてしまった。その姿がまた愛らしいのだけれど。ああ、ハンナ、これが撫でたい衝動というものなの?

「まあ……………そのよしみと言つては何だけれど、仲良くしたいものね」

「……そうだな。母のことを少しでも教えてくれてありがとう」

「いや、こちらこそ。助けがいるときは、私を呼んでね。海面から飛び出て救いに行くわ」

「キールを折らないように気をつけてな」

「そんな勢いよく飛び出ないわよ」

ふふつと二人は笑い合うと、会話をそれまでにした。そして私は適当な場所へと移動する。きつと言い渡されるのは教訓やその他の実技テストの概要というような生ぬるいものではないだろう。なにせ一ヶ月だ。きつと何かあるに違いないと私は考えていた。

だから、これは個人的な考えではあるけれど、一人でそのミッションを噛み砕いて実行したいのだ。艦の上で指示を出すのは他の艦長ではなく、私なのだから。

「あら、油と汗臭い艦長さんね」

と思つたら、通りがかりに言いがかりを食らう。と言つても、その嫌味は的確かもしれない。自身の体の匂いを嗅ぐのをぐつとこらえ、ニヤリと笑つて何かしら？と私は答えた。どうせ無視したつてしつこい輩だろうし。

「ちつこい船の船長が艦長気取つちやつて……まずはシャワー浴びてきなさいな。私達艦長の品位を下げないでね？」

「は、大きな玩具を頂いて、王様気分かしら?」

「なっ……!」

そう言われて、少し驚いた顔をする彼女は、片目を前髪で隠したポニーテールの艦長、クローナ・ゼバステイアン・ペロナ。私の認識では何かと特別扱いを受ける輩を嫌う、いじめっ子だ。と言っても、彼女の対象はだいたい彼女よりも大物であることが多いため、何故私に突つかかるのか……まあ、理由は大体私がUーボート艦長というハズレくじの艦長であることと、おそらくテア艦長とのいざこざの八つ当たりなのだろう。

彼女はフツと余裕を出して微笑む。流星は貴族様だ。余裕を持って、優雅たれ?

「あの『豆』にも劣る量産品が、何を言ったところで負け犬の遠吠えにしか聞こえないわ」
「そう。灰色オオカミは大きな獲物の首を噛み切るのよ? せいぜい気をつけなさい」

どうやら、私は彼女の中でテアよりランクが下の艦長と考えているらしい。きつと、ある程度テア艦長を認めての発言だろうな……と甘めの採点をしながらそう返して私は離れた席へとついた。教師が扉をくぐってきたのが彼女にも見えたのか、舌打ちをしながらテア艦長の隣の席へと移動した。わざわざ嫌味を言うためにいったのだろうか。律儀な人ね。

そして、女教師の「皆、注目!」の言葉にその場は静かになった。私も同じように静かに、そしてこれからの話しに傾注したのだった。

☆☆☆

「話はこれでおしまいだ。行きたまえ」

それから、少しして。教室内は嫌な空気が流れていた。まず、この学校の学長が現れたことに驚き、そして学長が言い渡したミツシヨンにも驚かされた。それがこの場にいらる艦長全員を不安にさせるのに十分なものだったのだ。

私としても、少し予想より離れていたミツシヨンだったと言える。一ヶ月の間、何かしら厳しい航海ミツシヨンをするのだろうと思っていたが……。

暗号通信用紙を頂いて教室を去る私。やけに心臓の音がうるさいのが気になった。きつと、これからを考えて無意識に不安に思っているのだろう。なんとなく、船員のエーリカ・フリーデ・アーリンゲの顔を浮かべると自然と治まってくる。彼女の元気さは玉に瑕だが、こういうときは何故か笑ってしまえるものだった。いつかした、彼女とランニングの約束はまた今度になりそうである。

そして、少し歩いたさきにある休憩所で、少しの間座る。他の乗組員たちのお話はどうう少しかかるとのことであり、それが終わるのをこの場で待つこととしたのだ。一人のほうが良いときつてあるじゃない？

すると、後ろから声をかけられた。

「ビアンカ・フオーグラ―」

「はい……なんでしょ——学長……!？」

振り返ると、美しく老いた女性、ケルシュティン・ロッテンベルク学長が其処に居た。彼女は先程のようにまだ青い果実を眺めるような挑戦的な視線や笑みではなく、少し優しげなほほ笑みを浮かべていた。疑問に思いながら、彼女に問う私。え、何……あの場で話していらつしやるとき、ちよつと船を漕いだことがバレてた……？

「君がヨアヒム・フオーグラ―の娘なのか。確かに少し面影があるが……ふ、母親似のようだな」

「……父を、知っているのですか？」

しかし、返ってきた言葉が予想外だった。ヨアヒム・フオーグラ―とは私の父であり、知っているとはまさか思うまい。だって、私の父は男子校の生徒であつたし、その後は確かにホワイトドルフィンとなつて世界中の海を守る騎士となつた。そんな父と、接点があつたのだろうか。

「もちろん。私の受け持った生徒が一人、男子校と色々あつてね」

「ああ……」

なるほど、テア艦長の母君関わりだ。何となく一瞬でわかるのは、クロイツェル家の

人がどれだけ凄いものなのかを表していると言える。テア艦長もきつと、素晴らしい艦長であるに違いないだろうな。

「それで、君にはこれを渡すよう、君のお祖母様から預かっている」

「お祖母様から……？」

学長が差し出したのは少し汚れた、白い、白い艦長帽だった。その艦長帽には見覚えがあつた。とても昔に、まだ、幼い頃の……。

「……」

「君が、Uーボートという絶対にありえないだろう船に乗ることとなつたとき、私は……運命を感じたよ」

「……仕組んだわけじゃ、ないのですね」

「ええ、そうだとも。それは君が持つべきものだろうか？ では、健闘を祈る」

学長はそう言つて、その艦長帽を私に渡して去つていった。その背を見送ることもせず、私はただただその帽子を眺めて、立ち尽くしていたのだつた。

第六話：不審船でピンチ！

快晴の中、私達の船は出港した。ピアンカ艦長の指示した航路をとって、U—ボートは今日も征く。しかし、艦橋に描かれたハマギクとローダンセが変わりなく生き生きと輝いているものの、そこから見張員の当直にあたる少女たちはあくびをしながら少し重たい双眼鏡であたりを見回していた。

すると、マルテさんがため息とともに愚痴りだした。

「ハンナこゝかいちよゝ……まだ当直終わらないのおゝ？」

「まだねって……まだ航海一日目でしょ？ 頑張つて！」

「ええゝ？ もゝ疲れたあゝ」

「つて言われてもなあ……」

はあ、とため息をつく私。一応これでも航海科の委員長なのだからしつかりしなくちやいけないのだけれど……如何せん、私自身も暇すぎて疲れたのだ。立場としてはちゃんとしかるべきだし、私はこれで三度目の頑張れを言っている気がする。

「まあ、でも、暇だしなあ……」

「でしょゝ？ ほら、他の二人も海で遊んでるんだからさあゝ、私らも休もゝよゝ、こゝ

かいちよ〜」

「揺らさないで揺らさないで、吐いちゃう吐いちゃう」

私達以外の二人とは、ラーエルさんとマヌエラさんである。私達四人はじゃんけんをし、見張りと漂流物釣りの二組に別れたのだ。これはビアンカ艦長の考えで、どうせ船を見つけないことはあっても、今の海や天候の動きなら、船同士の衝突等はまずないだろうとの判断したのだ。確かにその方がよっぽど有益な気がする。

でも、見張りは辛く、あたりを見回すだけにとどまる。つまり何が言いたいのかと言うと、とてつもなく暇なのだ。

「雲の動きは……いまのところちらほらあるけど、特に怪しいものでもないし……平和ね……」

「違うっしょ〜？ 暇なの〜」

「そうともいう〜」

「まねすんなし〜」

だらけるのは仕方ない。360度見回しても海面と、地平線と、青空と雲しかないのだから。何度目かのため息とともに、私は再び双眼鏡を覗いた。本日晴れども、なんだっけ？ レオニーさんのヤーパンの名言が脳裏をよぎった。

「ま、何も起きないのがいっしょ」

「そうだけどね」

そして、私達は交代で見張りをを行い、サボリや昼寝があつたこと以外は何も問題はなかつたのだつた。それについては私が注意して終わつたけれど、今後のことを考えるとこういうことは増えていきそうだなと不安に思う私であつた。

ただ、その晩の食事は豪華ではあつた。初航海の初日もそうだけれど、新鮮な食べ物、は腐りやすいため航海開始日から消費されていくのだ。そのためか、初日から食品がもつ数日間は豪華なものになる。

「本日の料理は何かな？」

エルヴィーラ副長が微笑みながら着席する。折りたたみ式の机を囲んで、ピアンカ艦長とレオニーさん、ジークリンデさん、エルヴィーラ副長と私が座つていた。ここはワードルームと言つて、私達艦橋要員に許された個人スペースだつた。食事の際は、レオニーさんのベッドを畳んで、机を出している。

「そろそろ運ばれるだろうね」

「私はザワークラウトがいいな」

「ん、艦長の願いがかなつたね。ザワークラウトとアウフラウフだよ。メインドイツシユのハンバーグは後で持つてくるからとつとと食えよ」

「あ、ローゼマリーさんありがとうございます」

すると、キッチンから顔を出したローゼマリーさんがいくつかの料理をお皿に綺麗に盛って持ってきてくれた。並べられたそれらはUーボートの食事にしては綺麗な飾り付けで、レストランでも出ても不思議ではなかった。

「さすが、ローゼマリーね」

「ありがとう……」

「ジーク、確かザワークラウトは苦手だったんじゃない？」

「ローゼマリーのの前では好き嫌いは極力しないようにしているの……」

うへえと、肩を落とすジークリンデさん。すると、レオニーさんはつつと笑って自身のアウフラウフと交換した。そして困惑するジークリンデさんに彼女は言う。

「僕、ザワークラウト好きなんだよね。というわけでいただくよ」

そう言っただけでそれを食べ始めたのだ。ビアンカ艦長はそれを優しい眼差しで眺めて、ジークリンデさんは目をそらした。レオニーさんのこういうところが、憎めず、私達が三人でやってきた所以であった。

「でも、彼女のアウフラウフを味わえないのは残念だろうか？」

ふふつと微笑んでエルヴィーラ副長はそう聞いた。しかし、レオニーさんはキョトンとして大丈夫ですよと言っただけで続ける。

「これから先も食べてくから」

そういうレオニーさんの笑顔が少し眩しかった。そうだ。これから先も、こうして皆で食べていくんだ。そう考えるとフツと頬が緩む。こういう事も言えるレオニーさんはさすがだと思うわ。見習いたい、そこだけ。

「……君は、眩しいくらい綺麗だ」

「へっ!?!」

「ま、とりあえずはほら……あーん」

「あっ!?! あむっ!?!」

そうやって差し出すエルヴィーラ副長。しかし、彼女の笑みはまた違った輝きをしていた。まるで王子様の微笑みかのような錯覚を覚える。学校の女生徒（100%女生徒だけ）の多くを魅了しただけあるなあ。

そして、そんな奇襲にもちろん備えていなかったレオニーさんは顔を赤くして、驚いた拍子に口を開いていた。すかさずエルヴィーラ副長の一口大のアウフラウフを口へと含んでしまった。そして、そのフォークを抜いて、赤くする頬で咀嚼するレオニーさんを、ものっそい笑顔で眺めるエルヴィーラ副長。ビアンカ艦長含む私達はあんぐりとしてその二人を見るだけだった。

「どう? 美味しいかな?」

「……ふあーい」

ふあいて。ふあいてなんだよ。一応レオニーさんも女性にモテる中性的な髪型の女の子だが……や、女の子だからか、すごく今乙女チックなんですけど。

そして、ハンバークを運んできたローゼマリーさんに手が止まっている。なぶり殺しにするわよと脅迫を受ける私達であった。

それから、当社比的に小さな事件に分類される出来事を起こしながらも、食事を終えた私達は当直のジークリンデさんを除いて折りたたみ式のベッドの上に横になった。艦内は赤灯に切り替え、あたりは少し暗くなる。私はカーテンを動かして、赤灯をも遮断して枕に頭をあずけた。今日は何もなかったとはいえ、ほとんど立ちっぱなしに動きっぱなしだったため、疲労は蓄積していた。

「……ふああ……」

だからか、眠気はすぐに来た。次に起きるときはおそらく交替のときだろうから、今のうちに回復しておきたかった。

ふと、現在艦橋にいる四人に感謝しつつ、彼女らが夜間の任務についていることを気に病んだ。夜間は目視が難しいため、見張員は二人ではなく四人で行うことになっている。それはもしかしたら他の船の航路に重なり、衝突する可能性もあるため、昼間の私たちのように二手に分かれて釣りをしたりはしないのだ。といっても、この広大な海の中で衝突なんて基本的にはありえないのだが。特にあまり揺れもなく、天候も悪く

い今のうちは。

そしてまどろみに陥る寸前、向かい側のベッドから声がかかった。

「ハンナ。ハンナ……」

「んあ……何、レオニーさん」

カーテンを少し開けて、向かいのベッドを見ると、枕に頭を沈めつつ、コチラに顔を向けるレオニーさんがいた。その表情は少し、いつもとは違って真面目そうだった。何かな。もしかしてエルヴィーラ副長絡みだろうか？

「今日の機関室のこと……」

「……其処の担当は私じゃないけど？」

眠たい中起こされたことにムスツとしつつ、そう返す私。そう言われて少し目を泳がせるレオニーさんだけど、未だいつもの笑みが見えないことから、少し真面目に聞く必要があるかもしれないと思った。覚醒しきっていない頭で、副長の話でないことに少しがっかりしつつ話を聞く。

「あー……」

「ま、いいや……何かトラブルでもあったの？」

「いや……うん。やっぱりなんでもないや」

「なによそれ……気になるんだけど……」

「やつぱりいいんだ……ごめんね？　おやすみ、ハニー」
「あ……」

しかし、彼女はそう苦笑して、カーテンを閉じたのだった。なにがあつたのだろうか。私はじつとカーテンをにらみつつ、十数秒前の眠気にあくびし、カーテンと瞳を閉じたのだった。

そして、それから何人かでローテーションをし、見張りをしたり舵を握ったりしながら航海を続けていた。その間にも、歯切れの悪い悩み相談を一度だけレオニーさんから受けた。しかし、同様にはつきり話さないため、私自身もモヤモヤしながら当直に当たる日々となる。

そうした変わりない狭い生活に、皆もまた少しずつ疲れを見せ始めていた。暇は、逆に疲れを蓄積していく天敵となりえるのだ。

だが、航海四日目。今日は天候が少し変わっていた。曇り空に、少量の雨。この先には嵐が存在しており、私はピアンカ艦長に報告していた。ピアンカ艦長と私が話し合い決めた航路としては最短ルートから少し外れて、嵐を避けるように動いていた。

その日は私とエリヴィエラさん、ヴィクトリアさんとナターシャさんの四人で見張りをしていた。雨合羽を制服の上から装備し、双眼鏡を覗いては付着した水滴を拭ってまた覗き直す。この繰り返しだった。

「ううう……ずぶ濡れだよ……」

「なーちゃん、あと数時間だから頑張ろう!」

「うええ、数時間かあ……長いよお」

「この程度で音を上げるなんて、まだまだですわねハンナさん」

エリヴィエラさんは肩をすくめて、頭まで振って嘲笑する。余裕綽々ね、あなた。それに対してヴィクトーリアさんもニヤニヤしながらこう返す。

「エリーだって、こんなの貴族のすることではありませんわ!! って喚いてたじゃん」

「それは、そもそも貴族であるわたくしが、このような船に乗る事自体間違っていると考えてから言わなくなりましたわっ」

「言わないだけで思っではいるんですね」

「当たり前ですわっ!」

「その割には下士官室のベッドで、ソリナと色々共同してアレンジしてるじゃん? 気に入ってそうだったけど?」

「そういえば確かに、そうだね……?」

「そ、そんなことありませんわよ、ナターシャさん?」

「住めば都って言うし、そうなんですかね」

「ちがいますわ! 違いますの、ハンナさん!」

なんとなく、三人でエリヴィエラさんの意外なところをつついて笑い合う。なんだかんだこの船に順応し、それぞれがこの練習艦を好きになりつつあった。といつてもその後はこの艦の愚痴をちまちまと言ひ合うのだが。

例えば、この艦は元々臭い汚い危険の塊であり、男子生徒が乗るような船である。だからか、今は消臭や清潔感のありがたみについて話していた。

「ほんと、いつも消臭剤と取り付け換気扇にお世話になりっぱなしだよー」

「風向きによつては見張りの私達に直に來ますから、気をつけなきゃだよー」

ぐつとガッツポーズで気合を込めるナターシャを見て、ヴィクトーリアはふへつと微笑んだ。

「なーちゃんのがガッツポーズみると可愛さで海を泳ぎたくなるよ」

「死にますわよ」

「嘘えだつて。私泳げないし」

「えへへ……あ、ありがとうございます」

「……」

「エリーだつてまんざらでも無さそうじゃん？」

「ち、違えますわ。可愛いなんて思つて……ないわよ？」

そつぽを向くエリヴィエラさんに三人で笑うと、私は手すりに手をかけて呟いた。

「確かに気をつけなきゃいけないですしね……でも、こればかりは仕方ないです。換気扇がなきゃ生活したくないし」

「うん、すぐくわかる……まあ、制汗スプレーとかも多く持ってきたし、一応万全ではあるんだけどね……」

そう言ってポケットから見せつけるように制汗スプレーをとりだすヴィクトリアさん。流石元運動部出身。そういう所は万全であった。ナターシャさんはあははと笑うと眩くようにこいう。

「とりあえず、アデリナさんには感謝だね」
「そうですわね。わたくしもあの子には感謝しますわ」

そんな軽口を叩きながら双眼鏡を覗く。だんだんと波が大きくなり、艦橋の揺れも次第に大きくなった。雨は強くなる感じはするものの、現在の艦首の方向を羅針盤などに見比べてもコースどおりである。特に問題はないのだが、これは予想より嵐の脚が速いのか。そのためか、少し視界が悪くなってくる。これがもし大嵐の中だったら、視界がゼロになり観測が難しくなるのだが……まあ、そこまでではなくとも、段々悪くなってきたのが現状である。

「そんな感じではなさそうね……どうしようかな」

「ハンナさん、どうしたの……?」

「ナターシャさん、風向きとかから、この嵐どう動くかな」

「んー……一応、三十分前にやったとおりだとおもう、かな……並行している感じ」

「だよね……でも、風も出てきたし波も高いし、これは嵐の範囲が大きくなっているのかな」

「わからない……でもそんな感じはする、かも……ごめんなさい、ハンナさん」

「え？ あ、いや大丈夫だよ、気にしない！ それより観測を続けよう？ 私はちよつと艦長と話をしてくるわ」

「うん……」

「それじゃあ、ヴィクトーリアさん、エリヴィエラさんも一旦ここを任せるわ」

「うーいー！」

「わかりましたわ」

とりあえず、今後の航路にも関わるので、ビアンカ艦長と相談することにした私は発令所へと戻る。ビアンカ艦長は大体の時間を艦橋にいて、同じように観測をするのだが、今は少し休んでいた。と言っても、発令所で待機し、有事に備えてはいたが。

タンタンタンとはしごの音を立てて下ると、海図を前になにか考えているビアンカ艦長に近づいた。

「艦長、嵐についてと、航路の相談が」

「でしようね。結構揺れているわね……?」

「はい。予定より少し遅くなりますが、もう少し大きく回避する航路を取りますか?」
「そのほうが良さそうね、一旦私も外の状況を見に行くわ」

そう言うのと、ビアンカ艦長は外套を脱ぎ去って、雨合羽を着だす。だが、そこであることを見逃すほど私は甘くなかった。

「あ、艦長。もう、すっかりしてください、ネクタイが曲がってますよ?」

「ううん、細かくない? ハンナあ」

「細かくないです。艦長ですから、すっかりしてなくちやいけませんよ」

「もう……わかった、じゃあお願いします」

「はい」

私はにっこりと微笑むとビアンカ艦長のネクタイに手を伸ばす。そしてキュツと締め形を整えた。ビアンカ艦長の服装チェックなども私の仕事なのだ。胸元の襟のだらしなさも、入念に、そう、入念に……。

「さ、行く?」

「は、はい!」

ずっとやっていてはキリがないためか、艦長は苦笑しながら急かした。私はびくつと跳ねるとその後をついていく。はしごを登る際はもちろん、上を見ないようにしつつ上

がつていく。雨がパタパタと頭にもあたってくるのがわかった。

「……これは、酷いかもしれないね」

ビアンカ艦長のつぶやきが、苦々しいものに聞こえたのは気の所為ではなかった。私も上がったあと、その雨量と横薙ぎの風を受け、荒れる波に少しだけ揺れる。そんなに直ぐに天候は変わるものではないから、先ほどと何ら変わりないように感じるが、やっぱり雨量は増えてきているきがした。

「酷いですね……これは。航路の変更をしましょう」

「そうね。エリヴェイエラ、あの嵐、どの方向に進んでる？」

「……風速とか、動きから鑑みて……そうですわね、あまり先ほどと変わりはありませんよ」

「ありがとう。なら、単純に大きくなっているんでしょうね」

「なら回避しましょうか」

「ええ」

サーツと音を立てて降る雨が、雨合羽の上から私達の体を叩いていた。痛いほどではないが、それが浸透し、服も濡れてしまうと最悪である。ため息を付きながら再び発令所へ戻ろうとしたときだった。

ヴェイクトリーアさんが発見した。

「艦長！ 方位〇二〇！ 船を発見しました！ 距離およそ三二〇〇！ 遠距離です

！」

「何……? 艦種は?」

「よ、よくわかりません。ただ、多分だけれど見た感じ普通の民間船とは違う感じがしました」

「どう違うの?」

「あ、ハンナさん、あれです。艦長も」

促されるままに手を指す方向に双眼鏡を向けると、確かに小さな船があった。その上、その船は民間船とは何処か構造が違い、軍用の様な感じであるように見えた。特殊艇? なんでこんなところで?

するとビアンカ艦長は眉をしかめて双眼鏡を再び覗いた。

「……あれは、研究機関の船かしら……? 海流、海底調査とか、そういうやつ」

「あー……確かにそうですね……」

「とりあえず、これは学校へ報告ね。副長、本部に連絡するわ、不審船の発見よ」

そう言うのと、現在地と不審船の位置を告げ、エルヴィーラ副長の復唱を確認して報告をさせた。とりあえず、私はナターシャさんにその船を目で追うようにさせ、ヴィクトリアアさんと私、エリヴィエラさんの三人でその他の船があるか注意深く見ることにした。

ビアンカ艦長も同じように、周囲を見回し、同時に学校側の報告を待っていた。

『艦長。聞こえますか』

「副長、学校側はなんて？」

『とりあえずその場から退避しろ、とのことです』

「でしようね……」

「まあ、そうなりますよね」

荒れる波、嵐が近く、その上視界が悪い。そんな状況下で不審船を追えとか言われた日には学校を訴えてやるところだ。あとの仕事はブルーマーメイドか、もしくは不審船ではなく正規の船で、関係ないのかもしれないけれど……。

「とにかく、正規の船かどうか分からないですし、避けるしかありませんね」

「そうね……西北西に進路変更、面舵にとつて。前方の不審船を回避するわ」

ふうつとため息を付いた。これまで何もなかったからか、緊張感というものがちゃんとおるかどうか私は気になっていたのだ。だって、何もなければ平和ボケして、緊急時に

対応できないかもしれないでしょ？ でも、他の三人の顔や体に少し緊張している感

じが見えた。

「これなら、少しは安心かな……」

ぼそっと私は呟いた。それは不審船がコチラに近づいていないとか、気づいてないからとか、それも含めての安心だった。でも、それは、ヴィクトーリアさんの叫びで急変するのだった。

「艦長!! 方位一九五度!! およそ中距離! なんか見えた!!」

「なんかって、何よ」

その叫びはひどく怯えていた。同様にしてピアンカ艦長も見てみると顔を一変させたのだった。私も双眼鏡を覗いて、方位一九五度、つまり船のほぼ後方をみると……。

「うそでしょ……? マズルフラッシュじゃないの!?!」

「艦砲射撃!?!」

そう。これが学園生活史上最悪で、最凶で、そしてもつとも結束を固めた出来事であったのだった。

第七話：最悪、災厄

「艦長！ 着弾！ およそ80m後方！」

「実弾だなんて……！」

砲弾は高速に水面へ落ちると、水柱を立てて雨とともに水しぶきを巻き散らかす。早鐘を打つがごとく、心臓の音がやけにうるさかった。ビアンカ艦長はと言うと、それを確認するやいなや叫んだ。ありったけの音量で、艦内にも聞こえるような。

「急速潜航お!!」

非常事態時、潜水艦は早急に潜行をする必要があり、直撃弾を食らうとともに潜行も、航行もできなくなる恐れがある。最悪、沈むことになったりして、船員全員が死亡する恐れまであるのだ。まさかそれが今になるとは思っていなかった私は、艦橋要員だったにもかかわらず足がすくんでしまった。怖い。ひたすらに、怖かった。

「ア……ALARRRRRRRRRRM（アラーム）!!!」

だけど、足がすくむ中でも、ハッチの中、発令所に向けてアラームと叫ぶことでその緊急性を伝えることはできたのだった。

その時、ナターシャさんは腰が抜けたのか、その場に転倒してしまった。彼女の視線

の先にはなおも波に揺れ、しかし砲口をコチラにむけんとする戦闘艦がいた。一瞬見た感じでは、あれは、旧式の駆逐艦だ……！

「ナターシャー！」

「……！」

エリヴィエラさんが駆け寄ると、ナターシャさんは必死にエリヴィエラさんに掴まって立ち上がるうとした。同じく、エリヴィエラさんもそれを手伝ってハッチへと急いで運ぶ。

「敵弾、未だ装填中！ ハンナも、速く中へ！」

「わかったわ！ 貴女も速くね！」

エリヴィエラさん、ナターシャさんが勢いよく降りていくのを見てから私も降りた。ヴィクトーリアさんは敵艦の正確な位置を目視かつ短時間で計測すると、同じようにハッチの中へと体を入れた。そして、ハッチをしめ、バルブを回して閉鎖すると同じように滑って降りてきたのだった。

発令所に降り立った私はその光景を忘れることはないだろう。狭いUーボートの廊下を滑るように駆けていく同期たちは、脇目も振らず艦首へと向かっていた。ラジオルームでは学校側に連絡をとり、おそらくすぐに聴音へと戻るミヒャエラさんも叫んでいた。そしてなおもけたたましく鳴り止まない、目覚まし時計のような甲高い音が艦内

に響き渡る。もはや、そこはいつものゆるりとした空間がなかった。

「敵艦より砲撃！ 交戦中！ 応援をはよ！」

「前へ走って！ 速く！」

「ALARRRRRRRRRM！」

「走れ走れ走れ！」

「10m！」

しかしその時、急激な揺れと共に電灯が消えた。悲鳴と轟音とともに炸裂するようなガラスの割れる音は、さらに全員の恐怖を煽ったのだった。生きている電球が少ししてパツと点くと、計器類のガラスも割れていることに気づいた。それを見てビアンカ艦長が叫ぶ。

「一発食らったか！ 面舵一杯！」

しかし、更に被害はひどく、パンつと鉄が破損する音が聞こえると共に、放水音があたりから耳に入る。それは、何よりも怖いものだった。この場は混乱に陥り、あちこちから報告と悲鳴が飛び始めた。

「きやあ!! 浸水発生！」

「ダメコン急げ！ 狼狽えるな！」

「20m！」

「何なんですの!?!」

「エーリカが負傷!」

「痛い! 踏まないで!」

「バルブを締めて! はやく!」

「何よ、何なのよ一体!!」

悲鳴も少し聞こえる中で、殆どの乗員が前方へと集まった。これによつて艦首が重くなり、急速な潜行を可能としているのだ。私は急いでTDC（魚雷管制装置）の隣の机に航海図を開いて現在地を確認し、敵のおおよその位置を書き記した。その手の震えと、冷や汗が私の恐怖心を表していた。

すると、ヴィクトーリアさんも私のもとに駆け寄ってきた。

「航海長」

「ヴィクトーリアさん、敵の位置を!」

「お、おおよそこの位置です」

指し示す場所を定規で測り、コンパスを用いて一定の行動範囲を敷き、様々な方向へと線を引いた後、敵艦の進路方向などから自艦が追い詰められるかどうかを調べたりする。するのだが……

「近い……! これじゃあ!」

「機関全速！ 皆静かに！」

ビアンカ艦長のその声が響くと皆がしんと静まり返る。一度冷静さを少し取り戻して意思疎通をしあい、ビアンカ艦長へと被害報告を行い、他全員へと通達を回す。このときの皆は、ある程度の緊急事態に対応できるように訓練をしてはいたのだが、やはり実戦経験のない私達は襲い来る恐怖に迅速な対応ができないでいた。

ふと、TDCに背をもたれさせて天井を仰ぐジークリンデさんが目に入った。彼女は普段から冷静で、でも頼りになる子なのだが、このときだけは全く違っていた。顔面は蒼白で、歯がガチガチと鳴っているその姿は、いつもと違いすぎて怖さを助長した。

バツとあたりを見回すと、エルヴィーラ副長はEOT（エンジンオーダーテレグラフ）の近くで配管に手を伸ばし、揺れに耐えるようにしていた。その顔も不安さが抜けきつておらず、天井を睨みながら怯えていた。

レオニーさんは操舵席に付くマヌエラさんとソリナさんの二人のそばに居た。計器類をあっちこっち見て、深度の調整と船の操舵を逐一調節し、発令所内のバルブも近場から見ていつていた。

ビアンカ艦長は艦首から持ち場へと戻ろうとする何人かからの報告を受け、指示を出していた。

「505」

「工具を持って速やかに修復箇所にあたつて。それから貴女は」

「高速推進音、まっすぐこちらに向かつてきてるお……!」

「ここここは大丈夫つと、深度そのまま、これからが大事だから、頑張ろう」

「わかっているさ。だが、心持ちはそれほど穏やかじゃあないね」

「が、がんばります」

「……ハンナ、これからどうなるのかしら……」

「……えと、だ——」

弱るジークリンデさんに、大丈夫。そう声を掛けようとした時だった。何だつていつも、タイミングが悪いのか。恨むのも仕方がないくらい丁度良く、それは来た。

コ————ン……

長く長く、それこそこの海の底まで響くのではないのかと思うような、神経に障る音。トンネルで拍手をしたときのように、大きく、どこまでも響いていく。それが聞こえた瞬間、皆の体が止まった。ゆっくりと見上げる私に続いて、皆が見上げた。わかる。これは駆逐艦から発せられた音だ。

「えつと……何の音……?」

ナターシャさんがそう呟くように見上げたまま言うと、ラーエルさんが同じように見上げたまま返した。なおも響くピンの音は、どこまでも私達を怯えさせた。

「ASD I C (アスディック) ですよ……!」 反射音で私達の場所を探ってる……!」

ゴクリとつばを飲む。後ろではビアンカ艦長が冷静に舵中央と命令を下していた。しかし、それどころではない……アスディックを使って私達の位置を調べて、いったい何をするのか。教本において対潜方法を学んだ私達には、ある一つの名詞が浮かんだ。

「爆雷……!」

「やだ……やだよお……」

「大丈夫だ。掴まってくれ。……ラーエル、すまないが操舵を代わってくれ」

「まかせてほしいであります」

ナターシャさんがへたりとその場に崩れ落ちてしまった。ソリナさんがそれに駆け寄り、操舵席には変わりにラーエルさんがついた。だが、続くコ——ンという音にビクツと身を縮めさせながら、彼女たちはやるべきことを続ける。

発令所にずぶ濡れで出てきたマルテさんがまず、1つ目の吉報を持ってきた。

「ディーゼルモータールーム浸水、止まりました」

「よくやった。でもまだ安心はできないな」

エルヴィーラ副長がそう褒めて、マルテさんをまたエンジンルームに配置させる。現在、出力はエレクトリックモータールームが担っており、潜行時はディーゼルエンジンが使えないのだ。だから、エレクトリックモータールームにビアンカ艦長は機関科の子

達を数人配置させ、細かい出力を任せていた。

そして、余った数人でダメコンチームを急ぎ編成し、修理にあてていた。

「くっそお、頭打った……！絶てえ許さねえ」

「で、何がいるのかしら？」

「レンチ」

「これで良い？」

「D a n k e（ありがとう）」

すぐ近くでは頭を擦りながら修理にあたるナタリアさんとメルツエーデスさんがいて、程よいコンビネーションで早急な修理を可能にしていた。流石、機関科の子。機械類に強い。

私は現在地を自艦のスピードから計測し、地図に記していた。敵艦の位置については不明だが、聴音・水測のミヒヤエラさんが時折ビアンカ艦長に報告するので、それを聞いてある程度記していた。現在は……後方……。

すると、エルヴィーラ副長がビアンカ艦長に言い出す。

「艦長、スクリー音が大きいです。静音潜行をすべきでは？」

「だめよ。今はとにかく速く深く潜るの。補講が短かったから仕方ないけれど、変温層まで潜ることで見つかる可能性を低くできるわ。それしかないの」

そういうビアンカ艦長の表情にも焦りが少し見えた。基本的に現在の練習艦であるUーボートとかだと、そうやってとにかく潜って隠れる他にない。外装をステルス性の高いものに変えたりするのも有効だけれど、最新鋭の戦闘艦とかだとバレるだろう。まあ、今回の相手は旧式の駆逐艦。だけれど外装は変えてない……。

「ヴィクトリアアさん、艦種はどうだった？」

「駆逐艦です。おそらくですが、旧式です」

「やっぱり？ ……あの装填の遅さはきつとそうね」

「次弾発射までかかってましたし……至近弾でしたけど」

「……あつ」

と、そこで私は更にまずいことに気づいてしまった。現在この艦は敵艦の砲撃を受け、早急に潜行をしている。本来の進路を変更して、だ。そのため、進行方向が変更され艦首は嵐へと向かっていた。

「艦長……！」

「何？」

「このまま進むと、嵐に突っ込むことになります。最悪、現在の位置を見失いかねませんよ……！」

嵐の規模や日数などにもよるが、遭難する可能性はないとはいえない。今の緊急事態

を乗り越えるのも大切だが、その後も大切であり、今後の予定や方針を確認しておきたかった。

ビアンカ艦長はと言うと、苦々しそうな表情を浮かべながら返答をしてくれた。

「今はしかたないわ。私達はまだまだ新人、それも学生よ？ 相手はどうだかわからなけれど、対等に渡り合えるとは思えない。だから、嵐の中へ隠れる」

「嵐の中へ……？」

「聴音は普通、この天候だと波も荒れて聞き取りづらいものなの。相手が熟練ならそれでも正確に見つけるだろうけれど、普通は見つけにくいものなのよ」

「だから、より波の荒れる嵐へ向かって、やり過ぎすということ。だろう？」

エルヴィーラ副長も混ざってビアンカ艦長の説明を聞いていた。確かに、それなら嵐の中で隠れられる……でも、それは同時に今後の予定を難しくするものとしてしまうのだ。

「そうよ。確かに嵐の大きさは見た感じ大きいから嫌だけれど、突っ込む他ないわ」

「……っ!? 艦長！」

いつも薄い目のエルヴィーラ副長が大きく目を見開いて気づいた。指は天井を指しており、嫌な予感しかしない。……そういえば、いつの間にか、アスディックの音がやんで……？

するとビアンカ艦長もはつとして叫んだ。音が、しないのだ。

「!! 現在の深度は!?!」

「は、ひゃ、140m!」

「もつと潜つて、180mよ!」

「安全保障ラインを突破しますよ……!」

「死ぬよりマシよ。それに、この子の最大潜航深度は230mよ」

「今爆雷受けてますし、死んじやうかも……! くつ、艦首最大まで下げ、艦尾最大まで上げ」

たじたじになりながらレオニーさんが報告し、言い合う二人。レオニーさんは機関長としてこの艦の耐久性は知っているつもりだからか、ビアンカ艦長に反発する。ただ、ビアンカ艦長の決断と勇氣は何よりも強く硬いものだった。

だが、今度は聴音室からビアンカ艦長へと声が響く。

「艦長! 着水音! 爆雷来るおっ!」

「爆雷防御お!! 何かに掴まって!!」

続けてビアンカ艦長も叫んで命令を下した。それに従つて全員がバツと配管や机、ベッドなど、近くの物に掴まってギョツと小さくなっていた。再び誰一人言葉を発さない、静寂が艦内を襲う。何一つ音のない空間だが、着実に爆雷は降りてきていた。

ミヒヤエラさんは装着していたヘッドホンを首にかけ、耐えるように態勢を変えてプルプルと震える。私は、隣のジークリンデさんも心配になり、ちらりと横目で見てみる。彼女は祈りを捧げていた。震える声で救済を望み、震える両手をギュツと握りしめ、目もキュツと閉じて。

静かになると、否応無く耳に入る艦の軋む音が、神経を削っていく。このとき艦首方向に居たラツヘルは、それを詳細に書き記していた。周りにいる皆が怖がっており、不安そうにしている子が沢山、と。軋む音は水圧か爆圧で、いつか船体を破壊されるかもしれない恐怖を助長し、そこにいる全員の正常な判断力をゆっくりと奪っていく。

しかし、その静けさは小さな揺れと炸裂音で消されていった。遠くで爆発音がしたのだ。それは始まりであり、まるで雷が落ちたようだった。

「……来てるな……」

「……爆雷の爆発、数えて、ハンナ」

「は、はい」

言われるままに、上に備え付けてある黒板にタリーを記していく。だが、その爆音はまだ少なかった。そして、5つ目が爆発すると、艦は少し大きく揺れた。小さい悲鳴が艦首や艦尾から聞こえてくる。

「……近いわね」

「……くっ、深度を読まれてる……?」

そして、六発目。その爆発が起きた瞬間、艦内は大きな揺れに襲われた。

「きやああああああああああああああああ!!」

「ぐあああああああつ!」

同時に耳を劈くいくつかのひしやげる音と、破裂音、そして勢いよく噴出する水の音が何処からともなく発生した。照明が再び消えかかり、何とか保っているもののいつ落ちても仕方ないものだった。

「浸水発生! 発令室、いくつかのバルブが破損! 誰かレンチ持ってきて!」

「角材通ります! 道を開けて!」

「こちらラジオルーム! 多分通信機が、破損!」

「修理は!」

「調理場もやられたわくそつたれ! よくも食器をやりやがったわね!! ぶつ殺してやる!」

「ローゼマリー?! いいから手伝って!」

どうやら発令所の位置、艦の隣で爆発したようで、発令所を中心にいくつかの部屋が被害を被っていた。その場にいる全員が修理を行う最中、ピアンカ艦長は続けてこう言った。

「応援は呼んだはずだから、とにかく潜ること、そして嵐へ逃げること！ 取舵！ 全力でぶん回して！」

「マルゴット！」

「やつてますよ！ 一杯です！」

エレクトリックモータールームから発令所まで修理に来たマルゴットさんの名前をレオニーさんが叫んだ。修理にあたりながらそう返すマルゴットさんの表情にも、焦りが見える。

「マーシー！ こっちは修理終わったぜ、そっちは!?」

「終わったわよ。浸水も停止、水の排出もしないとね。それじゃあ艦長、機関室に戻りませう」

「Danke（ありがとう）。疲れるし、しんどいだらうけれどお願いね」

ナタリアさんとメルツエーデスさんは発令所の修理を終え、艦尾の方へとくぐっていった。他にも爆雷が炸裂し、爆圧による攻撃はなおもつづいている。いくつか慌ただしい声の中、ビアンカ艦長はレオニーさんの数える深度に対して注意を向けていた。

「深度、180m」

「……よし、静音潜行！」

「静音潜行！ 皆静かにするんだ！」

「前進微速、回転数はできる限り10でっ」

ビアンカ艦長は静音潜行をここで発令し、エルヴィーラ副長が復唱すると皆に言い聞かせた。静音潜行とは、その名の通り静かに潜航することを指し、声を押し殺し、スクリー音を小さくするために出力も極力まで抑えるのだ。

今度もまた静になる艦内で、皆は静かに、しかし迅速に動いていた。艦首にいる十数人は修理に必要な道具と材料を探し、エレクトリックモータールームに居る数人はエンジンの出力に尽力していて、ここ発令所ではビアンカ艦長の指示の下、操舵を行っていた。

私は正確な位置を見失わぬよう、時間、出力、速度、現在の針路などから求めている。「……………どう、なるかしら」

隣のジークリンデさんはポツリとそう呟いた。不安は隠しきれておらず、声の震えは止みそうになかった。私はそれに何かを言おうとして、そしてやめる。大丈夫とか、私と言って……。

「大丈夫よ。相手は潜ることはできない。そして海上は嵐に見舞われるだろうし、そう簡単に私達を追い続けるのはできないわ」

しかし、ビアンカ艦長はそう断言してニツと微笑んでみせる。その不敵の笑みは、根拠も合わせてジークリンデさんを……いや、その場に居た皆を元気づけた。私は、だか

ら、ビアンカ艦長についていくと決めたんだけだ。私もそう、フツと微笑んで見る。すると、少しだけ心に巢食う不安が和らいだような気がした。

「さあ……来なさい」

「いや、呼ばないで……」

元気付いたのか、ビアンカ艦長の呼び声に対してそう突っ込むジークリンデさん。いつもの調子が出てきたみたいで、クスツと笑った。

だが、再び訪れたアスディックの音が、その雰囲気を作り裂いた。バツと全員が上を睨むと全員の動きが止まる。そりゃそうなるでしょ、動いた音が敵になるのだから。

「来たな……」

「ぐぐぐ……これほど怖いとは、思わなかったでありますう」

「もう、なんなのよ……！ しつこいわっ」

エルヴィーラ副長の声に反応してか、操舵席につく二人も弱音をあげていた。そして、その音はどんどん頻繁になってくると、パタリと止んだ。すると、ビアンカ艦長はラジオルームを覗いて、ミヒャエラさんの声を聞いていた。

「……どうかしら」

「……着水音つす……！ 爆雷、くるお……！」

「敵船の数は」

「スクリュー音一つと、微弱すぎるスクリュー音しか聞こえないので、おそらく戦闘にあたってるのは一隻だけつすね」

そう言つてヘッドホンを外すミヒヤエラさん。ピアンカ艦長はわかつたと一言告げると、コチラを向いてじつと上を見つめていた。私は続けて爆雷の数を数える。ただ、不安なのは先程書いていた数は多分少し少ないはず。だって、あんなだけ揺れたり被害が出たら、数える暇なんてないでしょう？ 一応いくつか聞き取れた分だけ書いたけれど……。

すると、先ほどと同じように遠くで爆発音がした。しかし、その音が先ほどとは違つて結構遠い。これは……

「……深度が合つてないね」

「私の読みが当たつたのかな？」

「艦長、やりましたね……！」

爆雷の数を数えていく私。その手が止まると、二回目の爆雷は避けられたことに気づけた。爆発の音がもうしないのだ。

「……だけど、まだよ」

「え？」

そう言つとピアンカ艦長は発令所の皆に顔を向けてこう言つた。

「もしかしたらまだ攻撃をしてくるかもしれない。ピンを打ってくるかもしれない……浮上するのを、待ち伏せさせているかもしれない」

まだ完全に見失ったと言える状態ではないとビアンカ艦長は言って、梯子にもたれかかり、眼前を睨む。確かに、まだ一度攻撃を避けられた程度だ。ビアンカ艦長は安心して良いわけではなく、気を引き締めろと、そういつているのだ。私は口をきゅつとつぐむとコクリとそれに頷いた。

「だから、今は耐えるときよ……皆、もうひと踏ん張りお願い。絶対に私が死なせないから……力を貸して」

そういうビアンカ艦長の目は、とても輝いていた。いつも服装を乱して怒られるような、そんな人ではない。ちゃんと、私達を引っ張ってくれる……リーダーとしての力強さがそこにはあった。

それから数時間後。

あれからも何度もアスディックと爆雷の音を聞くこととなったが、どれも私達から遠く、一度も喰らうことはなかった。ビアンカ艦長は全力でそれらに対応し、見事この危機を乗り越えたのだ。

現在の深度は200mであり、軋む音はとてもひどく聞こえてくる。だけれど、その

おかげか全く敵が爆雷を落とさなくなったのだった。これは単純に深く潜ることで見失わせられたのと、おそらく嵐の中へ突入したのだろうと考えられる。私は敵から逃げ切れた安心感をいただき、しかし、今後の航路が設定したものに戻れるのかという不安もまた胸中に抱いていた。

現在は皆も安心したように動いており、艦首に居た皆は各自が休憩所にて待機をしていた。まあ、ゲルトルートさんはこんな時でも賭け事をしていて怒られていたけれど……。

艦内の酸素濃度と二酸化炭素濃度の値は通常時と見比べてみると、減ったり増えたりしており、その差は息苦しさをしっかりと自覚することができるところだった。休んではいるとはいえ、速く浮上して空気が欲しいとうんざりしている雰囲気、ひしひしと伝わってくる。

私はと言うと、発令所と艦首にある休憩所と艦尾の方にもある休憩所を移動している、全員の安否や様子を確認していた。だから、その、凄くいつ浮上するのかと迫られるのだけれど……私は答えられないからね？

「艦長、いつ浮上するのでありますか？」

はあ、とため息を漏らしながら発令所に戻ると、ラーエルさんが操舵席から立ち上がり、ピアンカ艦長に質問をしていた。其処におでこに絆創膏をつけたエーリカさんが座

ろうとしていて、ピアンカ艦長に目を向けている。あ、交代か。ラーエルさんは帰るついでに、浮上する時を知りたいのだろう。

「んー……もう、良い頃合いかしらね……ミヒヤエラ」

「んあ？ んー、全くスクリュー音がしないおつ。こりや勝つたでござるな風呂はいろつ」

「お風呂に入られちゃ困るんだけど……て、お風呂はないです」

「がーんだな、出鼻をくじかれたお……」

「……聞かせて」

ヘッドホンを付けながらミヒヤエラさんはピアンカ艦長にそう返した。よくわからないけれど、とりあえずミヒヤエラさんがいつもの調子でいるから、つい突っ込んでしまったのだけれど……なんでお風呂？

すると、無言のままピアンカ艦長は聴音室へと向かい、ヘッドホンをミヒヤエラさんから受け取った。丸いハンドルを回してピアンカ艦長もじつと耳を澄ませている。中腰で、背中しか見えなかったけれど……ピアンカ艦長って良いお尻しているのね……っは、私は、何をっ!?

ぶんぶんと頭を振って、自身の思考を回復させると、ピアンカ艦長のその背に声をかけた。

「どうですか？」

「……」

少しの静寂が訪れる。皆が黙ってビアンカ艦長の背を見つめていて、どうするのかに注目していた。そして、ビアンカ艦長がヘッドホンをミヒヤエラさんに返すと、くるりとコチラを向いて微笑んだ。

そして、その言葉を聞いて私達は大きな安堵のため息や小さな喜び、やったあとという叫びを各々が発する。

「諸君、浮上よ。準備なさい」

そう、これで約7時間にも及ぶ実戦が終わりを告げたのだった。

第八話：嵐の中で

嵐の中で、私達は大きな体験をする。仲間というものがどれだけ大切なのか、今一度自身に問う。手を差し伸べるだけじゃだめだ。突き放すのもあるいは手かもしれない。最初の砲撃事件以前から以下に記したが、一番知ってもらいたいのは嵐の中での事件だ。この日誌は、私達がUーボートに乗って、何が起きたのか。その事実をまとめたものである。

ハッチのバルブを回すと、勢いよくそれが開いて冷たい雨と新鮮な空気が艦内に入ってきた。バルブを回したビアンカ艦長がまさききに外へと出てみるのだが、一向に声がない。私達はその様子を下から眺めていたが、海中にいたときより揺れが激しくなっており、足場が安定しなかった。すこし酔ってきた気もする……。

「エーリカさん、クラウディアさん、エリヴィエラさんの三名はハンナさんと共にブリッジへ向かって欲しい」

「はい」

「ソリナさんは砲雷科と航海科の皆にいつでも指示を出せるよう、待機してほしい。ビ

アンカ艦長はそう言っていた」

エルヴィーラ副長は発令所に集まってきた副委員長たちにそう伝え、私の目を見た。私はその瞳を見て、コクリと頷いて、ピアンカ艦長と同じようにはしごを登る。すると、冷たい雫が私の顔に落ちてくる。それは顔の曲線を伝って、あるいは雨合羽によつて弾かれて落ちていく。冷たく、しかし塩辛い……雨だ。それも、勢いが違う……！

私はハッチからブリッジへと出ると、大きな横風に見舞われ、わつと声を上げた。すると、私の前に手を差し出す人が居た。ピアンカ艦長である。

「どうしたんですか？」

「……状況は、まだまだ悪いわね」

グイツと引つ張ってもらい、ブリッジに登った私はその言葉の意味を理解した。現在のはものすごい嵐の真つ只中であり、波は高く、雨量は多く、暴風雨かつ非常に息苦しきを感じるような大嵐だった。

波を登るように艦首が天を仰ぐと、一気に下降し、叩きつけられるような気分を無理やり体験させられる。まるでジェットコースターのようだった。それも、豪雨と、いつか転覆してしまうんじゃないかと思えるような恐怖を伴った。

「くっ、命綱はある。しかし、この雨量と揺れだといつ吹き飛ばされてもおかしくない……大丈夫か……!?!」

「気合があれば！　なんとでも！」

「いかないわよ！　あなたもちやんとつけなさい！」

「エリヴィエラさん！　つけてます！」

「気合は何処行つたのよ!？」

しかし、ここの皆は根っこが何処かおかしいのか、なんとなく余裕そうである。雨の中、軽口を大きな声で叩いて、わーわーと騒いでいた。どういふことなの……。

ビアンカ艦長もちよつとは危機感を持ってと注意してください！と、キツと睨むと大笑いをしていた。いやいやいや、何笑つてるの!？」

「ふふふ、はは、あはははっ！」

「艦長!？　何笑つてるんですか！　わわ、わわあっ」

「いや、うん、きやあつ……わかっているけれど、少しおかしくて！」

「いや、どういふことよ！　この元氣馬鹿と一緒にしないでくださる!？」

「元氣馬鹿は言いすぎだろう？　ちゃんと名前で読んであげなよ」

「声が小さいのよ！　雨が強くて聞こえないですわ！」

「君の声はキンキン響くようで、よく聞こえるね」

「なんですつてえ!？」

「きこえてるじゃないか!!」

「気合です!!」

「そうですね! 少しでもどこか凄くおかしい状況です艦長!!」

「あはははははあはははははは!!」

「だから!!! 笑ってる場合ですか!!!」

なんて、こんな土砂降りの雨の中私達は少し言い合い?をして、少し落ち着かせた。すると、伝声管からエルヴィーラ副長の声が聞こえてきたのか、ピアンカ艦長はそちらに取り入った。

「で! どうなるんですの!?!」

「気合です!!」

「気合はもう良いんだ! 十分ある!」

「それよりも! これじゃあ艦橋の装甲から顔を出しても全く見えないですよ! 艦長! どうします!?!」

ここにいる全員は艦橋の装甲から顔をだすことができずに居た。其処を離れると暴風雨が容赦なく体中を叩くのと、揺れや波に体のバランスを取られて艦橋からふつとばされかねないのだ。ピアンカ艦長も伝声管に必死にくつついて、話をしていた。少しして、ピアンカ艦長はコチラに向くと、ムスツとした顔で私達に叫んだ。

「潜航!! このままも難しいわ! 船内の換気と空気の取り込みを早急に行つて!!!」

「わかりました！ 三人共！ 戻りますよ!!」

「気合だああああああ!!」

「置いていきますわよ!!!」

「やれやれ……」

そして、なんとかしてエーリカさんを連れて発令所に戻る。私は航海図を見て現在地について考えることとした。少し時間が経ち、段々揺れが収まってきていた頃、私はグツと唇を噛み締めた。鉛筆を置いて、少し悩む。わからない……。わからないの……。現在の位置が……。おおよその場所はわかるのだけれど……。

「エーリカさん、羅針盤見てきて。今どっちの方角に向いてる?」

「え? んえ……北西です! ……でも、艦橋に居たとき、艦橋の羅針盤の破損を確認しています!」

「報告ありがとう……だめだわ。艦長、相談があります」

「何かしら」

ビアンカ艦長の方へ向いてそう切り出したものの、報告することができなかった。こういう悪いニュースは言い出しづらいもので……。それを察してか、ビアンカ艦長は苦笑してこちらに来てくれる。

「……言い出しにくいハント?」

「……はい。ラジオルームでのいくつかの機器の故障以降、私は個人的に今ある情報から現在位置を特定していましたが……おおよその位置しかわかりません」

「……遭難、ね」

「今はまだ戦闘前とあまり変わらない位置にあると考えられるのでおおよそは特定できます。それに嵐を超えれば天測で方位と大体の位置は得られます。ただ……この嵐の中ではほとんどわからないと言えるでしょう」

私の言葉に、目をつむると大きくため息を付いた。ビアンカ艦長の表情は曇り、近くにあった椅子にドカツと座ると俯いた。ビアンカ艦長……。

「ごめんなさい……」

「ハンナが謝ることではないわ。私が、間違えたのよ」

そう言うと、艦長帽をとって頭をかいた。そしてその艦長帽をじつと見つめる。しばらくして、明かりが赤色点灯となる頃に、ビアンカ艦長は立ち上がると私にこういった。「この嵐の中だと難しいとは思うわ。だけど、ある程度でいいから現在の位置を見出して、航路をとってほしいわ」

「わ、わかりました。どの様な航路にしましょうか」

「……学園へ帰る航路よ」

そう言うとビアンカ艦長はキツと天井を睨みつけた。

これが、私達の航海四日目、そして遭難一日目の始まりだったのだ。

☆☆☆

五日目。遭難二日目。

なおも嵐はつづいており、状況は悪化の一途をたどる。波は高いために海上航行は難しいし、海中に潜るのだから空気は悪くなる一方だ。換気を行うのだから海上に出てからじゃなきゃできないため、たまに行く程度だ。そのためか、アデリナが喚いて買い置き消臭剤を設置しており、清潔感を何とか保とうと努力を試みている感じだ。

一方でバッテリーの充電を行う必要があるし、ずっと潜っていることはできない。海上航行に移ると揺れは激しくなり、気分が悪くなるものも多少居て、皆辛そうであった。特に辛そうなのが見張の当直だった。かくいう私、ラッヘルも見張りに当たることがあったのだがその体験も記そうと思う。

まず、艦橋に立つというのが難しいものだった。波が全身を襲い、足元を掬われれば大怪我待ったなしだし、雨が強く手前は向けられない。視界はほぼゼロ、居る意味があるのかを疑いたくなるものだった。

ただ、海上に何があるかわからない現状、少しでも見えるとそれが重要になってくる

ため、立たない訳にはいかない。だからか、今日も嫌そうな顔をして担当者方はブリッジで格闘をしていた。お疲れ様である。

さて、昨日の激しい戦闘の後、ビアンカ艦長から無事遭難を迎えたことを伝えられてからというもの、空気だけでなく雰囲気も変わってしまった。狭いこの潜水艦の中だと、通るのに一苦労するし、寢床だつて足りない。今まで耐えてきたのだけれど、昨日の出来事からか神経が過敏になつちやつて、皆が少しピリピリしだしていた。

正直、私はこの空気が嫌いだ。きつと良くないことが起こる。空気が重くなるだけならまだしも、ピリピリするときはいつだつて面倒な事件が起きるのだ。

そこまで書いて、私は一旦手を止めた。ふと、昔を思い出して頭を振ると、その手記をポケットにしまいこんで立ち上がった。揺れはなおも大きく、あまり良い状況とは言えないでいた。実際、ちよつとよろけちやつたし。

壁に手をつけて艦首の乗組員の寢床である休憩所から発令所へと向かう。途中、委員長、副委員長に割り当てられた寢床にある、自分のベッドに置いていたカメラを首にかける。これがないと少し落ち着かないのだ。そしてそのまま向かおうとする。

「わっ」

「おっと、いめんなさい」

どんと前を向いた拍子に誰かとぶつかってしまった。反射で謝って見ると、いかにも

不機嫌そうな顔でマリアンネ・エルレンマイアーがそこに居た。いつもどおりの白衣は来ておらず、ちゃんとした制服姿だ。あの白衣は洗っていない手で触ろうとしたらもれなくマリアンネからの罵倒が飛んでくるくらい肌身離さず、清潔に保っているというのに。

珍しいこともあるなあと思うのもつかの間、あつちやあマリアンネかあと神様を少し呪った。

「ふうー、君の目はなんだい、節穴なのか？ 人間の目が何故前に2つついているのかしつかり考えたことはあるのか？ それに少しは演技を身に着けたほうが良い、私とぶつかったことを呪うように、嫌な顔がしつかりと貼り付けられていたぞ？ マスコミめが」

「……ちよつとぶつかっただけじゃん。何もそこまで言うことはないんじゃない？ だから嫌な顔だつてされるんでしょ」

「へえ？ では嫌な顔をしていたことははつきりと認めるわけだ。実に不愉快極まりない」

このとおりだ。マリアンネは衛生に関して特に厳しく、私にぶつかったところを払っていた。こういった小さな苛立ちの積み重ねが、後に大変なことになると知っている私。だから、今は冷静になろうと、自分に言い聞かせてクールダウンした。

しかし、更に珍しいことに、彼女はこう言い始めた。

「……はあ、すまない。君の報道姿勢に対しては、私は被害を被つては居ないからと言っても、非難されるべきではあるが、少なくとも今この場ではお互いに不注意でお互いが悪かったと言える。……私もストレスがたまっているようだ」

謝るのか謝らないのかよくわからない。私の姿勢というのはたぶん、写真を撮つてそれを秘密裏に売っていることだろう。この女性たちは格好いい子も居るし、案外儲かるのだ。

「……謝るのは、珍しいね。確かに少しピリピリしすぎてた、ごめん」

「珍しいとは何かな？ 私は、私が悪いときに謝らない人、という風評被害甚だしいレツテルをはつつけている女だという認識なのか？ 馬鹿め、私だつて悪いときは謝るとも」

「余計なこと言いすぎ……」

「何だ？ 物事ははつきりと言えと教わつてこなかったか？ 私にもしつかり聞こえるように言いたまえ」

「わかつたわかつた、ごめんつて言つたの」

そう言つて私は切り上げると、後ろからもまだ言葉が聞こえてくる。あれに対抗できるのはエーリカかビアンカ艦長くらいだろう。ザシャもいけるかなと思つたけれど、試

しに当ててみたら思考停止していたし。

とりあえず、夕食前のいい匂いにする厨房を横切つて、艦橋要員の皆様が過ごす上級休憩室を横切る。レオニー機関長が横になっていたが、休憩だろうか？

「艦長？」

「ん……ラツヘルさん」

そこに居たのはジークリンデ水雷長だった。いつものポニーテールを揺らしながら、発令所の皆の様子を見て回っていた。なるほど、機関長の代わりにやっているのですね。

「あれ、艦長さんは？」

「艦橋よ……外を当直と一緒に見てる……」

「わかりました。ありがとうございます」

礼を言うとは私はそのまま艦橋へ行こうかなと悩む。正直、私はビアンカ艦長に用があるわけではなく、単純にいろいろな写真を取らせてもらおうかなと、許可をとりたいかっただけなのだ。だから、あえて私はここでない他の、それこそあまり立ち入らないであろう艦尾魚雷発射管室や、エンジンルームに行ってみることにしようと思った。そういうばなんだかんで写真を撮ってなかったしね。

そういうわけで、私はその場からエンジンルームに向かおうとした。ふと、発令所か

ら出る前にハンナ航海長が机に張り付いて、頭を抱えながら何かをしているのが見える。あれは一体何をしているのだろう。

と言いつつも、だいたい察することはできる。現在の航路をこの嵐の中でどれほど進めているのかを考え直しているのだろう。北か、南かも怪しい状態でよくもまあ、あがける。でも、その努力を私は笑わないし、むしろ尊敬すらしていた。

「ハンナ航海長」

「んえ、な、なに？」

「あまり、煮詰めずに、気を楽にしてくださいね」

「……ありがとう、ラツヘルさん。それでもまあ、やるだけのことはやらないと」

「ほどほど、ですよ」

肩をすくめて苦笑すると、ハンナ航海長も苦笑して返した。さて、さて。そうしてまず目の前に広がるのは過給式9気筒ディーゼル機関、MAN M9V40/46が2つ並んだ、あつつ苦しい世界だった。そう、ディーゼルモータールームである。チャカポコチャカポコとロツカーアームが上下に忙しく動いているさまと、それを制御する彼女らを見ていると私は全く違う世界に来たように感じた。

あたりを見まわすと、今エンジンを担当しているのはマルレーン、ツエツイーリア、マルゴットの三人で、汗で濡れたシャツ一枚という格好でいた。濡れて透けたブラジャー

とかが目に入るのだが、彼女たちはあまり気にしていなかった。もはや慣れたからなのだろうか。

そんな彼女たちは、異常がないか、エンジン出力はこれでいいのか、逐一診ては調節しているのだ。お疲れ様である。

「ひええー！ 疲れたー」

「おぬし、まだ弱音を吐くには早いのじゃ！ こういうときであるがゆえに、我々が頑張らねばならんじゃろ！」

「ツエツイーリアの、おにい〜」

「たわけ！ 我は鬼ではない！ 女神じゃ！」

「やれやれ、余計疲れるというのに……女神様、マルゴット、そつちを見てくれないか？ 音がおかしいような気もするし」

「何じゃとー？」

「な、ほんと？ すぐやる！ ありがとう！」

「……で、ラッヘル。ここに何かな？」

「ああ、いや、なんでもないよ。ただ、写真を撮りたくてさ」

機関室の入り口で立っている私を見て、マルレーンはすぐに気づいた。つていつても、狭い室内なんだから、当たり前前だけれどね。私のその言葉にマルレーンは自慢の力

ウボーイハットをくいっと上げて、「なら構わないよ」と快く承諾してくれた。

ただ、体は今、濡れ透けだから撮らないようにして欲しい、とのことらしい。まあ、守るはずないんだけれどね。売れるし。

エンジンをいくつか適当に撮りつつ、こつそりと彼女たちを撮っておく。バレていないのか、注意が私に飛んでくることはなかった。が、やっぱりここは一番厳しい場所のようだった。

「マルゴット！ そつちの計器を見落としておるぞ！ ちゃんと伝えなければ火が落ちるんじやからな！ たぶん！」

「わかってます！ すいません！ でも憶測は止めてほしいです！ マルレーンはそつちをー！」

「はあー……はいはい。ツエツイーリア？ そんなに大声出さなくても聞こえるよたぶん」

「あつちやあ……ここはいつも戦場だね」

ついつい呟いてはははと苦笑してしまう。怒号飛び交うその場所から退散すると、私はエレクトリックモータールームへと移動した。海上航行中、ここは誰も使わず放置されることが多い。といつても、このエンジンに何もさせていないわけではなく、ディーゼルエンジンで発電し、その電力を充電にも当てているのだ。だから、時たまこ

チラに顔を出す機関士は居て、大事に扱われている。

しかし、その先の艦尾魚雷発射管室と、その一步手前の乗組員休憩室……もとい、機関士ルームとも私達がつけている、機関士たちの寝床がある部屋の扉が閉まっていた。通常は空いているはずなのだが、どうしたのだろう。

私はそつと扉に耳をつけると、その中の会話を聞き出そうとした。

「……………」

「……………」

「……………！」

「……………何の話をしているのかな？」

しかし、エンジン音と時々聞こえるツエツイーリアたちの声がそれを邪魔する。記録係としてこれは気になる内容だ。私はにやりと笑うとはあ、とため息を付いて、扉につけていない片耳の穴を指で塞ぐ。そして、更に集中して聞き耳を立てた。ここが記録係に選ばれた私の腕の見せ所だ。

「……………ねえ、何とか言ったらどうなの？」

「はつきりと言えよ。目障りなんだよ」

「……………わたし、じゃ……………」

「なに、これ」

しかし、その会話に私は眉をひそめるのだった。何か秘密の花園のような、写真ネタになるような内容を期待していたのだが……どうやら、喧嘩のようである。すぐさま止めにかかるのが本来は正しいのかもしれないが、私はそれを続けて聞いていた。性なのか、それとも。

「掃除だつてまともにはできないなんてさ。どんだけとろくさいんだよ」

「……」

「黙ってないで、何とか言ったらどうかしら。見捨てちやうかもしれないわよ?」

「み、見捨てないで……! ごめんなさい、わ、私、もう一回頑張るから……」

「……あ、そう。じゃああと頼むわ」

「よろしくね?」

「……」

「……」

喧嘩では、なかった。ラッヘルは頭を振るとディーゼルモータールームへ逃げようにしてその場を去った。聞いてしまったそれを、胸のうちにあるぐちゃぐちゃの感情を、何処にも吐き出せぬままに。それは、彼女の脳裏をかすめたある記憶からだった……。

いじめ。

ただ、人を笑う、それ。

「……」

行き着いた先は、機関長の寢床であった。すぐそこであったが、そう遠くないここへ行くまでが、一瞬だったように感じる。それは、この気持ち悪い感情が周りのものを見ないようにしていたからなのだろうか。私はドキドキとうごめく心臓に手を触れて、機関長のその背に問た。

「レオニー機関長……話があります」

「……何かな、ハニー？」

「ごろんとコチラを向いて微笑んだあと、私の表情を見た機関長は真剣な表情に切り替えると座るように体制を変えた。私は少し目を背け、ぐつと、機関長を見る。

「……それで、話って？」

「……ナタリアとメルツエーデス、そしてアンネについて」

「……うん。それか……知っているよ」

「なっ……!?!」

機関長は暗い顔でそう答えた。知っていて。知っていて、何もしないのか？

「知っているなら……!」

「本人に聞いたんだ。それがいじめであって、辛いのなら僕が二人にキツク言うって。」

でも、大丈夫ですって言われてさ」

「本人が言ったからって……!」

「わかつてるよ。だから、艦長に相談するつもりだった。その矢先に『これ』だったからさ、今はとにかく、協力しあわなきゃならない。だから、陸地や学校に付くまでは関わり合っても『そうなる』余裕はない、そう思っていたんだけれど……」

「余裕? それは何だっけ言うんですか……! 実際、今、起きていたんですよ!」

キツと機関長を睨むようにしてそういう私。だが、機関長は頭を垂れるとこう呟いた。

「……初めてみたんだ……あんな場面。だから、どう対処していいのかがわからなくてさ……初めは喧嘩だと思っていたし、喧嘩はしないで止めようとしてたけど、雰囲気が違うくて……それでも、いつも僕が居るときはそうならないように対応していたし、話しをつけるよう説得もしてきたつもりだった。だけど……起きているなら、もはや僕だけではだめだ。艦長に相談するよ……」

情けないよね。そう自嘲しながら立ち上がる彼女に、私はその背を見ることしかできなかった。いつもの格好いい彼女が、今日は小さくて。揺れる船によったのか、気持ちが悪い。

その日の夕食は、美味しく食べることができなかった。

六日目、遭難三日目。

「おはよう。自分のベッドで寝るよう心がけるのは船員としての義務じゃないかしら、ねえハンナ？」

「んあ……あ……艦長、おはようございます……？」

目が覚めたそこは、発令所の航海図を広げた机であった。いつの間にか航海図の上で腕を枕に眠ってしまっていたようだ。私ははっとしてピアンカ艦長に向き直る。

「あ、し、失礼しました！……えっと、確かに、ベッドで睡眠を取るべきでした」

「自身の体調管理をしつかりするのも、明日明後日の活動に関わる重要なことでしょうか？ 航海長なんだから、しつかりしなさい」

「すいません……」

本日六日目。昨日と変わらない揺れとピアンカ艦長の説教で目が覚めた私は、反省しながらも航海図を眺めた。結局、ポイントを見失ってからのというもの、皆と力を合わせても現在位置を特定することはできなかった。それどころか、本格的に方位すら破損し、不明となった今、完全なる遭難を迎えたと言ってもよかった。

目覚めの悪い朝を過ごし、お昼前、最後に鉛筆でポイントに印をつけて、鉛筆を投げ出した。コンパスも、定規も、今や何も役に立たない。私は少し苛立っていた。わかつた。もう、どうしようもないところまで来ていることぐらいは……。

発令所の椅子に座ると、レオニーさんがそれに気づいたのか、後ろから声をかけてくれた。

「ハニー、どうしたんだい？ 難しい顔をしてさ」

「……現在地を、完全に見失ったの。早めの遭難申告を艦長にしたけど……どうあれ遭難することになるのね」

「……まあ、仕方ないさ。むしろハンナはよく戦ったよ。殆どの情報が得られない中、必死に秒数と時間と、速度だけでさ」

「……」

慰める言葉が、しかし一々傷口をえぐるようで、私は目を背けてしまう。すると、レオニーさんも私と背中合わせで座った。と言っても、狭いこのスペースでは隣に座ることしかできないから、背中合わせと言っても実際は隣りに座っただけではあるが。

しかし、彼女の背は私と変わりない気がして、それが気になった。気になった……いや、気になったなら、まだ彼女を大切にする余裕があっただろう。このときの私はそれを気にもとめられなかった。疲れてたんだ。きつと……どうしようもなく、理不尽な状況に。

「……それに比べて、僕は情けないや」

「……どうしたの」

でも、その一言はいつものレオニーさんの声色ではなかった。彼女も、なにか問題を抱えていて、それに対する疲労がその言葉には乗っていた。

聞き返す私に、レオニーさんは自嘲気味に話を続けた。

「……いじめが起きてる」

「え……」

「だから、それを解決するために今から艦長に応援を要請するよ。僕だけじゃ、どうしようもなかった」

「そんな……」

私はバツと勢いよく彼女を見た。その横顔に悔しさの残る残念そうな表情が写っていた。私と変わらない表情に、私まで悲しくなってきた。

「……行ってくる。ついでに現在地を完全に見失ったことも報告しておくからさ……ハ
ンナはもう、おやすみ。2時間程度しか寝てないんだらう？」

「……わかった……レオニーさん、あなたも、お疲れ様」

「……ありがとう」

そういう、優しい言葉にも、私はそうとしか答えられなくて……いじめの問題にも、決着をつけようと頑張るレオニーさんとは違って……それがどうしようもなく、苦かった。

それから昼食をすませ、私は当直として見張りに当たった。ブリッジから見える景色は変わらず曇天で、雨が突き刺さるように降り注ぎ、波は荒れている。嵐のさなかというのは、どうにも生きた心地がしなかった。ため息を一つつくど波が全身を襲う。そのしよっぱさにむせながら私は逃げるように発令所へと戻った。

「あ、艦長」

発令所へついて、すぐそこにいたのはビアンカ艦長だった。ちようど艦橋へ上がるのか、合羽を装着している最中であつた。しかし、私が気になつたのはその後ろにいるアンネリースさんだ。

機関室を担当とする彼女が、ビアンカ艦長と同じように雨合羽を着ていることが珍しいのだ。一応、緊急時や当直が不在もしくは病気などのときは変わりに機関科の人たちが変わりに見張員になることはある。だけど、今は人手が足りないわけではなかった。

「……と、アンネリースさん？」

「ん、そうよ。ちよつと一緒に艦橋に上がってほしくて」

「……」

しかし、アンネリースさんの表情は暗い。それを見て私ははつとした。この子が、いじめられていたの？ 確かに、彼女のおどおどとした態度は癩に障ることは、私はなかったけれど、人によってはそうなることもある。そう考えると、ビアンカ艦長が解決

に乗り出したのだろうかことに気づいた。

私はビアンカ艦長に視線を戻すと、小さくうなづく。ビアンカ艦長もそれに瞬いて返事した。

「……そういうわけで、今日の当直の編成を少し変えさせてもらうわ。いいわね？」

「わ、わかりました」

「……」

「……アンネリースさん」

どうか、どうか穏便に解決するよう祈って、私は自分のベッドへと戻ろうとした。このあとの仕事はなく、海図から開放された今はただゆっくりと英気を養うこと。それが仕事であった。

戻る間際、ちらりと横目で見えたレオニーさんは、仕事に打ち込んではいたけれど、その顔はいつもよりは険しかったように見えた。

それから少し、ベッドで横になる。すると、自身の頭の中で浮かんでくるのがアンネリースさんのことだった。あのあとどうなったのだろうか。どういじめられていたのか。誰にそんなことをされたのか。そして、私達の船の中で、そうする人がいる。その事実が、どうしても頭に浮かんで消えない。

そうしていくつか悩んでいると、ふいに私のベッドのカーテンがスライドされる。誰

?という私の問いに答えたのはビアンカ艦長だった。

「ハンナ。作戦があるわ。少しいいかしら」

「は、はい。なんででしょうか」

「機関士を除く全乗組員に、この事実を公表するの。現場を私が抑える。狭い艦内でもまあ、そんなことをしようと思ったものね」

「へ? え、あ、そうですね」

慌てふためく私をよそに、ビアンカ艦長が日常会話のようにそれを話していた。私はその平然っぷりが、気になって間抜けな返事をしてしまう。何故? イジメが起きているんだよ、ビアンカ艦長?

「……どうかしたの?」

「い、いえ、案外平然としていたので……」

私のその言葉にふう、とため息をつくど、ビアンカ艦長は私の頬を両手で挟んだ。こねくり回すように撫で回してくる。むえ? 何? なんえ? そううまく発音できないまま聞く私にビアンカ艦長は答えた。

「……ハンナ。私は怒ってはいるわよ? ただ、アンネリースさん自身も変わる必要があるとは思えない?」

「……」

「自分の意見を主張できないのは、いざというとき何もできなくなっちゃうわ」

すると、その手を離して艦尾の方を見た。アンネリースさんが帰っていった方である。役立たずというわけではないけれど、確かに行動できないと皆に影響を出してしまふことはあるだろう。

「だから、あの子には覚悟を決めてもらったわ」

「か、覚悟？」

さあつと顔を青くする私。覚悟って?? 反撃をするのだろうか。いやまあするのだろうかけれど、反撃は反撃でも、殺傷とか……? いやいや、落ち着いて。そんな事するはず……でも、おとなしい子ほど恐ろしいことをするとかしないとか……いやいやいや。

「だ、だめですよ！ 人殺しとか、そういうのは！」

しかし、慌ててそういう私にキョトンとするピアンカ艦長は次第に笑い始めていた。え、何笑ってるんですか。

「ふ、ふふふ、人殺しとか言っていないわよ。って、そんな物騒なことさせないわよ普通」
「ま、まあ、そうですね……」

「ハンナは早とちりしすぎよ。とりあえず、全員に知らせてほしいの。ここに内容を書いた紙があるから、渡して行ってちょうだい」

ビアンカ艦長の言葉に顔を赤らめつつ、渡されたメモをしつかりと受け取って私はベッドから降りる。そして、ビアンカ艦長の目を見てはつきりと言った。

「わかりました……！」

☆☆☆

ハンナ航海長が全体に知らせてから数十分後。艦橋要員であるレオニー機関長、エルヴィーラ副長、ジークリンデ水雷長、ハンナ航海長、ビアンカ艦長に加えて私、ラツヘルも現場に加えさせてもらった。この胸の支えは、この現場と決着、その後を見てみると解消されないだろう。建前はそれを記録する必要があるのでとしておいて、本心の胸のざわつきを収めるために参加する。

艦尾魚雷発射管室の2つ前。エレクトリックモータールームに集まり、みんなは艦尾乗組員休憩室の扉の前に居た。

すると、レオニー機関長が呟くように言った。

「決着をつける、か……艦長」

「何かしら」

「……ありがとね」

その表情は複雑で、嬉しそうでもあり、険しくもあった。きっと彼女の中には感謝以上に悔しき、自身への嫌悪感が多くあるのだろう。数十日も訓練をとみにしてきたから思うのだけれど、もしかするとそれよりも反省の面が強いのかもかもしれない。彼女は、軽くしているが案外深く受け止めやすいタイプだと、私は日誌を付けてて思っていた。

しかし、ビアンカ艦長はそれに冷たくあしらう。

「まだ終わってないわ。お礼ならその後にしてね」

「はは、そうだね」

そう言いながら、全員が扉に耳を澄ませた。ジークリンデ水雷長は壁に耳ありと言っていたが、一体何だったのだろうか。ともあれ、その会話が私達に伝わっていて、私それをメモに取ったのだった。

聞こえてきたのはやはり、ナタリアとメルツエーデスの二人の声だ。きっと、そこにはアンネリースもいるのだろう。

「はあ。いつまでそうやってるつもりなんだよ」

「……」

「もういいわ。まともな掃除もできやしないなんてね」

「ごめんなさい……でも、それはナタリアちゃんが……」

弱々しく声を上げるアンネリース。でも、それに語気を強めてナタリアが言う。

「俺が何？」

「……」

「はつきり言えよ。クソが」

「……あ……う」

悪態の突き方に棘がある。その場の空気は刺々しいものとなっていた。はああと、わざとらしいため息をつくナタリアが続けた。

「いつもいつもそうだよなあお前。誰かと一緒にやなきや何もできねえ。それどころか一緒になんともできねえんじゃね」

「そうでしょうね。寄生虫のように、ついていくだけ」

「そ、そんな……こと……」

「クラウディアだったつけ。あいつも同じなんだろうな。とろくてさ、お前みたいにだめなやつなんだろうな」

「っ！」

パチン。何か拍手のように、軽い音が響いた。そう、状況が変わった。ナタリアがクラウディアを卑下した瞬間、息を呑む音、乾いたはたく音。

「クラウディアさんを……悪く言わないで……！」

「あなた……！」

「てめっ——」

そこで、ビアンカ艦長が扉を開いた。ガチャリ。なおも簡単そうに開くビアンカ艦長に、私達は驚かされる。どこまでも、彼女は冷静だったのだ。

「だっさ」

「な、なんで艦長が」

「いつからそこに……」

「どうでもいいけど、いじめられてた子にビンタかまされるなんてね。ダサすぎて笑ってしまっわ」

「っ、てめえ」

てめえと言ったときだ。ビアンカ艦長は近場のものを蹴り上げ、ふつとばした。前言撤回。冷静さのかけらもなかった。ビビるのはその場にいる三人だけでなく、後ろに居た私達もであった。

「誰に向かってその態度をとってるの？」

「な……っ！」

「ごめんなさいね。もう全部わかってるの。全員が、ぜえんぶ、ね。よくもまあこんな狭い環境下で、いじめをしていられたものね」

冷たくそういうビアンカ艦長には、どことなく雰囲気があつて、正面に居たらどれほ

ど怖いものだったのだろうか。たじたじになりながら、メルツエーデスとナタリアはそれに反論しようとした。

「……、ちが」

「ちがわない。そうでしょう?」

「お、俺達は、ただ……!」

「言い訳するなって言ってるの。何をしていたのか、もうわかってるの。——二度も説明させるな」

ピシヤリと言い放つそれは、もう二度と反論の余地も与えやしない。そう言っているようで、二人も何も言い出せやしなかった。

「っ……」

「……」

「最低、最悪極まりない行為だわ。愚か過ぎて吐き気がする。……二人はバツとして、艦内の全掃除一週間、担当してもらおうから。今、直ぐに」

「……はこ」

「……わーったよ」

そう言うと、道を開けるピアンカ艦長。その時見えたピアンカ艦長の横顔には怒りがこもっていた。どこまでも底冷えさせるような冷徹な目。その無表情は、感情むき出し

に怒っている表情なんかよりも恐ろしかった。

そして、彼女たちはその休憩室から出てくると、外に居た私達の目線に気づくと、俯いて逃げた。皆の目線が、彼女たちを軽蔑していたのだ。ざまあみろ。私は少しの間、そう心の中で思い、クスツと笑う。これで、本件はおしまいだ。そう、思っていた。

☆☆☆

それから一時間後くらいのこと。私は艦首の乗組員休憩室に向かおうとしていた。その時、トイレのある廊下で、ナタリアとメルツエーデスが掃除をしているのを見つけた。それを少し隠れて見ていると、エリヴィエラが私の隣を通過して、二人のもとに現れた。

「あら？ 今日からあなた達がお掃除をいたしますの？」

「……………そうだよ」

「……………リンデンベルガー家も堕ちたものですわね」

半笑いで言うエリヴィエラ。煽るような彼女の言い方は、流石に相手を怒らせるだろう。案の定、メルツエーデスが怒りを顕にした。

「つ……………！ 何よ……………！」

「いえ別に？ いつもはアデリナさんがお掃除をやっているから、それはそれはきれいな

にしてくださいるのだけれど……他人に押し付けて自身の身の回りのお掃除もできないあなた達に、それができて？」

「……」

「……」

しかし、それに反論はできようがなかった。自身の中で罪悪感があるのかは不明だが、少なくともそのきつい言い方には、事実が混じっているのだ。そして黙る彼女らにエリヴィエラは更にクスクス笑うと言った。

「反論もできないなんて。ふふ、無様ですわね」

「……くそっ！」

彼女はそのまま休憩室へと立ち去る。ナタリアはその背に悪態をついて、手に持つ雑巾を床に叩きつけた。メルツエーデスもナタリアも、それでも掃除を続けるようにし始めたのだった。私はその一部始終から逃げるように発令所へと向かう。なんだか、何処か気分が悪かった。

それから少し時間が立って、赤色の電灯が付く夜。私はピアンカ艦長も、他艦橋要員の方々も不在の発令所でそれを聞いた。

「私も、それに参加しろと？」

「ええ」

「……だが、それは同じことの繰り返しに過ぎない。いじめる側になるといふのは」
「だからこそ、よ」

声の主はエリヴィエラとクラウドディアだった。クラウドディアは学園に居た時期はアンネリースと一緒に行動をしていて、ご飯のときも授業も、いつも一緒だった。艦内ではときおり顔を合わせて少し話たりするくらいで、話す機会が少し減っている。きつと、だから、エリヴィエラは彼女にそれを言ったのだろう。彼女は続けた。

「ああいうのは、例えばいじめられる側になるとかしないと。痛い目に遭わなければ、また繰り返ししますの」

「……」

「一度同じ目に合わなければ分からないことだつてあるものですわ」

うーんと少しうなりながら悩むクラウドディア。しかし、私は内心で断つてほしいと思っていた。何故だろうか。同じ目に合えばいいのに、と、考えていたのに。

「……まあ、正直アンネのことで私も怒っている。彼女たちに反省してもらうためにもこの怒りをぶつけるのもいいだろうな」

「……交渉、成立ですわ」

それからはクラウドディアさんも混じっていた。二人はその夜、皆から疎まれていたことを知る。皆が二人から距離を開け、クラウドディアやエリヴィエラからの陰口は当然で

あるようにだれも養護しなかったのだ。彼女たちの言い分は正論で、それだけのことをしたの間違いいではないのだ。だから、責めようがない。見て見ぬふりであり、空気はどこか重い。

ここには二人の味方はいない。それもそのはずで、二人がこんな場所でそんなことをするなんてバカなことをするからだ。私自身もそう言い聞かせ嘲笑する。

せいせいしたのだが、二人がそのまま疎まれ続けるのかと思うと少しだけ収まりがつかなかった。夕食の味は、何故か変わらず、おいしく感じられなかった。

七日目。遭難四日目

今日の目覚めは悪いものだった。当直でないとき、ナタリアさんとメルツエーデスさんが掃除をすることとなっていたのだが、この日の朝もまた、掃除に当てられていた。乗組員休憩室を掃除して居た二人だが、そこにはエリヴィエラさんとクラウディアさんの両名が居て、何かを言い合っていた。

寝ぼけた頭でもわかる。それは呆れと怒りだ。

この程度の罰で済んで良かったなとか、口々にトゲを刺すその言葉を二人がナタリアさんたちに投げかけていたのだ。

二人に対してのあたりは強い。そこへビアンカ艦長が来ると、エリヴィエラとクラウディアたちはその脇を黙って通っていった。しかし、ビアンカ艦長はそれを全く咎めることがなかった。何しているのよ、ビアンカ艦長……！寝ぼけ眼をこすりながら、その顔を見た。でも、何というか……去っていったエリヴィエラさんたちに対して、覚えておけよ……と言いたげな表情をしている。これは一波乱来るなあ、と、寝癖をかいでビアンカ艦長たちを眺めた。

「お掃除の途中、お話良いかしら？」

罰としてトイレとその周辺の掃除をさせた二人に、ビアンカ艦長は壁に持たれながらそう切り出した。二人はその声の主をちらりと見て、目を背ける。露骨に嫌そうにしながら。

「……んだよ、艦長」

「……」

「……なんで、あの子をイジメたのか。聞きたいの」

だから、ビアンカ艦長は少し迷うと率直に二人に聞いた。その言葉にケツとそつぽを向くナタリアアさん。メルツエーデスさんはそのままコチラを見ようとはしなかった。

「んなもん、話すかよ」

「話すこともなく、うざかっただけ……」

二人の言葉にビアンカ艦長もため息を付く。相手はナタリアさんで、男勝りな性格が今は敵だった。聞き出すのが難しい……。しかしビアンカ艦長は二人の言葉に間髪を入れぬように聞いた。

「……もつと原因とかあるでしょう？ 聞かせて頂戴」

「つだから、話すことなんて——」

「命令だつて言ってるの。良いから話しなさい」

そこで、ガシヤアンと何かを蹴る音とぶつ壊れる音が部屋に響いた。私は慌ててラジオルームより先を封鎖し、この場に近付こうとする人を通行止めにした。ビアンカ艦長を心配して来てくれるのは助かるのだけれど、今は三人が話し合ってるから……。

「つ……」

「……」

そして、さすがの二人もビアンカ艦長の気迫に声が出ずじまいであった。そして、少しの静寂が生まれたとき、ナタリアさんが口を開いた。

「……イライラするんだよ。ああやって、人に必死になつてなつこうとするやつが」

「……同じく、よ」

「俺は、おれは……そんな、寄生虫みたいなやつが一番キライだ」

「……」

本心だ。意外な表情を浮かべる私は、正しいと思う。寄生虫。人にすがって生きてく、か……。

「ついていって、嫌なことを頼まれても、友達だからって……そんなはずもねえのに、それでもついていこうとして……はつきり嫌だっけ言うこともない」

「友達っていう、一縷の希望みたいな名前の妄想にすがって、勝手に絶望して、それをあまつさえ受け入れて……うざいし、不愉快」

きつと、そうだったのだろう。アンネリースさんはそういううちよつと意見の出せない人だった。クラウディアさんの直ぐ側にいるイメーシかないから、確かに……すがっていたかもしれない。まあ、クラウディアさんがそれでいいなら、それでいい話なのだが。

「……そう。でも、それなら難しいけれど、関わらないようにすればいいじゃないの？」

「ああいうのは関わってくるんだよ……だから嫌なんだ」

「……ずいぶん詳しいわね」

「……」

「……」

ピアンカ艦長のその言葉に、ナタリアさんとメルツエーデスさんは黙った。どうやら、そういうのには詳しいらしい。昔、イジメていたのだろうか。同じ様な、自己主張

のない子に。

「……昔、助けたんだよ」

「……い、言うの……?」

ポツリと語りだすナタリアさん。戸惑うメルツエーデスさんの声が少し心配の声を帯びている。そして、その言葉は私にとっては意外だった。

「聞かせて。命令だつて言ってるでしょ?」

「……ほじくり返すようなことを……」

しかしそういうビアンカ艦長に、睨むメルツエーデスさん。だけれど、ナタリアさんがそれを手で制する。

「それでも、知っているのと知らないのでは、私が公平ではなくなるから。この船の最高責任者だからね、私」

「……」

黙るメルツエーデスさんの隣で、ナタリアさんが語った。

「……昔……お、同じようにいじめられてるやつがいて、さ……イジメてるやつはお嬢様でさ、何人かのグループでそいつ一人をいじめてた」

ナタリアさんの語りは、しかし静かに響いた。まるで思い出したくない過去のようないや、思い出したくない過去そのものなのだろう。

「おれはそのイジメってのが陰湿でさ、とても嫌いだったんだ。でもよ、聞いてるとき、そいつもそいつで馬鹿みたいに見捨てないでって言いやがるんだ」

「……だから、私たちはしばらく彼女を見守ることにしたの。自分から嫌だとか言つて、縁を切ればそれで終わることだし」

メルツエーデスさんも、とうとう口を開いた。ピアンカ艦長はそれを黙って聞いていた。私も、三人には見えない位置で黙って聞いていた。

「でも、彼女は言うことはなかった。友達つてものがそんなものはずなのに、友達でしよ？　って言われて、従い続けた」

「でも、ある日、それがバケツをかけるなり何なりと、悪化した。流石に見過ごせないからおれとメルツエーデスが助けてやつて、二度と彼女を虐めるなど言つてやったんだ」
「……でも、あの子は彼女たちについていっていったし、何回か助けたあと、今度は私達についてくるようになった」

「それから、彼女は変わらないままおれ達の顔色をうかがうんだ。それが、友達ではなくて、気持ち悪くてさ……」

「それが、重なったのよ。だから、我慢できなかつた……ただ、それだけよ」

そう言つて、二人は黙つた。ピアンカ艦長はそれに静かに「そうだったのね」と呟いて、二人を見つめ続けていた。

「……ま、彼女には彼女で教育が必要だろうことはわかったわ。あなた達についても、まだまだ反省してもらおうからね？」

「……」

「……はっ」

それでも、罰が軽くなるわけではない。ピアンカ艦長はそう釘を差してその場を去ったのだった。私もそこから艦橋へと向かう。横目で見た彼女たちはまた、掃除を再開していた。

そして、それから時間は経ち、夕食時となった。給食するために廊下の扉は開けっ放しになり、ローゼマリーさんが忙しそうに配っていた。当然私達は艦橋要員だが平等に決まった分量を渡され、それを受け取る。量はまだ多いほうだけれど、いつか無くなるのかと考えると、この料理は大切に食べなければという思考に至る。ローゼマリーさんの考えが染み付いてきたとしみじみ思った。

しかし、艦尾の方でトラブルが発生した。私たち艦橋要員の五人が向かうと、酷い状況が眼前に広がっていた。皆に配られるべき食事が、ナタリアとメルツエーデスの二人の分だけ少ないのだ。

そしてそれを笑うエリヴィエラさんと、それを見過ごす皆がそこにいた。

「妥当ですわね。食事がもらえるだけ感謝なさいな」

「……………」

「……………」

誰もそれに何も言わなかった。機関士の中にはざまあないね等の言葉も上がっていて、そんな酷く料理がまずくなる状況の中、二人は黙って食べ始めた。

「ゆつくり食べなさい。こぼしたって、自分で掃除するんですわよ?」

そういうエリヴィエラさん。だが、流石に少し私もちんと来てしまおう。だって、そうでしょう? いくらそれでも、貴女までそんなイジメて……!

しかし、ピアンカ艦長が私の手を掴んだ。まるでそこに行かせないように。

突然の静止に戸惑う私の一方で、メルツエーデスさんの手が震えて、受け取るときにこぼしてしまった。

「あつ……………」

「おまえっ! 何こぼしてんだ! 食べ物も、人もなあ、大切にしろ! サメの餌にするぞ!」

「マーシー!」

すると、ローゼマリーさんが手に持つ料理を丁寧に置いて、メルツエーデスさんを突き飛ばし、怒鳴った。ナタリアさんはそこに駆け寄って、メルツエーデスさんを抱きかかえた。

そして、それをニヤニヤと笑うエリヴィエラさん。バカがそういう目を見るんだと言いたげに。

流石にこの状況を見逃すわけにはいかない。そう判断した私はレオニーさんとジークリンデさんに目を配り、動こうとした。しかし、それは叶わなかった。ビアンカ艦長が私達の袖を掴んで、向かわせなかったのだ。二度もだ。どうして？ 私がビアンカ艦長に問いただそうとしたその時だ。

「そこまでにしてください」

力強いその言葉があたりを制圧した。

ナタリアさんとメルツエーデスさんの前に立つてそう言ったのは、私達艦橋要員でなく、彼女たちにいじめられていたアンネリースさんだった。

その表情は口をつぐんでキツと皆を一瞥するような睨みをつけていて、二人をかばうように両手を広げていた。そのつぐん

でいた口を開いて、皆に言った。

「私はもう大丈夫です」

「っ、でも」

「私は、怒っているんです」

反論をしようとする皆に、しかし食い気味に彼女はそう答えた。いつものアンネリー

スさんとは違って、声が大きく、艦内に響いた。声だけじゃない。こんなにもしつかり意見を主張するような人だったわけ。私はその姿に驚愕して、まじまじと見つめていた。全くの、別人のようだった。

「私のために、皆が怒ってくれたのは凄く感謝しています。でも、だから同じ目に合わせるといふのは違います」

そう続ける彼女に皆も驚いているのか、誰もが注視していた。アンネリースさんは自身の弱さを、受けてきたことを吹っ切って、自身の思いを言葉に乗せている。

「見ているだけは気持ち悪いです。実際にいじめをやるのなんか、絶対に嫌です」

実際、アンネリースさんだけはそのいじめのような……いじめに、参加はしていません。じつとナタリアアさんたちを見つめて、その罰を見取っていた。だからか、そのさまを自身と重ねてこれが間違いなのだとそう思ったのだろう。

「私のためにしてくれただとしても、そうでなかったとしても、これ以上ナタリアアさんたちを虐めるのは私が許しません」

そう言って、静寂が訪れる。アンネリースさんはそこから離れずじつと皆の目を凝然として見つづけていた。誰もが皆、そこで少し我に返るとバツの悪そうに顔を背けたり、俯いたりする。わかっていた。ちゃんと冷静になれば、これがいじめなんだってこ

とぐらい。そして、パンパンと二回手を叩くと、ビアンカ艦長が静止を声かけた。

「……これまでよ。これ以上問題を起こすのなら、私が怒るところだったけれど、アンネが代弁してくれたしね。私から怒ることはないわ……ただ」

立ち上がって話すビアンカ艦長に今度は全員が顔を向けた。そして、皆に目配せをすると、ビアンカ艦長は続ける。

「ただ、今は最悪の状況かということを理解してほしいわ。この嵐を乗り越えるには皆が力を合わせる必要があるの。だから、誰かを卑下したり、誰かに仕事を押し付けたり、いじめたりしないでほしい。私達は……海の仲間は、家族なんだから」

ビアンカ艦長の表情は少し、悲しさを帯びていた。傷ついたように、傷つかせた罪悪感を、感じているように。

「喧嘩するのは良いわよ。意見をぶつけ合うのだって良い。迷惑をかけるのだって良い。でも、自分の仲間を傷つけないで、もっと信用してあげて欲しいわ」

皆がそれを静聴し、反省をしていた。ナタリアさんは、ビアンカ艦長の声、アンネリースさんのその背を見て聞いて、俯いていた。メルツエーデスさんもまた、アンネリースさんの背を見続けていた。

「ブルーマーメイドとか、そういうのじゃなくて、私達が一人間として生きていくこれらを思つて。ナタリアさん達も、ここにいる皆も、反省なさい。私からは以上よ」

そう言うと、ビアンカ艦長はその場から離れ、発令所へと移動していった。その時、ビアンカ艦長は小声で私に一人にしてほしいと言ったので、ついていこうとした足を私は止めた。ビアンカ艦長も、何か思うところがあつたのだろうか。責任者という立ち位置は難しいもので、ビアンカ艦長もまた、とても疲れていたに違いないのだ。

ビアンカ艦長の背を見送る私は、背後での声を聞いてハツとした。

「……………ごめ……な……さ……」

それは贖罪の言葉。自身の過ちを認め、許しを請う、しっかりとした反省の言の葉だった。小さな呟きは、ナタリアさんを小さくみせた。小さな呟きは次第に大きくなり、しっかりと耳に届いた。それにつづいて、ナタリアさんの肩に寄り添って、メルツエーデスさんも謝る。

「ごめんなさい……………」

「ごめんなさい……………ごめん……………私……………」

「許します」

そう言つて、アンネリースさんは二人を抱きしめた。ぎゅつと、優しくと言うよりは、力強く。そして耳元で再び囁いた。

「私が、ゆるします」

その許しの声に、ナタリアさんもメルツエーデスさんも、心に積もった闇を浄化され

たのか、頬にひとしずく、涙が伝った。やがてそれは歯止めがかららないように、ポロポロとこぼれ落ちていった。

「ごめんなさい……うああああん！」

「ごめんなさい……」

「もう良いんですよ、ナタリアさん、メルツエーデスさん」

「うああああん！」

ナタリアさんとメルツエーデスさんの泣いている姿を見て、皆も彼女たちに駆け寄って口々に謝った。謝って、泣いて、謝って……そこにはもう、いつもの刺々しい空気はなかった。

私はそれに安心したとき、隣をフツと通り過ぎていくエリヴィエラさんに気づいて、ビアンカ艦長のもぞみのため声を掛けようとした。だけど、それはできなかった。彼女は、ムスツと何かに怒っていて、それこそ何も話せそうになかったのだ。それも、この状況に対しての怒りというよりは……。

☆☆☆

雲が空を覆い、しかし雨は止み、波はまだおとなしい海上に浮かぶUーボート。その

ブリッジで一人、潮風に吹かれて揺れるコートを無視してそこに居た。ビアンカ艦長は手すりに手を添え、ただただ遠くの地平線を眺めていた。今の時刻は。丁度夕暮れ？でそこはぼんやりと明るい。なんとなく、頭にかぶっていた艦長帽を手に取ると、今度はそれを眺め続けていた。

そして、手すりから手放すと、帽子を優しく撫で始めた。父の白い艦長帽。それにどれほどの想いが、思い出が詰まっているのか。撫でただけではまだ、わからなかった。

「……………どうしたの？」

撫でながら、背後に現れたエリヴェイエラさんにビアンカはそのまま声をかけた。コチラを見ないでも、誰かわかっていそうなビアンカ艦長にふうつとため息を付いて、エリヴェイエラさんはその隣に並び、手すりに手をかけた。ビアンカ艦長の間に答えないまま少し波風に吹かれて、自身たちの髪を揺らす。横髪を手で耳にかけ、遠くの海を眺めながらエリヴェイエラさんは呟くようにこういった。

「……………あの明るい場所が、私はちよつと苦手ですの」

ポツリと、そう漏らす本音に、しかしビアンカ艦長は帽子を眺めていた。だが、その撫でる手を止めて、その続きを聞いている。彼女は続けた。

「社交界とか、色んな場所、色んな高貴な方々とお会いすると、こういうことが結構ありますの。……………私は、だからああいう純粋な場所が苦手ですわ」

そう言いながら腕を組み手すりに乗つけて、口元を埋めた。視線は船体に当たる波の動きを捉え、でも頭の中の渦に囚われる。苦手だ。そうじゃない。苦手になった……なつてしまった。一つ空気を吸って、それを吐いて……ビアンカ艦長に、誰かに、自身の本音を吐露した。

「どうしても……どうしても、茶番だとか感じてしまう自分がいるのが、嫌い……一緒にごめんなさいと言えない自分が……嫌いですわ」

彼女はわかかっていて、一人になる場所を探していた。海上に一人になる場所はなく、このもやもやとした嫌悪感を、しかしビアンカ艦長にだけ吐露したのだ。波を割って進むその音が、虚しく聞こえた。

しばらくの沈黙がすぎると、ビアンカ艦長は帽子をかぶった。そして、再び手すりに手をかけ、遠くを眺めながらこうつぶやいた。

「好きになる様、変わればいいわ」

「……簡単に言いますわね」

「簡単よ」

それができれば苦労はしないと聞いたげなその言葉に、ビアンカ艦長は即答した。目だけでエリヴィエラさんはビアンカ艦長の横顔を見る。エリヴィエラさんの瞳に写ったのは、優しい微笑みだった。

「……………ここには家族がいる。血のつながっていない、それでも深いつながりのある、ね」
家族……………？ と呟くようにその言葉を反芻するエリヴィエラさん。それにビアンカ艦長はそう、と答えると目を合わせて続けた。

「迷惑をかけるのだからって良い、喧嘩したって良い。だって、家族なんだから。……………ここでなら変われるわよ。現に、貴女だってここに乗っているんだから。貴族とか色々気にしていたら、ここには乗れなかったでしょう？」

「……………そう、ですわね」

皮肉も少し混じったそれに、エリヴィエラさんは目を背けた。まったくもってそのとおりで、多少なりとも今の生活も悪くはないかもしれないと変わっている自分がいるのを自覚していた。

しかし、ビアンカ艦長はそれに微笑みながらこう聞く。

「ふふふ……………今の話だってきつと一歩引いて受け止めてるでしょう？」

その言葉に少し驚きを感じた。自覚しても、あんなふうになつすぐに変われるなんてそう簡単なことじゃない気がして、少し引いて、自分から……………

「……………ええ、そうなれるなんて、ちよつと……………思えないですわ」

凶星だからか、弱音を吐いた。はつきりとした本音をここまで言うのは自身でも少し珍しく、エリヴィエラさんはどこかで戸惑いながらもビアンカ艦長と話を続けていた。

そして、ビアンカ艦長はだからこそ自信満々に、力強くこう言った。

「なら、私が見ているよ。貴女の変化を、私が見てる。貴族とか色々関係のないここだから、大丈夫よ」

ビアンカ艦長は優しく、何処かだらしない。でも、やるときはやる。エリヴィエラさんは、そのしつかりとした言葉を、信じたいと思うった。

「艦長……」

「さ、謝ってきなさい。例え別の目的があつたとしても、無かつたとしても、貴女も反省の対象なんだからね？」

「……J a w o h l H e r r K a p i t a n (諒解、艦長) ……い」

☆☆☆

八日目。遭難五日目。

雨はやみ、波もある程度大人しくなってきた本日。皆が慌ただしく働く中、今日の料理は豪勢なものとなっていた。表向きは皆の結束が強まったことに対してのお祝い……みたいな感じだ。でも、その裏では新鮮な食料が危なくなり、その消費として豪勢になっていたのだ。食糧危機である。

でも、まあ、まだ缶詰などが残っているから餓死の危険性はそれほど高くはない。レモンだつてまだあるから壊血病の恐れも……高くないはず。

ともあれ、まだまだ危険はあるけれど、私は今日の日誌をあの人々の様子で締めようとおもう。あの、笑顔をいっぱいにして、部屋で遊んでいた彼女たちを。

ラツヘル・ルイーゼ・ハーニツシュ

そう綴つたあと、私は料理をまた一口食べる。その料理は、とても美味しい味付けだった。

第九話：ブルーマーメイドの卵

「期待していたのに」

「優勝逃しちゃうとか、酷いわ」

心無い言葉が響く。やめて。私はただ……。

「ヴィクトーリアアつて名前、皮肉だよねー」

「期待の新星とか言われて、調子に乗ってただけなんだって」

違う、私は。

「だから、お父さんも死んだんでしょ」

「——っは！ ……はあ、はあ……」

目が覚める。あたりを確認すると、すやすやと寝ている子達がカーテンを閉め忘れていた。そのカーテンを閉めてあげると再び寢床へと戻った。

……久しぶりに嫌な夢を見た。

ちらつとベッドの枕元にある写真と、割れたメダルを見る。割れたメダルの中央にはクロールをしてしている人の上半身のみが写されており、片割れはおそらくその下半身だっただろうことが伺える。

写真には、男の人と女の子が居た。海を背景に、サーフィンボードを手にした水着姿の男性が女の子を抱えていた。幸せそうな笑顔で。

彼女、ヴィクトリアはそれをぎゅつと抱きしめると、元の位置に戻し、横になった。

「……父さん」

その眩きは、枕に吸い込まれ、消えていった。

☆☆☆

九日目。遭難六日目。

どんよりとした雲が空一面を覆う。なおも風は吹きすさび、波は荒れていた。流石に慣れたのか艦長もエルヴィーラ副長も、レオニーさんもジークリンデさんも、揺れながらスープをこぼさずに食べていた。嵐が続きすぎて辛い本日、いつもの食卓には保存のきく食糧が増えつつあった。もうおなか一杯に食べれないのかな。と言っても、美味しいし、腹八分目程度は食べられるし、まだまだ十分マシな部類ではあるが。

日は多分真上にあるのだけど、そんな実感がわかないくらいに黒い雲が邪魔で、相変わらず同じような日々が流れていく。私達にとっての敵は暇であった。食事はそんな一時にやすらぎを与える時間であった。

でも、少しでもこぼしたらローゼマリーさんがカンカンになって、飯抜きにされちゃうので、揺れに対応する体ができてしまった。いい事なのか、良くわからない技術であ

る。

「ねえ、ハンナ。この嵐はいつまで続きそう？」

すると、ビアンカ艦長がスープをパンに浸して一口楽しんでから、話しかけてきた。普通ならそれは不味いとか、そういう侮辱的な食べ方に当たるのだろうけれど、美味しそうにしているので私は満足です。

「……そうですね、恐らく本日の午前中には晴れると思つてたんですが……妙な感じがします」

「というと？」

「切れ目が見えたような気もしたのですが、雲が重なつてきている気がするんです」

伊達に航海長をやっているわけではなく、私はだいたい天候を読むくらいはできるのだ。その勘が嫌な予感を脳裏によぎらせていた。

私がそう言うのと、ジークリンデさんが肩を落としながら何となく察した。

「……つまり、嵐が合体してること……？」

「連続で来たつてことですね。また波が荒れるかも」

「最悪だよ全く。エンジンちゃんの機嫌さえよければ回避できたかもと思うと、面目ない」

「……ほんと、つつかえね」

「酷いよ!? 酷いよジークリンデ!?」

いじめだーと言うレオニーさんに四人して笑い合う私達。するとエルヴィーラ副長がレオニーさんの頭に手をのせた。

「大丈夫だ。私が君を守るから」

「え? ……あ、うん」

「何大人しくなってるのよ……」

「はいはいそこまでそこまであついいあついい」

「な! か、からかわないでくれよ、ハニー! 副長!」

イケメンがイケメンに誂われている図というのは中々貴重でした。と、感想を心の中で呟いていると、ふと背後に悪寒が走り、ゆっくりとそっちへ振り向いた。そこには、まるでゴミを見るような目で見下し、エプロン姿なローゼマリーさんが腕を組み仁王立ちでいた。

「……その四人……タマア、トツタルデエ……とつとと食いい」

妙にドスの聞いたヤーパンの言葉に、私達は声にならない叫びを短く上げ、すぐさま食事に手を付けた。タマアって何!?! なんて意味かわからないけど、すごく怒ってるのはわかった。ちらりと見ると、ピアンカ艦長は何食わぬ顔で食事をしてた。あ、ピアンカズルい。何、我関せずみたいな態度取ってるの!?

とまあ、波乱のお昼ご飯を過ごした私達ではあったけど、その後も特に変わりなくブリッジに出ては雲の流れなどを確認していた。その時はヴィクトリアさんとエーリカさんが一緒に見張りを行っていて、うるさいのなんの……。賑やかなブリッジは、気合と根性で満面の笑みがそこにはあった。一緒に当直だったエリヴィエラさんのツッコミが炸裂してて、一番疲れていそうだったなあ。

もう一人一緒にいたザシャさんは、お昼どきのピアノカ艦長みたいに我関せずな態度で見張りに当たっていた。彼女は話せないからと言う理由もあるのだけれど、おおよそそれを免罪符に馬鹿……もとい元気な彼女らのテンションから離れたのだろう。賢い人だ。

そんな大騒ぎな見張り作業を終えて、発令所に戻ると、ジークリンデさんが興奮気味にかけよってきた。何事かと思ったら、彼女はさっきのローズマリーさんの言葉が気になっていたらしい。

なので聞いてみたのだが、彼女もまたミヒヤエラさんから教わったらしかった。

そして今度こそ言葉について知るためにミヒヤエラさんに聞くと、面白いヤーパンの映画を教えられたらしい。そして、帰ったらぜひ見たいとのことと興奮気味だったのだ。

はははと苦笑しながら、一緒に見ようと言うジークリンデと約束をしてしまった。レ

オニーさんの方を見ると、レオニーさんも肩をすくめて苦笑していたから、レオニーさんにも同じように掛け合っただろう。と、今日はそんな約束と元気な人達の面倒見疲れがあつた程度だつた。

……それと、もう一つ。私が深夜の見回りをしていたときのことだつた。艦首乗組員休憩室に差し掛かつたとき、唸り声が聞こえてきたのだ。

「う……………うう……………」

そのカーテンを開けると、額に汗をかくヴィクトーリアさんがいて、私は慌てて体を揺すつた。

「大丈夫……………？」

「……………こう、かいちよう……………？」

「ヴィクトーリアさん、どうしたの……………？」

なるべく抑えめの声でそう訊く私に、ヴィクトーリアさんが腰掛けるように体勢を変えた。どこか眠たげにしているものの、汗だくで、少し顔色が悪い。すぐ近くのタオルを手に取るととりあえず顔の汗を拭き取つた。

「……………悪い夢を見るんです」

「悪い夢……………？」

そう語るヴィクトーリアさん。私はぼそつとオウム返しをすると、ヴィクトーリアさ

んはハツとして、なんでもないですといつも笑顔に戻った。さつきまであんなに辛そうだったのに、そんな元気な笑顔を出せるって……。

「何か、辛いことがあれば相談して。絶対に聞くから」

「……ありがとうございます」

そうしてカーテンを閉める私。なんだかモヤモヤするけれど、どことなくまだ聞いてはいけない気がして、その場はそうしておいた。深夜にはそんな事があつた。

しかし、翌日十日目、遭難七日目の今日は違った。大きな揺れが艦を襲い、食器類やベッド上の私物類が散乱する。ローゼマリーさんの悲鳴と怒号によつて目が覚めた私は、本日の初仕事としてローゼマリーさんを宥めることから始まったのだった。

「艦長……」

「……お疲れ様、ハンナ。ローゼマリーはああなると私でも手がつけられなくなるわ」

「流石に波に対しての怒りを鎮めさせるのは無理です」

「え、じゃあどうしたの？」

「賭けトラップで接待をして寝てもらいました」

「おおよそ女子高生の宥め方じゃないわよね……」

「ですよー……」

「被害総額は？」

「お皿いくつかと、私のお財布の中身1/3、あとゲルトルートさんの下着です」

私の乾いた笑いに、ビアンカ艦長は短く謝った。さらばいくつかの金額と、ゲルトルートさんの下着。途中から割って入って本気を出したくせに、カモられるゲルトルートさんには哀れみの念を送る以外なかった。

ローゼマリーさんがその後その下着をどうするのかはわからないけれど、とりあえず暇な時間を潰せたのは少し良かったように思える。なんだかんだ言っただけで、少し楽しかったしね。

「さて、と。それじゃあそろそろ上がってもらおうかしら」

「はい。天候の確認と嵐の規模を調べておきたいですしね」

「あ、今は雨も降ってるらしいから、合羽を着ていきなさい」

「ありがとうございます、艦長。……しかし、雨ですか」

「ええ。嫌になっちゃうわ」

軽口を叩きながら合羽を着る私。おぼつかない足元が海上の酷さを私に教えてくれていて、嫌になる。愚痴りながらはしごに向かおうとしたとき、上から滑るようにヴィクトリアアさんが落ちてきた。ずぶ濡れで、よろよろとしているその体を、私は反射的に支えた。

「つて！、どうしたの？」

「はあ、はあ、こゝ、航海長、艦長は!？」

「ここに居るわ。どうかしたの？」

「光です! 光が見えました!」

「何？」

光? そう眩くとビアンカ艦長の顔が険しくなった。つまりは船か、陸があるということである。灯台の明かりであれば少しの間はふかふかのベッドで休むことはできるが、恐らく船だろう。船であつた場合は、現在位置を聞いたり、助けを求めることができらるだろう。

「おそらく、モールス信号です!」

「……嫌だわ。その先を聞きたくはないけど、どんな信号を送つてたの?」

「わ、分かりません……全方向に対して光を放つていたようだったので」

「……そう」

返事をするビアンカ艦長はしかし、思案するように何処かを見つめていた。少しして、私はビアンカ艦長に声を掛ける。彼女の頭の中では灯台か、船か、船なら何があつたのかが巡つているのだろう。

「艦長?」

「……全方向への発信なら、恐らく近くに船団があると思うわ。船団からはぐれた船、な

のでしょね。少なくとも陸なんて希望は一旦思考外に置いておいたほうがいいかもしれないわ」

「……では、その船と接触しますか？」

「そうよ。ライトを持ってきて！ コンタクトを行う！」

「ヴィクトーリアさんと艦長は先にブリッジへ行つて、私がライトを持ってくるから！」
そう言う二人を行かせ、私は発令所で少し探す。そして発光信号機を手に取ると少し重たいそれを何とか艦橋へと運んだ。ひよこつと顔を出すと、ザーザー降りの雨が私を襲う。命綱をつけ、体を出した瞬間、ブリッジに波が襲った。

「わぶっ」

「大丈夫？」

「平気です、艦長。それよりも、ライトです！」

そう言うって、差し出された手を取り立ち上がるとピアンカ艦長に発光信号機を渡した。私はちらりとヴィクトーリアさんが指を差す先に、確かに微かだが光が遠くを照らしていたのを確認する。あれか……！

「ありがとう。ヘルミーネとゲルトルートは周囲に他の船が居ないか注意して！ ヴィクトーリアは光を見失わないで！」

「「はい！」」

元気よく返事をし、各自が視界ゼロに近いそこで、双眼鏡を覗いた。私とビアンカ艦長、ヴィクトーリアさんは目標の船の光を見続け、相手とのコミュニケーションを行う。ビアンカ艦長は発光信号機を肩に担ぐと、目標の船に向けて光を放った。手で発光信号機の隣にあるスイッチを押すと、信号機の光が遮断され、それでモールス信号を送るのだ。

「……！ 艦長！ 相手が気づきました！」

すると、光がコチラに向けられ、その眩しさに少し怯む。そして注意して船を見ると、ビアンカ艦長が声を上げた。

「タンカー船!? ずいぶんと、大きいのがいるわね!?!」

「何があったんでしようか!?!」

「今それを聞いてるの!」

チカチカとライトで照らしてビアンカ艦長がやり取りを行う。だが、波や雨で凄くやりづらそうにしており、私もそのライトを支えて手伝っていた。

「どう!?! なんて言ってる!?!」

「……おそらく、現在航行不能！ 支援を要請！」

「この嵐じゃ無理よ！ 晴・れ・る・ま・で・待・機・!」

「晴れるのにいくらって!?!」

「賭けてるわけじゃないです！ ゲルトルトさんは黙ってて！」

「すっごいスースーする！ なんか気持ち悪い！」

「本当に！ ゲルトルトさんは黙って！」

「近いわね……こ・れ・以・上・は・近・づ・け・な・い・！ 待・た・れ・よ・！」

「……艦長！ 了解の返答が来ました！ 大丈夫そうです！」

「わかつたわ！ ……ヴィクトーリア！」

「な、なんですか！」

名前を呼ばれたヴィクトーリアさんはビックリと跳ねると、ピアンカ艦長に向き直った。ピアンカ艦長はじーっとヴィクトーリアさんを見つめるとこう言った。

「……顔色が悪いわ！ 交替なさい！」

「ま、まだいけます！」

そういうヴィクトーリアさんの言葉に、ピアンカ艦長は語気を強めて続けた。

「交代よ！ ハンナ！ 一緒に行って、交代させて！ 私も後で降りるから

！」

「わ、わかりました！」

そう言つて、私はヴィクトーリアさんを先に下ろすと、そのままついていく。だが、発令所についたあと、波に揺れた。よろめくヴィクトーリアさんを私は支えるが、その表

情は何処か青いままで、乾いた笑みが張り付いていた。

「ヴィクトーリアさん……？」

「はは、は……大丈夫です。航海長は戻って……」

そう言つて、肩を貸す私から離れるようにするヴィクトーリアさん。それでも私はその腕を離さず、支えるように手伝う。ヴィクトーリアさんの表情は、優れていない。なんでいつも見ている私が、気づけなかつたんだらう……。そう、頭によぎる後悔が彼女を支えていた。罪悪感ではない、後悔だ。

だから私は、続けたんだ。

「……嫌です」

「……」

「昨日もいきました……悩みがあれば、相談してほしいって」

「……そう、だけど……」

「悪い夢、ですよね」

「……」

そして、黙るヴィクトーリアさん。私は昨晚知っていたのに。それでも気づけなかつた。私の馬鹿。もつと前から色々あつたんだ。それが、悪い夢につながつたんだ。

過去の会話を思い出して、私は訊いた。

「教えてください。いつだったか、艦橋に居たとき泳げないって言っていたけれど、貴女は確か——」

「ハナナ……航海長」

「……」

「一つ聞いていいですか？」

「何ですか？」

「……貴女は、海に溺れてる人を救うために、命をなげうって出られますか？」

そういう彼女の目は、今までの笑顔の彼女よりはるかに、真剣に、モノを聞いていた。

☆☆☆

私達艦橋要員に許された上級休憩室の私のベッドで、私達二人は座って居た。周りには誰も居なくて、少し静かだった。実際は沈黙が乗組員休憩室の賑やかな声を聞かせていたが、それすらも聞こえないような静かさであった。

少しして落ち着いたのか、ヴィクトリアさんがぼつりぼつりと語りだしてくれる。

「……私は、私の父は、ライフセーバーだったよ。海に生きる様な人だった」

うつむく彼女の表情はわからずじまだったが、声色は少し明るかった。それが、彼

女が父親をどう思っていたのかを表していた。

「私はそれに憧れて六歳から泳ぎを習った。父みたいになりたくて、海も泳ごうとしたんだけど、波のある場所って思い通りに泳げないんだ」

その手には一枚の写真が握られていた。そこにはサーフィンボードを持った男の人と、幼いヴィクトーリアアさんが写っていた。誰だつてわかる、家族の写真だ。

「で、父に怒られて……でも、優しんだ。それからは海を泳ぐ方法を教わって、水泳だつて強くなった」

泳ぐのが、好きだったんだ。そう呟く彼女は天を仰いだ。しかし、その表情は曇っていた。

「でも、学校で強くなるたびに色んなバッシングを受けてさ。それでも父のようになりたくて頑張ったんだ。頑張って、頑張って、部のエースにだつてなつたんだよ」

その手に持つ割れたメダルが、その証拠であった。ちらつとしか見えなかったが、世界、ユース、という文字も見えた。本気でエリートだったのだ。しかし。

「大きな大会の、団体戦。でもそのまえに父は……溺れている人を助けに行つて、死んだんだ」

「……」

視線は再び写真に写る父に移る。その目は悲しみを帯びていて、私は何とも声をかけ

られずじまいだった。

「それで、私は結局、勝てなかった。実力差が少しあったのもあるけど、父の死が、一番苦しくて……」

ヴィクトーリア（勝利の女神）なのにね、と。皮肉を込めて。私は胸が痛かった。違うんだって言いたくて、ヴィクトーリアさんの名前は、そんなもののためだけじゃないって。そう言いたくて、でも、言えなかった。

ヴィクトーリアさんは続ける。目を閉じて、耳をふさいで。

「もう二度と泳がない。そう決めていたよ。でも、父のようにはなりたくて、ブルーマーメイドになろうって……」

「そう、だったんですか……」

「……」

私は、そう言ってしかし、彼女を真っ直ぐ見ることができなかった。どう声をかけるべきなのか……。私は、どんな言葉も軽いように思えてしまって、いえなかった。

でも、ヴィクトーリアさんの脳内では、全く違っていた。私の言葉は、確かに響いていたのだった。

「ハンナ……航海長」

「……」

「一つ聞いていいですか？」

「何ですか？」

「……貴女は、海に溺れる人を救うために、命をなげうって出られますか？」

「——少なくとも、救うために私達が存在しています。命は大事だし第一に考えるべきだけど、救えるのなら、私は出てると思う」

目を開けて、満面の笑みを浮かべる父のその顔に、彼女は悲しく微笑んで、呟いた。

「救うために私達が存在している……父も、そんな風に言っていた」

「え……？」

懐かしそうに。色のついた声音が、私の心にまで響く。でも、私はそう答えただけに過ぎなかった。すこし戸惑う私ではあったが、ヴィクトーリアさんのその横顔を見てそれも収まる。

「なんだか懐かしいや……なんで、今なんだろう……。聞いてくれてありがとう、航海長。話してみるもんだね。スッキリしたよ」

少し、涙声混じりにそう言って、最後は晴れた顔をしていた。わ、私、何かの役に立てた……の……かな……？ でも、その晴れやかな表情はいつもと同じ……とは、少し

違うけれど、少なくとも屈託のない微笑みだった。

「私も、父みたいに頑張るよ」

☆☆☆

それから数時間後。すっかり艦内は赤色点灯に変わり、夜へと変貌していた。今も艦内は揺れていて、潜行していたくらいだった。タンカー船だって、ここに居るのはとても安全とは言えない状況下ではあったが、何とか踏ん張ってもらっていた。外は暗く見づらいう上に、雷雨が私達の視界を奪っていた。

艦橋にいる当直の四人と変わって、私も見張りに付くことになった。のだけれど……
「ヴィクトーリアさん、本当に来るの?」

「大丈夫ですよ。頑張るって言ったのに……決意をしたのに」
「ううう……そう言われると弱いです……」

あの後、今日はもう休んでいても良いよと言ったのにヴィクトーリアさんはなおも出ると言って聞かなかったのだ。発令所のブリッジへの梯子を前に、雨合羽まで装備していたらもう文句も言えない。そのうえそんな言葉を言われると、私も渋々だが、了承せざるを得なかった。

「ちよつとだけですからね？ 一時間程度で戻って休んでください」

「私はもう大丈夫なんだけどなあ」

「一応ですよ、一応」

そう言いながら艦橋へと上がると、先についていたヘルミーネ……あ、ヴラドさんとザシヤさんが待つてくれていた。特にヘル……ヴラドさんは何処で覚えたのかわからない立ち方をしてそこに居た。

「ごめんなさい、少し遅れて！」

「ハーツハツハツハ！ よい！ それくらいこのヴラドが許そう！」

「今日も絶好調だね！ 右目は疼いてるの、ミーネ！」

「ヴラドだつ！」

「……」

「……あはは、これまた濃いメンバーね」

はあ、と私はそう呟いてため息を付いた。ザシヤさんが無言で肩をたたいたのがせめてもの救いだろうか。ちらりと見た手持ちホワイトボードにはコミカルな顔文字が書かれており、どう見ても私を煽っていた。……うん、やっぱり、濃いメンバーだわ。

「それじゃあ、とりあえず！ ヴイクトリーアさんはタンカー船を見ていて！ ザシヤさん、ヘル……ヴラドさんは他に船が居ないかを見て！」

「了解！」

「……」

「ふふ、このヴラドに任せろ！」

とまあ、わかりやすい返事をもらったところで、私達はそれぞれに仕事を始めた。ヴィクトーリアアさん以外の私達は他に船が居ないかを確認し、ヴィクトーリアアさんは常にタンカー船を確認していた。それから数十分後、特に変わりなく、とにかく私達は揺られていた。気になることは、タンカー船の上で何かをしていることくらいで、特に問題は無いとヴィクトーリアアさんが言っていた。

すると、艦橋にまたも人が増えた。

「皆、大丈夫かしら!?!」

「艦長！ 大丈夫です！ 特に問題はありません！」

「そう、良かったわ！ 私も少し見張りに付くわ！ 何かあれば逐一報告を！」

「了解！」

私が喜んでビアンカ艦長を迎え入れると、ヴィクトーリアアさんが少しだけムスツとしてコチラを向いていた。何かな？ なんか変なことでもしたかな？ と不安になるも、良く良く考えれば渋っていたヴィクトーリアアさんの迎え入れようと、ビアンカ艦長の迎え入れようが違ったことかなと思う。まあ、仕方ないよね、艦長だし。

そう考えながら、私は同じように変わらないうあたりを見渡していた。なにせ、それ以外にしようがないからだ。

しかし、それはヴィクトーリアさんの短い悲鳴と、背後から照らされた明かりによって破られた。

「あっ!!!」

「何かしら?」

「どうしたの!?!」

「何事!」

「……」

見事にバラバラな返事が一斉に送られる。だが、それになりふり構わずヴィクトーリアさんは指を指した。指し示した先を驚愕した表情で見ながら。

「ひ、人が! 人が、落ちた!!」

「え……?」

その場の誰もが耳を疑った。きっと見間違いだと、そう考えるのだからできる。でも、ヴィクトーリアさんの目は誤魔化せない。ハッと我に返ったピアンカ艦長が大声で叫んだ。

「発光信号機!! はやく!!」

「は、はい!!」

「えっと、送られてきました!」

「くっ……! 急いで……!」

発光信号機をぶんどるようにビアンカ艦長が手にすると、タンカー船に向けて発光した。そして、少して目標のタンカー船でライトが灯る。そのライトは近場を探しているものの、見つからないのかぐるぐるしているだけであった。しかし、ヴィクトーリアさんは正確に指を指していた。

「あそこです、艦長! あの位置! 船のすぐ近く!」

「……っ! 目が良いわね! 最高よ!」

即座にそつちへ向けると、確かに人がそこに居た。救命胴衣がその付近に浮かんでいることから、つける間かのタイミングで落ちてしまったのだろう。運が悪すぎる……!」

ヘルミーネさんも、流石にいつもの調子ではいられないのかあたふたしていた。

「あわわわ、でも、このままじゃ……!」

「ヘルミーネさん! 発光信号機を支えて!」

「ひゃい!」

「……っ」

ザシャさんはホワイトボードに「どうすりゃいいんだよこれ」と書いて発光信号機の

指す方を見つめていた。

そして、私は咳いてしまう。それはあまりにも絶望的だった。波は荒れ、救命胴衣は無い。もう、そのままさらわれてしまってもおかしくなかったのだ。

「もう、助からないかも……!」

「っ艦長!!」

だからか、ヴィクトーリアさんは声を上げた。悲痛なようで、本気で懇願するような、そんな叫びを。

「私に……! 私に、行かせてください!」

「だめよ! どれほど今の海が危険か! 泳げるからの問題じゃない!!」

「わかっています!! それでも、それでも……! 何もしないまま終えたくない!!」

しかし、その願いにビアンカ艦長は鬼の形相でそういった。だが、ヴィクトーリアさんは続けた。その想いの力は強かった。

「……っ……近づけて、船同士がぶつかったら! 大変なことになるのよ!」

「艦長は!!」

それでも食い下がらないビアンカ艦長に、ヴィクトーリアさんは最後の叫びを上げた。た。

「艦長は、そこに溺れている人を見つけたら、どうします!」

私に対して言った、その質問。そんなの反則だ。でも、私はそれでも、今のヴィクトーリアさんには賛同していた。危ないからだめだとか、色んなことを言えたはずなのに、それでも……ビアンカ艦長に甘えているのはわかってる。でも、言つてほしかった。最終決定権は、ビアンカ艦長にあるのだから。

「……っ、私達は!!」

それを救助するか、しないか。究極の二択だった。救助を選択すると、船に近づくととなる。もし体当たりを喰らえば沈む可能性があった。しかし、このまま放置していると、あの人は死ぬかもしれない。それは一秒一秒が命取りになる今、数秒も待つていられなかった。

ビアンカ艦長はキツとヴィクトーリアさんを睨む。その目に迷いが無いのを見て、ビアンカ艦長は叫んだ。

「海に生き!! 海を守り!! 海を往く!! それがブルーマーメイド!!」

その覚悟を見て、ビアンカ艦長は腹をくくったんだ。叫ぶその言葉は私達の目標、将来、そして夢。それがかなっても、その先を往くための合言葉。

「その卵なんだつたら……! 針路15度、微速前進!! ヨーソーロー!!」

賽は投げられた。ビアンカ艦長の命令に従って、艦を動かし始めた。その指針に狂いはあるかもしれない。それでも。

「行くしか無いじゃない!!」

ビアンカ艦長の代わりにザシャさんとヘルミーネさんが発光信号機を手に持ち、ヴィクトーリアさんの指差す方を照らし続けた。夜である今ここ一帯は暗闇に覆われ、明かりといえは手に持つライトとタンカー船のライト、そして雷だった。その上雨で視界が奪われ、もはや絶望的状况にもかかわらず、私達は果敢にも救助活動に挑んだ。

ヴィクトーリアさんは長めの頑丈な命綱をつけると、素早く制服を脱ぎ捨てた。イルカの髪留めを外して、首にかけていたゴーグルを装着した。そして、Uーボートがタンカー船に近づいた。どのくらいの距離かはわからないが、少なくとも船員が見えるくらいには居て、雨だけでなく汗が伝っていく。

「ヴィクトーリアー!」

「はい!」

「絶対に、無茶はしないで……!」

「……J a w o h l H e r r K a p i t a n (諒解、艦長)！」

近づいたことと、ビアンカ艦長のその声に、短く軽い敬礼をすると、彼女は勢いよく海へと飛び込んだ。揺れが凄まじく、波は荒れている。それでも彼女は止まらず、進んだのだ。

「照らし続けて! 絶対に見失うな!」

「ふたりとも、頑張つて！」

「わわわわわわかりました！」

「……………」

足場の悪い中で、私達三人がかりでそのタンカー船の乗組員を照らし続けていた。だが、波に隠れたりして、見つけ出すのに一苦労する。あまりにも難しいミッションだった。そして、そこですごい光景を目にする。

「ああああああああああ!!」

其処には、マーメイドが居た。荒れ狂う波を物ともしないかのように、そのさきへと向かっていく。まるで人ではなかった。

その叫びは悲痛かもしれない。けれど、その泳ぐ姿は軽やかで、何よりも美しかった。私は、私達はその姿に、少しの間、見惚れてしまった。

—— 期待していたのに

—— 優勝逃しちゃうとか、酷いわ

—— だから何！ 私は、勝ちたかつたんじゃない！

—— ヴィクトーリアって名前、皮肉だよー

——期待の新星とか言われて、調子に乗ってただけなんだって

ちがう、違う違う違う！ 勘違いも甚だしい！ 私は、その世界で勝ちたかったんじゃない！

——だから、お父さんも死んだんでしょ

違う!!! 父は立派に死んだんだ！ 人を助けて死んだんだ！ それを私は言い訳にして負けたんだ!! 私、自身に!!!

「ああああああああああ!!!」

違う。私は、私が勝ちたかったのは、父と、いつまでも理想のままの自分だった!!
いくつもの葛藤、いくつもの想いを持って、この荒波を超えて、決着を——!

瞬間。

大きな雷鎚が、あたりを照らした。劈く音が凄まじいものだったことを表すが、ピアンカ艦長だけはしっかりと認識していた。大きな波が、近づくと、そのすぐ近くにタンカー船。

「全速後退!! 対ショック体勢!!!」

その叫びは虚しく、艦は波に流された。時既に遅し。大きく揺らぐ船体に、皆が転覆を脳裏によぎらした。しかし、それは免れることとなる。それと同等の傷跡を残して……！

そう、轟音とともに、艦首が船へと激突したのだ。
バリバリバリバリ！

嫌なひつかき音と何かが破損する音が響き渡る。でもそれ以上に酷い状況が艦内で起きていた。

「きゃあああああああああああああああああああああ!!」

「うあああああああああああああああああぐっ!!」

揺れで悲鳴が響くものの、一番の衝撃である激突はその悲鳴すら許さなかった。投げ出されたように壁や床に叩きつけられる子達。衝撃から浸水発生、機材の破損、第一魚雷発射管破損。その他計器類も破損しその破片が散らばる。出血した血も混じり、あたりは赤色にもなっていた。

艦内ではエルヴィーラ副長が叫んでいた。

「被害報告！ 早急に私に伝えろ!!」

「艦首被害甚大!! 第一魚雷発射管破損！ 浸水発生！ 負傷者数名！ ……多くは軽傷です！」

「ゲルト!! げるとおおお!!」

「ゲルトルートが負傷! 出血してる!」

「マリアンネ! 急患だ!」

「黙って報告してろ! 今すぐに向かう!」

「どっちだよ!?!」

「艦首にダメコン急げ!! はやく!」

「お願い! ナタリアさんが!」

「アンネリース! 順番だ! 少し落ち着け!!」

「マルゴットもだ! 助けて!」

「くそっ、機関士が二名も……! 艦首には僕が向かう! ダメコン編成して! ついできて!」

「頼む、レオニー! 他数名艦首へ! 余った者はその二人の応急処置を! マリアン

ネ、あとは任せた! 後進一杯!!」

ズリリンズリリンとベルが鳴ると、EOT（エンジンオーダーテレグラフ）が後進一杯に向けられた。レオニーさんが工具箱を持って全力で艦首に向かうと、浸水箇所の応急処置を行う。穴を埋め、バルブを閉じたりしてダメコンを行う。そこにツエツイーリア……ブリギットさんが加わって一気にその場を持ちこたえさせようとかたをつけて

いた。

そして、患者たちは艦長室へと運び込まれる。艦長室は臨時で医療ベッドになるよう訓練していたのだ。マリアンネさんは今対応しているゲルトルートの他に、ナタリアさんとマルゴットさんの応急処置をする皆に対応した。忙しそうに三人の体と患部を見て回るマリアンネさん。しかし。

「忌々しいことに、どういつも軽傷だ！ この艦並みに悪運が強いのか知らんが、とてつもなく運がいい！ 止血すれば軽いめまい程度で済む！ 自身の血を見てな！」

「止血は!? 包帯とかは何処に！」

「向こうの棚にある！ 私のベッドだ！ 清潔感を保てよ、薄汚い手で触るようならその手をフランクフルトのようにパンパンに腫れさせてやるからな！」

いくつかの被害報告とは裏腹に、全員がほぼ軽傷だったのだ。幸いにも止血すれば大丈夫であり、ガーゼやテープでの応急処置となるようだった。

しかし、其処にまたも急患が現れた。

「お願い！ 通して！ 先に治療を！」

「応急処置とはいえ順番は守れと親に——!!」

悪態をつきながら振り返ったマリアンネの視界には、目を閉じ頭から出血するピアン力艦長と、それを抱きかかえて現れた航海長達艦橋組が映っていた。

☆☆☆

その恐ろしい光景を目の当たりにしたマリアンネさんは一瞬立ち尽くした。しかし、すぐにはつとすると声を上げた。

「艦長……！」

「艦長が先だ！　速く！」

今まで聞いたことのない声音で、マリアンネさんはビアンカ艦長に駆け寄ると、すぐさま駆けつけたゲルトルートが艦長室へと運んだ。ゲルトルートは自身の怪我よりビアンカ艦長のほうが先だと考えての行動であった。マリアンネは患部の頭を撫で、出血している部分を探す。私はと言うと、腰が抜けてしまって、その場で崩れ落ちてしまっていた。

「ハンナ……！」

「じ、ジークリンデさん……えへへ、だめだわ、立てそうにないの……」

「怪我!?　大丈夫なの……!?」

「大丈夫……怪我はしてないから。それよりも、それよりも……艦長が……」

「包帯はまだか!!　ナマケモノ並にとろくさい!!　とつともつてこい！」

ジークリンデさんに支えられて私は何とかその場に立つことができている。だが、肝心のビアンカ艦長の負傷に、皆がざわついた。嵐の中で引つ張つてきてくれた絶対的信頼を置ける人。それが今、倒れたのだから。

だからか、マリアンネさんは声を上げて呼んだ。それに応じて絶望する皆に割つて入るラツヘルさん。彼女は包帯を抱えてコチラまで持つてきてくれていた。

「持つてきたよ！ 包帯！」

そして、それを渡そうとした時だった。またも大きな揺れが艦内を襲った。

「うわあああつ！」

「ああああ!! 包帯がつ!!」

ボトボトボトと、地面に転がる包帯類。巻いていたそれらが開放され、コロコロと転がって広がっていく。ラツヘルさんは地面に転がる包帯を必死で拾おうとして、そして泣いた。

「うううううううう……わああああああ……!!」

「泣くな！ 文屋!!」

その泣き声をかき消すようにそう大喝すると、自身の白衣を思いつき破った。ビリビリビリと布の裂ける音が、全員の耳に届いた。誰もがその光景を疑っていた。何よりも大切にしてきた白衣を、マリアンネさんは何の躊躇もなくやぶつてみせたのだ。そし

て、それをビアンカ艦長にあてがえると、包帯のように巻いて、止血をしていた。

その手早い対応に皆が息を呑んでみていた。ビアンカ艦長の安否も気になるという理由もある。すると、いくつか応急手当をしながら彼女は私に聞いてきた。

「……艦長は何故こうなつた？」

「か、艦橋に波が……さらわれて、そ、装甲に、激突して、それで……」

「……強く打って気絶したか。当たりどころが悪ければ死んでいたが、おそらく脳震盪だ。じき目を覚ます」

そういう彼女は白衣の一部をあてがえてから少ししてそういった。その言葉に皆がふうつと安堵した。

その時、悲報のなかで朗報が舞い込んだ。

「急患だよ!! 助けられたんだ!! 私——」

下着姿のヴィクトリアさんが、肩で息をし、他の人達と一緒に男性を支えていた。そう、船員を連れてきたのだ。息をしているが、意識は失っており、応急処置は終えていた。人工呼吸や色んなことで彼を助けたのだろう。

だが、嬉しそうに來たヴィクトリアさんは、その惨状に笑顔を凍りつかせた。

「艦……長……?」

☆☆☆

それから二時間後。

浸水は停止、排水も完了し、治療も終わった。しかし、ビアンカ艦長は目覚めなかった。そのビアンカ艦長に集まるように全員が其処に居た。狭い艦内だから、後ろの方にいる人達は発令所に、調理室までいて、見えないだろうがビアンカ艦長を想っていた。私達艦橋要員も、ビアンカ艦長を見下ろしていた。

ヴィクトーリアさんがポツリと呟く。

「私の、せいだ……」

ビアンカ艦長のその姿を見て、ほろほろと涙をこぼしていた。

「私が、助けに行くなんて言ったから……!」

「違う!」

だからこそ。だからこそ、私は叫ぶ。それは違う。助けに行くなんて言ったから。それが間違いだ。

「貴女は助けることができた! 救えた!!」

「でも、艦長が、皆が……!」

「大丈夫」

すると、割って艦長室に入ってきたのは負傷したソリナさんだった。そこに、マルテさん、ゲルトルートさんが現れた。

「私も無事だしいゝ」

「余裕余裕。賭けに勝ったから、パンツも戻るし」

「……っ」

すんつと鼻をすすって、二人を見るヴィクトーリアさん。彼女たちの微笑みが、優しいものだった。だから、私は続けて言った。

「間違っていないよ。貴女はよくやった。よくやったよ……」

「航海長……」

そう言って、私はヴィクトーリアさんを抱きしめた。ぎゅつと抱きしめて、背を撫でた。母が良くしてくれたように。すると、艦橋要員の上級休憩室からうめき声が聞こえてきた。

「う……」

『!!』

全員が息を呑んで、彼を見る。まぶたが開き、その青い目が天井を眺めていた。私達が行くより先に、ヴィクトーリアさんが駆け寄り、私達もそこへと駆け寄った。

「……(ハハ)は」

よくわからない状況下に、彼はそう呟く。それにエルヴィーラ副長が声をかけた。

「ようこそ、U-101へ。ごきげんいかがかな?」

「……信じられない、生きてるだなんて……」

「……ほら」

段々、意識が覚醒していったのか、状況を飲み込んでいく。そして、私はヴィクトリアさんを前に押し出した。彼女が間違っていないかった、最大の証。父が成し得てきた、人命救助の成功だ。

「……君だね」

「……あ……」

「ありがとう」

その一言に、彼女の目からまた、大粒の涙が頬に伝った。すると、助けた実感が徐々に湧いてきたのか、顔をクシャクシャにし、涙は止まるところも知らないで、大声で泣いた。

「……うええ……うええええええええん!!」

「あわわわ——ぐええつ!?!」

勢いよく私の胸に飛び込んでくるヴィクトリアさん。思わず車に轢かれたカエルの鳴き声のようなくぐもった声を出してしまった。こ、このやろお……。なかなかやり

おる……。

そして、そのまま抱きしめて、頭を撫で続けたのだった。

「……おおおかいちよおおおお……うわああああん!!」

第十話：艦長の責任

少しして、泣きつかれたヴィクトリアさんを寝かせると、艦長室に私は赴いた。ビアンカ艦長は未だに眠っていて、少し心配だったのだ。凄い音がしたし。しかし、そんな眠り姫なビアンカ艦長の直ぐ側にはマリアンネさんがいて、じつとその顔を見ていた。

私はその隣に座る。しかし、何もお咎めもない珍しさに少し戸惑いつつ、けれどビアンカ艦長への心配が勝ってその寝顔を眺め続けた。すると、マリアンネさんはポツリと呟いた。

「……航海長には話してやっていいな」

「え……？」

いいから黙って聞いてくれ。そう言って彼女は話し始めた。ビアンカ艦長の頭を撫で、心配するようにして。少しだけ、羨ましかった。

「私は落第生だったよ。町中のやぶ医者とそうかわらんくらい拙い治療しかできない落ちこぼれだ」

そういう彼女はじつと息をする度上下する胸を見て、時折熱がないかおでこに手をやる。そうしながら、彼女は話を続けた。

「だが、この馬鹿はあろうことか私を救ったんだ。五年前の、丁度適性検査のときだ。もう乗ることはかなわんだらう船に、副長と共に私をも説得してまでな。まるで船のサルベージだ。沈んだ私を拾ってくれた」

「あのときの……」

何かに例える独特な喋り方のゲルトラウデさんだが、自分を卑下するのはなかなか無かった。珍しいなんてものではなく、おそらくそんな喋り方は初めて聞いた。

そして、彼女の言う五年前。丁度副長や艦長がメモを持っていた時の話だった。

その話には、他にも数人はこの艦に乗船させてもらえたと付け加えられる。その乗員たちをメモしたノートが、あの手帳だったのだ。

「だから、この馬鹿者には払いきれん恩がある。それこそあのゲルトルートと同じ借金王だ」

「借金はしてないさ。色々と支払ったけど」

そこに、ベッドに戻る際に通りがかった怪我人のゲルトルートが軽口を叩いた。噂をすれば影が差す。なるほど、当の本人が来るとは。

「傷口が開く、まずはその口を縫い合わせてやろうか？」

「はは、ヤブ医者だ」

そう笑って逃げるようにさるゲルトルートに、しかしマリアンネは笑っていた。そして、マリアンネさんはもう遅い、寝ろ。と言うと私の背を押したのだった。

☆☆☆

翌日、十一日目。遭難八日目。

目覚めとともに艦長室に行くと、エルヴィーラ副長とジークリンデさん、レオニーさんが其処に居た。ビアンカ艦長が目を覚ました……！そう喜んで駆け寄ろうとしたのだが、しかし、その場の雰囲気ですこし喜ばしいものではなかった。

「私の指示が、まずかったんだ」

「艦長……？」

そして、その言葉に私は怯んだ。

「副長……艦長は、貴女がふさわしいわ。私じゃ、皆を守れない」

「艦長……！ な、何を」

エルヴィーラ副長の戸惑いをよそに、ビアンカ艦長は自身の白い艦長帽をエルヴィーラ副長に押し付ける。その表情は苦々しいもので、後悔が募っていた。

「私は、艦長なんかじゃない……ただの、愚か者だ」

その言葉を最後に、私達は追い出された。ビアンカ艦長はおそらく……いや、確実に昨日の救助実行に責任を感じて、そうしたのでだろう。私達は反論する猶予すら与えられなかった。

ビアンカ艦長の判断は間違いじゃない。そう言いたかったのに、とつさには言えなかった。ビアンカ艦長があんなに怯んでいるなんて、正直、ショックだったのだ。

ビアンカ艦長が目覚めて、昼食時になっても、ビアンカ艦長は顔を出さなかった。食事を摂る私達は、いつもはそこに居た席を見て、何とも言えない雰囲気を出してしまっていた。寂しいし、驚いたし、嫌だし、でも気持ちもわからなくもなくて……。

その場にあつた料理は、ビアンカ艦長の分を残して平らげていた。箸が進まずとも胃に収めねば、鬼と疲労がやってくる。でも、やっぱり、食欲のない食事は少し気分が悪かった。

その残された料理を見て私は呟いた。

「艦長……」

「食事を取らないのね……ローゼマリーがまた怒るわ……」

ジークリンデさんはそう言うが、ビアンカ艦長の分をトレーにまとめていた。後で持っていくつもりなのだろう。優しい人だ。その言葉にレオニーさんとエルヴィーラ

副長は難しい顔をした。

「そうはいつても、シヨックだろうよ。三人も怪我人が出たんだ」

「だが、三人で済んで良かったよ。最悪の場合、全員が一緒に海の底だった」

「でも、艦長の判断は間違いないじゃない……」

私はそう言つて、ジークリンデさんに私が持つていくわと伝えた。ありがとう、ジークリンデさん。だけど、とエルヴィーラ副長は続ける。

「そうとは限らない……でも——少なくとも、ここに居る皆は助けたいって行動はしただらうね」

「……」

その言葉に、私は背を押された。エルヴィーラ副長は同時に艦長帽を差し出していたのだ。それを受け取ると、ギョツと目をつむる。わかりました。私が……。私が、ピアンカ艦長にちゃんと伝えます。

そして、艦長室に到着するとカーテンを開いた。

「艦長、失礼します」

「……」

その言葉に、反応はない。彼女はもう、艦長ではないから……。か。私はここで、一瞬だけ一友人に戻ることにした。

「ビアンカさん……ちやんとご飯は食べないと」

「……其処に置いといて……」

「だめです」

「……」

「私にいつか言いましたよね？ 自身の体調管理をしつかりするのも、明日明後日の活

動に関わる重要なことって」

「……」

何も言わないビアンカさんに、私は航海長に戻る。ちやんと、向き合わなきやだめなもの。

「艦長……」

「艦長じゃないわ。もう出てって」

「艦長です。出ていきません」

「出てってよ……！」

「ビアンカ！」

「……」

私は強く、その名前を呼んだ。強く強く、海洋準備学校で最初にできた友達の名前を。そして、私は自身の思いをすべてぶつける。正しくないかもしれない。でも、間違い

じゃない……！

「私は、貴女の判断が間違ってたなんて一ミリも思わない」

「……」

「当事者である、皆がそう思ってる。怪我をした三人も、手当したマリアンネさんも！」

「……でも、結果として、負傷者が出たわ……私も、その三人も。最悪、皆死んでたかもしれない……だから、私は、責任を持って……」

「責任を持ってやめたなんて言わないでくださいね……」

「え……」

「それは、逃げです。責任を本当に持っているなら、失う覚悟だとしてたなら、それこそ陸地に降りるまで責任を持って皆の命を預からなきゃいけない！ 投げ出さないでください、艦長！ 失う恐怖も、背負って私達は艦橋要員になったんでしよう!？」

色んな恐怖も分かち合って、色んな出来事も分かち合った。それはビアンカ艦長一人が背負う恐怖ではない。私達もまた、背負う恐怖だ。

ビアンカ艦長は眉をひそめ、グツと悲しい顔をする。そんな表情を見たいわけじゃない……！

「……それでも——」

「それに、ヴィクトーリアさんは自身の過去に決着をつけられました！ そして、救えた

人も居た！」

「……っ！」

「彼は無事です！ 助けたんですよ、私達が！」

「……それでも、私の判断はきつと、皆にとつても、助けた人にとつても迷惑だった……
！」

「そうじゃないです！ 私達は、家族なんです！ 海の仲間も、家族なんです！ 少
しくらしいの迷惑が、余計な世話が何だつてんですか!!」

「っー！」

はあ、はあ、と息を整える私。いつの間にか、涙も出ていた。こんなに感情をむき出
しにして叫んだのは、いつぶりだっただろうか。まるで子供のようだった。

「……私は、私達は、待つています。艦長が不在の艦橋なんて、寂しいですよ」

「……」

「ここに、ご飯を置いておきますね……」

「……」

そうして、その場を離れた私は涙を拭った。それだけではないんだ。ピアンカ艦長が
戻ったとき、すべてが丸く収まっているように、私ももつと頑張らないと……。

発令所に入って、はしごを登る。艦橋はすでに誰かいて、私もその見張りに参加した。

その雨が何処か優しく、頬を雫が伝った。

そして、数時間後。私は発令所に戻ると、うーんと唸るエルヴィーラ副長を見つけた。

「副長……」

「……さて、どうしようか」

エルヴィーラ副長のその言葉に、肩をすくめてレオニーさんが言う。

「嵐も止み始めたけれど、あの船もレーダーが故障したらしくてね。そろそろ晴れてくると嬉しいんだが」

「……とりあえず、どうしましょうか……」

ジークリンデさんがそう言うと、うーん。と皆の唸りが重なった。とにかく天候が晴れ、船同士が隣接できるとレーダーの修復やら航路が作れるのだが……。

そう、私達が悩んでいる時。

足音が響いた。

そして、柔らかい声が、その場を包んだ。

「大丈夫だ」

ネクタイが歪んだ制服に外套を纏い、白い艦長帽を頭に乗つけた姿は……私達がずっと待ち望んでいた姿だった。私達は声を揃えて、その名を呼んだ。

「艦長！」

すると、ビアンカ艦長はフツと柔らかい笑みを浮かべると、帽子を深くかぶり直し、こう言い放った。

「少し、休ませてもらった。これより本艦の指揮権は私に戻るわ。異論のあるものは居るかしら!？」

「……ないでしょ。そんなの……」

「ジークの言う通り、無いよ」

「このあとどうしましょうか、艦長?」

口々に言う皆の顔を、それぞれ見るビアンカ艦長。そして、私と目と目が合う。じつと見つめる私は、信じていた言葉を口にした。

「おかえり、艦長。指揮をお願いします」

「ええ。ただいま」

その後、夜。

私達は少し休み、食事をし終えたあと、ビアンカ艦長は船員全員に謝りに行った。中でもナタリアさんとメルツエーデスさんは警戒心が残っていたのだけれど、ビアンカ艦

長の謝る姿を見て、とつさに顔を上げてとわたわたしていたのが少しおかしかった。ああ、言っていたのはこのことなのだ。ここには家族のような暖かさがあつたのだ。

それから少しして、私が艦橋に上がろうとしていると、また上から滑るようにヴィクトーリアさんが落ちてきた。よろよろとしているその体を、私は反射的に支える。

「つて！ ど、どうしたの？」

「はあ、はあ、こ、航海長、艦長は!？」

「ここに居るわ。どうかしたの？」

「星です！ 星が見えました！」

「何!？」

私達は急いで梯子を駆け上った。すると、そこには……。

「……は、はは……」

いつか見た、満天の星空だった。

雲が少し残ってはいるものの、その星々の輝きは私の目に爛々と写り込んだ。しかし、雨だろうか。

「あれ……あ……」

雨じゃない。視界がぼやけるのも、頬を流れるのも、私の目から溢れた感情の塊だ。

私は拭えど拭いきれないそれに、次第に抵抗しなくなつた。

「うああああ……ああああああ!!」

それから少し、ビアンカ艦長に抱きとめてもらいながら、涙を流した。その星空には流れ星が流れていた。

その後、私は天測を行い、現在の位置を得た。色んな所をぐるぐるしたのか、海流に逆らったのか乗ったのかはわからないが、よくわからない位置に私達は存在していた。ここから学園に戻ることを考えたが、タンカー船の曳航を考慮する必要があった。そして、できれば補給も済ませたいと考えていたビアンカ艦長が一番近く、ビアンカ艦長が信頼できる港を指さしたのであった。

「……ロリアン、ですか?」

「そう。フランスはロリアン。私の——故郷だ」

第十一話：ロリアンにてピンチ？

翌日、十二日目。遭難九日目。

この日は晴天で、波は穏やかだった。船にUーボートを隣接させ、ロープを下ろしてもらおう。一応、念のためにレーダーの復旧が行われることとなり、船員であった彼を返すのと同時に、修理の手伝いをするためレオニーさんとマルゴットさんが向こうに移る。

それから数時間後、努力の甲斐あってかレーダーが復旧し、現在位置は正確に割り出された。天測の結果とほぼ一致していて、私は鼻の下を人差し指でこすった。ふふん。なんとたつて、航海長ですもの。

そこから航路をとり、舵のきかないタンカー船の曳航を行った。といつても、死んだのは舵だけでスクリューは生きているから、舵取り程度で済んだし、それほど難しくはなかった。まあ、全速で引つ張つて、頑張つて角度を変えていたけれどね……。

その上、タンカー船の行き先もフランスだったことから、船長には了承を得て航路を組んだ私達は晴れて陸地へと航路を取ったのだった。

☆☆☆

それから、およそ三日後。

十五日目、遭難十二日目。

ビアンカ艦長と共に、私は艦橋にいた。朝の静かな空気が肺いっぱい溜まって、吐き出される。生きてるって素晴らしい。凄くそれを実感する。

予定通りならそろそろ陸地が見えてくる頃合いだった。あたりを見渡すと、まだ見つけられそうにはない。

「まだですかね」

「……まあ、もうちよつとかかるでしょう。ハンナはせつかちさんだから」

「な、ち、違いますよー!」

「ふふふ、どうだか」

クスクス笑うビアンカ艦長にもうつと頬を膨らませて怒る私。こういうやり取りができるのも、もうそろそろ港につくという安心感からだ。二人してそうやって遊んでいると、普段からは聞き慣れない音がした。それは、高い音域で、クークーという鳴き声。私達は顔を合わせると、音のなる方へと顔を向けた。

「艦長、あれ……!」

「ええ……かもめだわ。港が近いわよ……!」

そう言つて、私達は抱きしめあつた。朝の当直の子達が来たとき、二人して抱き合つていたものだから呆れた目で見られたのは置いておいて、だ。

数十分後、カランカランという鐘の音が響く。その音は、灯台のあるロリアンの港に近づいたこと、そして船が来たことを表す心地よい鐘声だった。

灯台は光を灯してはいなかったが、その存在は安らぎを与えてくれる。その灯台を見て、ビアンカ艦長はポツリと呟いた

「おお、ロリアンの灯火よ……ね……」

「なんですか、艦長？」

「ロリアンに居た父の友人が、帰港するたびにそう呟いてるんだつて。あの灯台の光が、私達も、彼らにとつても、すべてのロリアンの船乗りにとつても希望の灯火だったのでしょ」

「へえ……良いですね、それ」

ビアンカ艦長の父のことを知っている私は、その話が父との良い思い出のひとつなのだと思ふと、自然と微笑む。そんな私に、ビアンカ艦長も綺麗な微笑みを見せた。

その時である。拡声器で音量をあげ、後ろの船にまで届かせる声が聞こえてきた。

『その諸君、とまりなさいーい！ こちらはブルーマーメイド！ 応答に応じなさいーい！』

その声の主は、スキッパーと呼ばれるモーターボートでコチラに高速接近する。そう、本職ブルーマーメイドさんであった。

私達は私達以外の、そのブルーマーメイドの方に出会えたことで、ふいいと息を漏らして安堵した。やつと嵐をのり越えたような、そんな安堵感だった。

「あー……拡声器ってありましたか？」

「何処に置いたか忘れてしまったわ。とりあえず、曳航ロープ切断、タンカー船の航路上から離れてから機関停止するわ」

「了解です」

「あと、たぶん発令所にあるから、いつて、拡声器取ってきて」

「わかりました」

そう言うのと私は発令所へと向かい、いつくかのガラクタから拡声器を取り出す。このガラクタ類も、爆雷を受けたときの被害物だったり、揺れや衝突時の破片だったりする。それらを見ると、一ヶ月も前に起きた出来事のように感じられる。少しだけその破片たちを眺めた後、それを持ってまたブリッジへと登る。

「はい、艦長」

「ん、ありがとうハンナ」

手渡しすると、頭をポンポンと短く撫でられた。私は恥ずかしさから、「ちよつと、子

供じゃないんですけど！」とビアンカ艦長に叱りつけてしまう。でも、ビアンカ艦長はそれに微笑むのだった。いや、まあ、私もその手を退けようとしていないから、それを分かって微笑んだのだろうけれど。

そして、その手をどけると、ビアンカ艦長は拡声器を使用する。

『こちらU—101。貴官の指示通り、近場にて一時停止しよう。ただし、背後のタンカー船は操舵不能であり、本艦が曳航している。そのため、一旦曳航ロープの切り離し等を行う時間が欲しい。また、我が艦と後続のタンカー船の入港許可を求む』

すると、スキップパーに乗りながらその女性は、少し考えるようにしてから声に出した。
『あー……そう？　ならいいや！　少し待ってて』

「軽いー」

思わず突っ込んでしまう私。これがヤーパンツツコミか……。昨晚、慰め会でレオニーさんとジークリンデさんと、その他大勢でヤーパンのマンザイを見たからだろう。手の動きが伝染ってしまっていた。

その手をゆつくりと元の位置に戻す私。幸いにもビアンカ艦長には見られていない。ホット一息をついてから、そのスキップパーの女性を眺めるのだった。

しかし、その軽さにビアンカ艦長もやる気なさげに言った。

「まあ、U—ボート一隻に対してスキップパー一つのみ出ていることから察せられるわよ」

「ゆるゆるですね……」

「逆よ。一人で守れるほど、あの人は強いのか、もしくは私達が下に見られているか……一番有りえるのは、すでに私達がここへ帰還することを読んでいたか、ね」

「もしそうだったら、すごいですね。流石はブルーマーメイドです」

「それならもつと速くに助けに来て話よ」

「あ、あはは……」

ビアンカ艦長の愚痴に苦笑する私。まったくもってそのとおりで……曳航って案外、燃料をバカ食いするものだったからね……。

とりあえず、あのブルーマーメイドさんが呼んだのか、他にもタンカー船を曳航してくれそうな船が近づいて来た。私達は後ろの船と切り離すと、航路のじやまにならないようにはける。すると、私達の方にスキツパーに乗ったブルーマーメイドさんが近寄ってきた。

「はい、それじゃあ、あなた達は私が隣に付くから行きましようねって、ええ!? 本当に女の子じゃん!」

どうやら潜水艦であるからか、やはり男子高生を想像していたようだ。驚く彼女をよそに、しかしビアンカ艦長は冷静に自己紹介を始めた。なんだかんだ言っつて、そう言われるのは学校でもう慣れてしまっているのだ。悪い意味で、だったけれどね。

「そうです。私がU—101艦長のピアンカ・フォークラーです」

「同じく、U—101航海長のハンナ・デーニッツです！」

「こりや、丁寧にありがとう！ ブルーマーメイドのフランソワーズ・オージェ。ようこそロリアンへ！ 歓迎するわ！」

「よろしくおねがいします」

明るい彼女の笑みを見て、私達もほほ笑みを浮かべる。非常に心地の良い歓迎であった。それから接岸するまで、フランソワーズさんから色々質問を受けて、色んな話をしていた。これまでの嵐や戦闘、その前の日常生活など。ドイツに来たら、Takoya k iのお店があるよとか。結構楽しいお話ができて、久しぶりに波風が気持ちよく感じられた。

彼女はその間にもスキップパーで先導し、私達は棧橋に近づいていた。

すこしして、フランソワーズさんが言った。

「それじゃあ一旦そこに止めるから、その棧橋で停泊してー！」

「わかりました。ハンナ、艦橋要員を甲板に呼んで。服装は制服で」

そういうピアンカ艦長はキリツとしていた。制服で甲板に出るということは、陸地に降りるのだから身だしなみはちゃんとしよう、ということなのだろう。そういうことなんだらうけれど、さあ。

私はビアンカ艦長に一步詰めるとネクタイに手をやった。

「艦長も、こういうときなんだからしつかりネクタイ結んでください！」

「うええ……苦しい、苦しいよハンナ……」

「自業自得ですよ！ もう」

キューツと締める私にぐええと苦悶するビアンカ艦長。そう言いながらも整えると、苦笑しながらビアンカ艦長はありがとうと言うのだった。ま、まあ、このぐらいにしておいてやりますよ。うん。

すると続々と艦橋に艦橋要員のメンバーが集ってきた。レオニーさん、エルヴィーラさん、ジークリンデさんだ。

「艦長、来たよ」

「私も来ました。船員全員もちやんと制服です」

「……やつと、やつと陸地に足がつく……」

「ジーク、なっさけないなあ？」

「……レオニーは昨晚わんわん泣いたくせに」

ニヤつくレオニーさんに、ジークリンデさんはそう反撃した。なつと声が漏れると、レオニーさんは少し顔を赤らめていた。そうなのだ。レオニーさんはやつと着くと聞いたとき、泣いてしまったのだ。だから慰め会を行っていたのだよ。

そして狼狽えるレオニーさん。機械等に関しては天才的なのに……馬鹿と天才はなんとやら、だ。

「そそそんなことないよ！」

「それなら、私が胸を貸したというのに、お嬢様」

すると、久々のイケメンオーラをまとったエルヴィーラさんが、レオニーさんに詰め寄った。両手を包むように握られ、その目を合わせられないレオニーさんがスツと目をそらした

「へあ……や、べつ、べつにいい、よ」

「……乙女」

「初心」

「うるさいなー！」

「ふふふ……さ、おしゃべりは一旦やめて。敬礼！」

そう言うのと、私達はその接岸先に居る方々に敬礼をした。すると、棧橋に元々居た人以外にも、倉庫の中に居た人や他の作業中の方など、色んな人達が集まってくる。その場に多く見えたのはツナギの格好をした整備士さんである。他には正装に身を包んだ船関係の方々、果ては買物に出かけていたであろうおじいさんおばあさんまで、そこに居た。

私とレオニーさんは口をぽかーんと開きながらその光景を目の当たりにした。

「Uーボートだ！」

「Uーボート!? 幽霊船じゃないだろうな!？」

「Uーボート!？」

「ああ、乗っているのは誰だ!？」

「……ありやあ、ビアンカちゃんじゃないか!？」

「ああ、あれあビアンカちゃんだ!!」

「あの艦長の娘さんかえ？」

「ふお、フオーグラー! フオーグラーさん!!」

「孫さんが、Uーボートで、帰ってきたぞお!!」

駆け寄ってくる人たちは皆、口々にビアンカ艦長の名を呼んでいた。ビアンカ艦長の人気は大きいものである。私達はその声援に驚いて、ビアンカ艦長を見る。ビアンカ艦長の故郷であるロリアンではあるが、ここまで歓迎してくれるとは……ビアンカ艦長、一体何者なのだろうか。

艦長はと言うと、接岸が近くなってきたので機関停止を命じて、少し照れくさそうに敬礼を続けた。

「艦長、有名ですね」

「……まあ、父がUーボート乗りだったから」

「故郷であつても、これだけ有名つてことは、凄いいお父さんなんですな」

「……ふふ、自慢の父よ」

「よし、それじゃあ私達がロープを掛けるよ。甲板に行こう、ジーク」

「……わかつたわ」

Uーボートが接岸すると、レオニーさんがロープを投げた。すると、すぐ近くに居た整備士の格好をしたおじさんが、素早いロープワークを披露する。そして、他に來ていた方が簡易的な階段を持つてくると、早々にそれを甲板へと合わせた。それも、Uーボートの甲板から丁度良い高さで。さすがはUーボートのあつた街だ。

それを見たエルヴィーラ副長がフツと微笑んだ。

「迅速なお迎えだ」

「あれは慣れてるっていうのよ。総員下艦！ 久しぶりの陸地よ、しっかりと踏みしめなさい」

『ヤー！』

機関停止とともに、甲板へと乗組員の皆が出てきます。それを各学科の委員長や副委員長達がまとめると、全員がその場に並んだ。そして順にその階段を登って、その地に皆は足をつけたのだつた。

地に足をつけたとき、皆の顔には安堵と喜びが映っていた。この長い遭難生活で、やっと得られた陸地の安心感、太陽の輝き、人々の声。それらを一身に浴びたことで一気に感情も出たのだろう。何人かは泣いてしまっていた。

そして、乗組員たちの下艦が完了すると、私達艦橋要員のメンバーも降り始めた。私達は最後に、この艦を降りる。艦長が微笑んで言った。

「さて、私達も降りるわよ」

「やっと、ですな」

ビアンカ艦長と、ふふつと笑い合う。その一段一段を、私達は一緒に登っていった。そして最後の一段で、ビアンカ艦長と私の足は止まった。二人で顔を見合わせる。他の乗組員も私達を見ていた。

「……せーのっ」

そして、最後の二名が陸に下艦した。

長い嵐にもみくちやにされた。

色んな居座古座があつた。

それをも乗り越えて私達はやっと、陸地についたのだった。

「……いふふ」

「……あはは」

訳も分からず、二人で笑う。そうしてやつとの思いでたどり着いて、簡単に地面を踏める。それがなんだかおかしくてさ。ものすごく短い期間で、いくつ嵐を越えたのやら……。それが、報われた瞬間だった。

それから少し笑い疲れるまで笑うと、私達の下艦を、一人のおばあさんが待つていたのに気づいた。久方ぶりにUーボートを迎え入れる人々が割つて道を作つている。その先にいたおばあさんは、コチラをニコニコと眺めていた。

「と、お祖母様」

「え？」

するとビアンカ艦長は、祖母に気づくとそつちへ駆け寄つていく。その顔は嬉しそうで、まるで長いこと帰りを待つていた犬のようであった。そう、そのおばあさんはビアンカ艦長のおばあさまだったのだ。

「ビアンカ……ふふ、大きくなって、まあ」

「……えつと。ただい、ま……」

「……おかえりなさい。宿と食事は三日間くらいなら用意しておいたわよ」

「……！ お祖母様……！」

「え？ え？ どういうことですか？」

「ふふふ……今日から少し、ゆつくり休みなさいということよ、お嬢ちゃん」

「どういう話なのか理解できない私に、おばあさまは優しい目で見つめるとそうだった。そう、つまりは今晩の宿はUーボートではないということである。私はその言葉に笑みが漏れ出て、無意識にガッツポーズをとっていた。

「……！　ありがとうございます！」

「ありがとう、お祖母様！」

「ほほほほ」

ビアンカ艦長は再会の感動と準備の感謝に、祖母をおもいつきり抱きしめた。ぎゅーっと抱きしめるビアンカ艦長にはどこか犬のしっぽが見えた気がする。ブンブン振って、本当に嬉しそうなビアンカ艦長だった。ただまあ、少し、うん……その嬉しそうな抱きしめ方は、羨ましいかも。

そして、私はその光景から皆の方へと振り返る。すると、エルヴィーラ副長がもうすでに皆を整列させていた。それに気づいたビアンカ艦長は、んんつと咳払いすると帽子を少し深くかぶる。あ、恥ずかしがってるんですね、ビアンカ艦長。

皆もそれをわかつているのかニコニコと優しい目でビアンカ艦長を見ていたのだった。

「さて、全員ならんだわね」

「はい、総勢28名。全員無事です」

その確認にビアンカ艦長は「よろしい、副長」と満面の笑みでいうと、くるりと振り返って皆と向き合う。一人ひとりの表情には笑顔が浮かんではいたものの、どこか疲労の色がやはり伴っていた。だからか、ビアンカ艦長は労いと共にこう言った。

「私からあなた達へ言うことがある。この数日間本当によく頑張ってくれたわ！でも、今はまだ学園へ帰還を果たしていない！ おおよそ二日か三日後に、我々はここを立ち、学園へもどる！」

今後の日程をここで話すと、更に予定に狂いなく遂行できるようしなければならぬ、とビアンカ艦長は釘を差した。

しかし、彼女は口角をニヤリと吊り上げた。ビアンカ艦長お得意の、落として上げるやり方だった。

「だが、せっかくの陸地よ。今日はふつつつかふかのベッドで横になって、ゆつくり休んで頂戴！ ここに12:30集合。それまで節度を持ってくれていると信じるから、自由行動の時間とするわ」

『やったー!!』

それが、全員の心の底からの絶叫であった。ナタリアさんなんかもう何処かに行きたそうだし、エーリカさんなんて準備運動を始めていた。

そんな彼女たちの歓喜の叫びにビアンカ艦長も満足したのか、ニツコリと微笑んで全

員にこういったのだった。

「……以上、解散！」

☆☆☆

自由解散となり、先程あげていたエーリカさんは走り込です！と意気揚々に飛び出していくと、ウズウズしていたナタリアさんもよつしやあ！と叫んでついでいった。それにつづいてカメルツエーデスさんとアンネリースさん、クラウディアさんらが固まって街の方へと向かっていく。……もう、あの三人……四人は、仲良く生活できていた。

そうして、皆散り散りになる中、ピアンカ艦長は自身の祖母に向き直る。

「さて、と。お祖母様」

「なにかねえ」

「あのUーボート、実はいくつかやられてて」

「みりやわかるよお、そのくらいね」

「応急修理程度でいいから、とにかく羅針盤とレーダー直してくれない？」

「この通り、と頭を下げるピアンカ艦長。それにしかし、ピアンカ艦長の祖母はフーッと困った顔をしていた。」

「……安くはするけど、ただにはできないからね?」

「ローゼマリー! 会計のお話だ!」

すると、艦長は会計担当のローゼマリーさんを呼び出した。意気揚々と街へ向かおうとしていたローゼマリーさんは、ムスツとした顔でビアンカ艦長の元へと踵を返す。

「なんですか艦長。予算というのはいつもカツカツなんですよ? 5日分程度の食料ギリギリにしたら、皆がお金を持ってここらを歩いていたんですがねってくらいにね」

「でもその御蔭で缶詰生活だったけど、無事じゃない? それに、もし余裕があっても、あなたなら貯めるでしょう?」

「……そ、そうですね……で、本題はなんですか?」

私はそれを尻目に、街へと繰り出そうと動き出す。エルヴィーラ副長は居なくて良いのかな?と少し心配はしたが、まあ、二人はそのまま話を始めたので良いのでしよう。たぶん。

そう結論を出した私も、疲れを癒やすべく街へと繰り出そうとした。

しかし、足は進まず片腕も動かせない。何事かと思い、その、後ろに若干引つ張られる自身の手の先をしてみる。その手をレオニーさんががっしりと掴んでいたのだ。何してんの、この人は。

「ほら、ハニー、見てみて」

「わわわっ、なんですかレオニーさん」

すると、レオニーさんは私の手を引つ張つていく。引かれるまま、建物の影に連れ込まれると、レオニーさんは其処から先程の二人の様子を伺い始めた。そこにはジークリンドエさんもいて、同じ様にこつそりと様子を眺めている。どうやら彼女も気になつていたらしい。

そしてニヤニヤと少し趣味の悪そうな笑みを浮かべながらレオニーさんは言った。

「会計のお話だよ。ローゼマリーどうするのかな」

「……どちらにせよ、艦長の言っているものが直らないとまた遭難よ」

「ですよね。どうするんだろう」

なんだかんだ言いながらも、私も一緒になつて顔を出した。まるで母の様子を窺う三姉妹である。そうとも知らずにビアンカ艦長たちは話を進めていた。

そして、ビアンカ艦長は色々必要な分などを読み上げた後、その紙をローゼマリーさんに渡す。受け取つたローゼマリーさんは、それを見た瞬間から営業スマイルへと表情を変貌させた。すごい、彼女の表情を見ただけで金額が多いことがわかるわ。

「で、これがしめての見積書だよ」

「……もう少しやす——」

「これ以上はまけられないよお」

優しい微笑みで、おばあさまは言う。ニコニコと。対するローゼマリーさんも、普段よりも少し声が高めで、優しさを含めた声音をだして話していた。私達三人はその変貌っぷりにちよつとゾツとする。

「優しいばあさま、そこを何とか……これでもギリギリの生活をしてて」

「こつちの皆も生活がかかっているからねえ」

「艦長……ううん、孫さんだつて一緒に乗るし、このまま修理せず出たら」

「脅しもきかないよ。これでも安く済ませたのだから、ダメなものはダメ」

しかし、笑顔でピシヤリと言い放つおばあさまに、ローゼマリーさんは笑顔のまま固まった。おばあさまのそれは、手強いというより、手慣れている感じがする。流石は港に住む女性だ……。

そして、軽くあしらわれるローゼマリーさんはしかし、食い下がらずなおもいくつか持ちかけては玉碎していた。値切り交渉ってしたことあるんだ……。

すると、艦長は苦笑して呟いた。

「……私のお祖母様は、そういう所は頑固だから」

「ビアンカ、そこはしっかりしている、と言いなさい」

「はあい」

「……」

人差し指を立てて、そう修正するおばあさま。それに答えるピアンカ艦長……いや、ピアンカさんの姿は、まさにお祖母ちゃんに怒られる孫そのままであった。

そして今度は、おばあさまをじつと見つめるローゼマリーさん。それにふうつとため息を付いたおばあさまはこう続けた。

「黙るなら、また遭難することねえ。頑張りなさいな、ピアンカ」

「……うううううううう」

その優しくも冷徹に切り捨てる言葉に、唸り声を上げるローゼマリーさん。半泣きである。彼女は、そのままその請求書を受け取って、とても、とても、とてもしたく無さそうではあったが、そこにサインをしていた。

「おいおい、半泣きだよローゼマリーが」

「おばあさまも人が悪いわね……泣き脅しも無意味って言ったわよ、今」

「請求書を手にとったね……サインもしてる」

「大変だなあ、ローゼマリーも」

他人事のようにそういう私達は、苦笑してその一部始終を見ていたのだった。お疲れ様です、ローゼマリーさん。いつもありがとう。

そんな風に皆で劳いの言葉をかけていると、ピアンカ艦長はふと思い出したように言った。

「あ、そうだローゼマリーさん」

「むいむい……何。今度は何！」

「いや……あはは……燃料の補給もいりそうで、さ……う？」

「うわああああああああああああん!! すっからかんだあああああああ!!」

絶叫とともに、ローゼマリーさんは膝から崩れ落ちた。ガチ泣きである。

「あつちやあ、ないちやつた！」

「……とりあえず、迎えに行きましようか」

「……そうね……」

やれやれと首を振りながら肩をすくめるジークリンデさん。とても可愛そうに思えてきたのだろう。その気持は良くわかります。そう思いながら、私達はその場に駆け寄る。その後、契約を済ませたローゼマリーさんを私達はパフェなどをごちそうして元気づけるのであった。

ムスツとしながら食べてるローゼマリーさんは、いつもの冷酷な守銭奴とは違って、なぜだかどこか可愛らしかった。

それから少し経って、お昼時。言っていた宿の一階の食堂に全員が集まる。すると、

用意されたきれいな長机に、個別の椅子、そして用意されたグラスと前菜に全員で驚いた。予想以上に準備が整っており、まるで来ることが分かっていたかのような準備の良さをしていた。さすがはブルーマーメイド、そこまで読んでいたのかな？

そして、それぞれが席へと座るとピアンカ艦長が前方にある小さなステージに立った。

「さて……皆、お疲れ様。午後からも自由行動の時間をとるけれど、とりあえず艦内の服やその他荷物を宿へ持つていくこと。午後から修理が行われるから、恥ずかしいものはちゃんと持つてくのよ」

「はあん！ ヤーパンで手に入れた薄い本が……！ もれ、とつとまとめないときまじやばいっしょJK」

「うすいほん？ じえーけー？」

「し、見てはいけないよ」

「そういう反応はすげえ傷つくでござる……」

喘ぐミヒヤエラさんは、ナターシャさんとソリナさんの反応に涙を流していた。うすいほんとはなんだろう。艦内で一番ヤーパンに詳しいのはミヒヤエラさんで、そういったものを教えてくれる事がある。おそらくそのうすいほんという言葉のイントネーションから察するに、ヤーパンの言葉であることは間違いないだろう。少し気になった

のでまたあとで訊いてみようと思つた。

そして、ビアンカ艦長は続ける。

「さて、それじゃあ料理も並んだことだし……」

「すまない。その前に私達から一言言わせてもらえないか？」

そう、ビアンカ艦長が乾杯のためにグラスを手に持ったときだった。ふらつとビアンカ艦長に男の人が近づいてくる。その男の人は、ビアンカ艦長とは違う白い帽子に、紺色の制服を着た人であつた。一目で船乗りかつ、おそらく船長なのだろうことを理解できるときの風貌の男性に、艦長も驚いていた。

「……」

「私はタンカー船セントラル号の船長、ブライアン・マックリンだ。この場の飯をおごらせてもらうよ。それと、燃料もね」

「は、うそ!？」

ガタツと席を立つたのはローゼマリーさんだった。彼女はしかし顔を赤らめ、慌てて本当ですか？と言ひ直した。おそらく生意気な態度で驚いたことを恥じたのだろう。どんなときも礼儀が大切だということを、ローゼマリーさんは一番わかつていたのだから。

そして、彼はその言葉にふつと微笑むと言つた。

「泣いてる女性を助けるのも、男の仕事さ」

『おお〜』

その一言に全員が歓声を上げる。感心した皆の声に、ブライアン船長は少し照れくさそうにしていた。よく考えると、女性だらけの今の食堂に居るわけだし、そりやそういう言葉に歓声は上がるよね。

「感心されると少し恥ずかしいが……感謝の気持ちだ。受け取って欲しい」

「こちらこそ、感謝します、ブライアン船長」

ブライアン船長はそう言つて、ブライアン船長と握手を交わした。其処に居た全員も口々にありがとうと礼を済ませる。それを確認し終えたブライアン船長は、咳払いをひとつし、その場を静める。そして、ブライアン船長に視線を向け合図を出すと、ブライアン船長は私達全員に向かってこう言つた。

「……では、ここに居る人魚の卵たち、私達を救つてくれてありがとう。感謝する」

ブライアン船長のお礼の言葉は全員にしっかりと届いたのか、全ての席から拍手が沸き起こつた。そしてそれが止むと、ブライアン船長がグラスを掲げる。それに習つて、みんなも用意された自身のグラスを掲げて、ブライアン船長を見た。

そして、全員の顔をゆつくりと眺めると、ブライアン船長はニツコリと笑つた。

「……それじゃあ、私から。長い演説は嫌いだから、短めに言うわ。お互いに生きのびた

ことを祝して、乾杯!!」

『かんぱ——いー!』

そして、その乾杯の音頭が部屋に響き渡り、皆での食事が始まったのだった。食の都フランスの美味しい食事は、ローゼマリーさんの料理に負けず劣らず、しかしやっぱり何より美味しかった。よくよく考えると、ここ数日は缶詰モノの生活をしてきたのだから、そりや美味しいよね。

それから、午後の自由行動時にブルーマーメイドのフランソワーズさんに色んな所を案内されたり、買い物やパフェなどの食事もした。なんだかんだで賭け事をしていなかった私は、そういう豪華な生活を送ることができていたのだが……ゲルトルートさんはどうしたのだろうか。殆ど賭け事で負けていた記憶しかない彼女について考えると、すこし心配であった。

夜にはビュッフェを楽しみ、好きなかだけ食べた満腹感の中、お湯に浸かれた。お風呂は体に染み渡り、シャワーよりも汚れや気持ち癒やしてくれたのだった。皆で浸かって、その感動を共有しあう私達は、きつといつまでも忘れないだろう。

上がった後のベッドなんか、ふつかふか……折りたたみ式のあのベッドと比べ物にならなかった。っていつても、学園に居る頃だってそうだったのだけ……やっぱり船の中で生活していると、そういう当たり前のことが何よりも嬉しかった。

そんな楽しい時間は過ぎていき、夜更け。私は尿意に起こされた。

眠気眼でトイレに向かうため、廊下に出たら……窓辺で黄昏る、えらい美人がそこに居た。艦長帽をかぶっていないし、いつもよりもすつと流れる髪だったから、一瞬だけ分からなかったけれど、そこにいたのはビアンカ艦長であった。

ビアンカ艦長のパジャマは白いワンピーススタイルで、赤髪と似合っていた。

「……」

「……あれ、艦長……?」

「……ハンナ」

「どうしたんですか? もう夜中ですよ……体に障ります」

ビアンカ艦長は何処か懐かしそうにしている、それが気になった私はどうしたのか聞いてみた。実際、そうしている艦長を見るのは初めてだからか、少しだけ心配もしている。

ビアンカ艦長はしかし、再び窓の外の景色に視線を戻して言った。

「いや……実家を思い出したの」

「へえ……そういえばここ、故郷ですもんね」

一緒になって窓の外を眺める。そこに映っているのは港、そしてその町並みだった。天には白い輝きを持つ月があつて、今日は少しだけ欠けているけれど丸みを帯びてい

た。

しばらく黙ってその外を眺めていると、ビアンカ艦長がふっと、呟くように訊いた。

「……明日、行こうと思うのだけれど……ハンナも来る?」

「え? せっかくの団らんですけど、良いんですか?」

「……ええ。もちろんよ」

「……じゃあ、ついて行きます」

「うん。行こうね。……おやすみ、ハンナ」

「おやすみ、ビアンカさん」

私は少し考えてからそう言うと、艦長も微笑んでそう言ってくれた。そして私は部屋に戻ると、また部屋を出る。トイレを探しにでかけたことをすっかり忘れてしまっていたのだ。その場をビアンカ艦長に見られており、少し恥ずかしかった。

この出来事は、どうか内緒にして欲しいと願う私であった。

☆☆☆

翌日、十六日目、遭難十三日目。

未だ船は修理中でやることがないため、三度目の自由行動となった。そのため皆も街

へ繰り出し、昨日と同じ様に休暇を楽しんでいた。

私はというと、ビアンカ艦長と二人でおばあさまの家へと向かった。いくつかの家々と店が並ぶアーケードを通り過ぎ、離れた場所に大きく構えられた家に到着する。その豪邸を見て、私は一瞬意識が吹き飛んだ。あんな豪邸が、ビアンカさんのご実家、ですか……。

「へえ……ここが、ご実家ですか……豪邸ですね」

「そうよ……」

「って、何処行くんですか!? ま、待つてくださいいよおー!」

しかし、その豪邸を無視して裏手に進んでいくビアンカ艦長。勝手知ったる場所だからか足取りは軽いけれど、私は慣れてませんから! そう心の中で叫ぶ私の思いをよそに、ずんずん進んでいくビアンカ艦長。もう少し考慮してほしかったところだ。

そうしていくつかの草木を割って進むと、開けた場所に出た。ざあつと波が岸に打ち付ける音が聞こえ、潮の匂いを運ぶ涼しい風が、この草原を揺らしていた。遠くにカモメの鳴き声が聞こえ、其処だけが何処か切り離された世界のように感じられる。

感嘆の声を漏らし、私は草原を歩いた。

「……わあ……いい場所ですね」

「……そうでしよう?」

しかし、ビアンカ艦長の行くその先は崖だったが、そこにぼつんとなにかがあった。それは――

「…………え、それ、は…………」

それは、十字架であつた。ビアンカ艦長はそれに、跪いて懐かしそうに、愛おしそうに微笑みかけた。そして少し十字架に触れて、撫でる。そこには、『ヨアヒム・フォークラー。海に生き、海を守り、海を往つた勇敢なる艦長、ここに眠る』と書かれていた。

「…………ただいま、お父さん」

「…………お父さん、亡くなつていらしたんですね…………」

「…………」

その言葉に、ビアンカ艦長は何も答えなかつた。その無言が、肯定であることを示している。そう察すると、私も同じように跪いて祈りを捧げた。

ゆつくりと、目を開いてその十字架を私はまじまじと見つめる。白く、立派で綺麗なそれは、掃除が行き渡つていた。おばあさまがきつと、毎日掃除しているのだろう。それとも、この街の皆が掃除してくれているのだろうか。どちらにせよ、人望の厚い艦長であつただろうな。

そう考えていると、ビアンカ艦長がポツリと呟くように私に話し始めた。

「悲しい話で悪いけれど、聞いて欲しい…………父はUーボートのりで、ここの皆の中心だつ

たわ。そんな父に憧れてたの」

「死んじやつてからは、何もかもがどうでも良くなって……それで、やる気もなかったけれど……今は、皆に会えたから。頑張つて、立派な艦長になろうと思つてる」

そして、「もう覚悟は決まっているわ」と私にそう言うビアンカ艦長。その顔は希望に満ち溢れていて、輝かしいものであつた。その決意は私だけでなく、父にも聞かせているように聞こえ、私はそれが少し誇らしかつた。

「……艦長は、誰よりも艦長です。お父さんにも負けなと思います」

「……ふふ、ありがとう、ハンナ。父に対してはもう気持ちの整理は付いてるから、ヴィクトーリアさんとは違つて泣かないわよ?」

「や、泣かせてるわけじゃないです!」

「ふふ、冗談よ」

それから、色んなことを訊いた。ビアンカ艦長のこと。幼い頃から見ていたビアンカ艦長の父のこと。話すビアンカ艦長は誇らしげで、いかに父を尊敬していたのが伝わってきた。そんな話の中で私が気になったのが、ヤーパンの友達についてだった。

「ヤーパン好きで、いつだったか連れてつてもらつたこともあつたわ」

「へえ……ジークリンデさんが羨ましがりそうですね」

「ふふ、そうね。……その時のヤーパンの友達が言っていたの。ブルーマーメイドになるって」

「だから、艦長も？」

「父は同じ様な仕事の、ホワイトドルフィンだったから。それもあつて、私もなろうと思つたわ」

懐かしむようにその当時の情景を、憧憬を語つた。当時のビアンカ艦長は、信じられないことに気弱だつたらしい。友だちもできず、父の後ろに隠れるような子だつたと艦長は語つた。なんて可愛らしいのだろうか。

「越えられない嵐はないんだよつて、難題に挑んで。でかけた先で逸れそうになつた私を、必死に助けに来てくれて……海の仲間は家族なんだよつて……別れるときには、だから、海に出る限りまた会えるつて、その子は言つてくれたわ。……言つていたことは、すべて、本当にそうだつた……」

「……なら、また会えますね」

「……ありがとう、ハンナ。帰りましょうか」

「……はいっ」

そういうと私達はその場所を後にする。そのビアンカ艦長の顔は、スッキリとした笑顔だつた。

☆☆☆

翌日、十七日目、遭難十四日目。

補給はバッチリ済ませ、応急処置も完了し、航路は十全に組み立てられる様になった。どうやら、レオニーさんや他の機関士達も集まって、修理を勉強がてら手伝ったらしい。そして、あとは出港を待つだけとなった。

そこに、学長とはまた違う、美しい老婆が現れた。ビアンカ艦長のおばあさまである。「ビアンカ」

「何、お祖母様……それはっ！」

そうやって差し出すその手には、ビアンカ艦長が持っていた壊れた双眼鏡の、もう一方がのつていた。おばあさまはそれを、大事そうに持っていた。私もそれを見て、つい反応してしまう。だって、それは、艦長が大事にしていたものの、片割れであるから。

「……あ、双眼鏡の……！」

「……見つかつたんだよ。大事に、持っていくなさい」

「……ありがとう、お祖母様。行ってきます」

「いってらっしゃい」

また、ぎゅーっとおばあさまを抱きしめるビアンカ艦長。別れを惜しむように、少し長めであった。……そんな光景を見ていたら、私も少しホームシックになつてくる。お母さん、お父さん、今どうしてるかなあ……。

しかし、その思考はエルヴィーラ副長の声でぶつた切られた。

「至急、全員整列しろ！」

その声が響くと、甲板に乗員が全て並んだ。全員が気をつけの状態で、ビアンカ艦長たちを待つ。私も先に甲板へと移ると、最後にビアンカ艦長はおばあさまから離れて乗艦した。すると、エルヴィーラ副長がビアンカ艦長に体を向けると、ピシッと背を伸ばして言う。

「艦長、全員乗艦しました。準備完了です」

「ご苦労さまよ」

ニツと笑うビアンカ艦長に、エルヴィーラ副長もフツと頬を緩ませた。

「諸君。これより、出航する」

初航海のときのように、ゆつたりと、話しかけるようにビアンカ艦長は言った。

「少し進むごとに問題の嵐に巻き込まれてきた私達は、やつと帰路につく。長かったようで短かったこの約三週間、恐怖も苦しみも、喜びも楽しみも忘れずに戻ろう。あなた達が私の仲間で、本当に良かった！」

珍しい満面の笑みで、ピアンカ艦長はそういうと、一度大きく息を吸った。そして――

「抜錨！ 総員、配置につけ！」

その命を下す。そしてこれまた合わせて皆が元氣よく、声を合わせて言った。

『ヤヴォール・ヘアカピテーション!! (諒解、艦長!!)』

それから、皆は艦に乗り込むと、微速前進で出航した。ゆっくりと、別れを惜しむように離れゆく中で、非番の皆は甲板に出ると、大きく手を振っていた。

「さよーならー!!」

「ありがとう!!」

色んな感謝の言葉と、別れの言葉を口にする。その岸にはタンカー船の方々も居た。

本日は晴天。そう、どこまでも青く突き抜けていた。

第十二話・艦長の答え、私の答え。ハイスクール・フリート

あれから4日が経ち、二十一日目、遭難十八日目にして、私達は学園へ帰還を果たした。船から降りた私達は初めに、謝罪を受けた。まあでも、まさかあの場に海賊船？なんか居るとは誰も思わないだろう。だから、とりあえず学園側は学級費を少し出すことで手打ちとし、ローゼマリーさんの機嫌は良くなった。

それと、学園側は不審船の報告後、パタリと通信が途絶えたことについて訊いてきたが、学園側はその後の応援要請を受けてはいなかったと言っていた。あの子の出来事についての報告で私達艦橋要員の仕事は増えるかと思われたが、ラツヘルさんの記録係としての仕事がそれをカバーしてくれた。ラツヘルさん様様である。

だが、その要請を受けてないという事実には謎が残った。通信は、その前にはできていたはずだったし、通信機類が壊れたのも要請後のはずであった。通信がうまくできなかったのだろうか。そして、そもそも、あの不審船は何だったのだろうか。謎が謎を呼ぶ事件であったが、その難題を乗り越えた今はもう、学園やブルーマーメイドの管轄のお仕事であった。だから、気にせず私達はその報告を提出したのだった。

そしてもう一つ。Uーボートはもうボロボロとなっていたため、ドックに入れられ修理をすることとなった。約一ヶ月間以上かかると言われ、ダートマス校との合同訓練には遅れての参加となると言われた。もちろんその間は休みというわけではなく、座学である。その時の皆の落ち込み具合と言ったら……。

それらをさておいてひとまず、皆が最初に向かったのはお風呂だった。まとまってまずは清潔にしてから報告とか、色んな事後処理をするということだ。

しかし、ピアンカ艦長だけはその場に姿が見えなかった。一体どこに行つたのか。私は心配しつつも、レオニーさんが口説いてくるのでエルヴィーラ副長を呼んで、その場を回避しながらお風呂へと向かったのだった。

☆☆☆

重厚な扉のその先に、見晴らしの良いガラスをバックに、一つの立派な机と椅子を中央に配置させた部屋があつた。そして、ロッテンベルク学長がその席に座つていた。その傍にはマイヤー教官が立つており、ここに来る子達の事の行く末を見守っていた。

そこへ現れたのは、ピアンカ・フォーグラ。学園始まって以来の初のUーボートの艦長だった。

「まずは、よく無事に戻ってきてくれた。そう言おうか」

少し離れた位置に立つビアンカに、学長はそう労いの言葉をかける。ビアンカは、ただそれを清聴していた。

「そして、おめでとう。君たちは他の艦より長く航海できていた」

「他の艦より……？」

「そうだ。大体の船は早々にリタイヤしたよ。ただし、君とは違った理由でね」

「……」

それは、ビアンカもリタイヤしたような物言いであった。しかし、ビアンカはそれを聞き返すこともせず、受け止めていた。そして学長はふう、とため息をつくと続けた。

「そもそも、君のことだ。あの時こう考えていただろう？ 早々にリタイヤしよう、とわざわざそんな危ない目に、船員を巻き込みたくないかね」

その言葉に、ビアンカはそっと目を閉じる。

「……否定はしません。結果的に長い遭難となりましたが、あの件がなければそうしていたと思います」

「その行動はよろしくない。が、その行動原理は大事にすべきだ。だが、一方で優しさが甘さを生むこともある。気をつけたまえ」

「……」

「ほう」

「父から毎日のように言い聞かされていた海の恐怖でしたが、実際に航海に出て、その怖さを実感しました」

「その上では、在り来りな答えかもしれません。でも、覚悟を持って行わなければ、多くの人が死んでしまう。その上で、私達は乗り越えました。色んな恐怖に襲われましたけど、それが一番堪えた三週間でした」

そして、静寂が訪れる。自身の得た怖さは、自身を変えるためのもの。これが正解でなくても、私はこの怖さを克服するために努力する。ピアンカはそう考えて、面と向かってそう答えたのだった。

それを見た学長はフツと微笑むと、目を閉じた。

「……それでいい」

優しいその言葉が、あたりのピリピリとした緊張感を和らげた。ピアンカは、それに安堵する。答えは、ちゃんと出せたのだ。

「この課題の真意は実際の窮地で何が自身の真に怖いものかを知ることだ。それだけで長く海を生きていける」

そういう学長は、経験談があるのだろう。言葉には確かに重みがあった。そして、つ

づけてビアンカ自身の得た怖さについて助言をした。

「君のその決断の恐さというのは、命取りになりかねない。常在戦場の覚悟を持って一層奮起し、決断力を養っていきたまえ」

「……はい」

「行つてよろしい。今後とも励みたまえ、Uーボートの狼娘」

「失礼しました」

部屋を出たビアンカを、学長はただただ見つめていた。これからが、楽しみだ。そう呟いた言葉は、隣りにいたマイヤーには聞こえていた。

そうして、ビアンカは学長との問答を終えたのだった。

☆☆☆

それから少しして、ビアンカさんと私は学園を歩いて回った。ずっと歩けない様な環境下にいたものだから、こうして踏みしめて歩くことが少し気持ちよかった。ただ、エーリカさんに目をつけられたエリヴィエラさんが少しだけ可愛そうではあったけれど……流石に、十周は勘弁してあげてくださいねと釘は指したが……どうなることやら。

「それです」

「？」

すると、ビアンカ艦長が私に声をかけてきた。少し黙って隣を歩いていたのだが、急にどうしたのだろう。なんですかと表情で聞き返す私に、ビアンカ艦長は続けて質問をした。

「貴女は何故ブルーマーメイドになろうと思ったの？」

「え？」

その質問は、いつかしたものだ。その唐突な質問に私は少し驚いてしまう。急だったし、そのときは確か答えたはずのものだったからだ。

でも、ビアンカさんはそれを見破っていた。

「……あのときの言葉は、嘘ではないかもしれないけれど、本心ではなかった気がしたから」

「……流石、艦長ですね」

観念したような、少し情けない声をだす私。本当に、船員皆を見ている人だなあとつくづく思った。そして、その流れで私は白状する。その時のことを。

「本当は流れでやったただけだったんですよ。理由なんて、全くありませんでした」

そう答える私に、しかしビアンカ艦長は微笑んでこう聞いた。まるですべてが分かっ

ているかのように。

「……ねえハンナ、答えは見つかった?」

「……はい!」

だから、私は元気よく返答した。そう、もう流れや言われたからという理由では無い。私はわたしの意志で、この航海長という立場に立ったのだ。私の意志で、ブルーマーメイドを目指そうと思ったのだ。その理由は……!

「海の仲間は、家族だから。助けたいし、守りたい。皆といたいし、皆と乗り越えていきたい。だから、家族のために、わたしはブルーマーメイドになりたいです」

「……ふふ、貴女らしいわ」

そう微笑むビアンカさんに、私は満面の笑みを返した。答えは得た。私は、私らしく、私の想いで、なってみせる。そう誓ったのだった。

☆☆☆

あれから二日後。学内にある中庭の、とあるベンチにて。

昼食にサンドイッチを食べていると、中庭に隣接する渡り廊下で、ある人物とであつた。

「あら、テア艦長」

「……ビアンカか」

そう、海の妖精……グラーフ・シユペー艦長のテアだった。彼女は私達の状態を聞いていたのか、フツと微笑むところ言った。

「いろいろとあつたようだが、無事の帰還、おめでとう」

「そちらこそ。最後だったんだってね。素晴らしいわ」

私は残っているサンドイツチを一つ差し出しながら、その帰艦を祝った。それを受け取るテア艦長はしかし、いつもの可愛らしい真顔に戻るとその賛美を否定した。

「……いや、私一人ではここまでの結果を出すことはできなかつただろう」

そして、フツと笑って、少し自慢げにこう言った。

「私の副長は最高の副長で、な」

あまり表情の変わらないこの子が、微笑んでそう言うなんてね。しかしそれを聞いた私も、思い当たる節をふと思いついて、笑った。

「なるほど。ふふ、貴女もなのね」

「何がだ？」

キョトンとするテア艦長に、私は続ける。それも同じように自信を持って、自慢げに。

「最高の仲間を得たって、自信を持って私も言えるわ」

そして、少しだけ静寂が訪れた。風が頬をなで、潮の香りを届けてくれる。揺れる髪とは対照的に私達の心は同じくして平静であった。

私達はお互いに、お互いが素晴らしいものを得たと再認識しあえていたのだ。

私は、ふつと微笑むとテア艦長に提案した。きっと、楽しい話ができるだろうとそう思つて。

「……今度、ゆっくりお話しないかしら。皆も連れて」

「良いだろう。今度はそう——」

「——最高の仲間を連れて、な」